

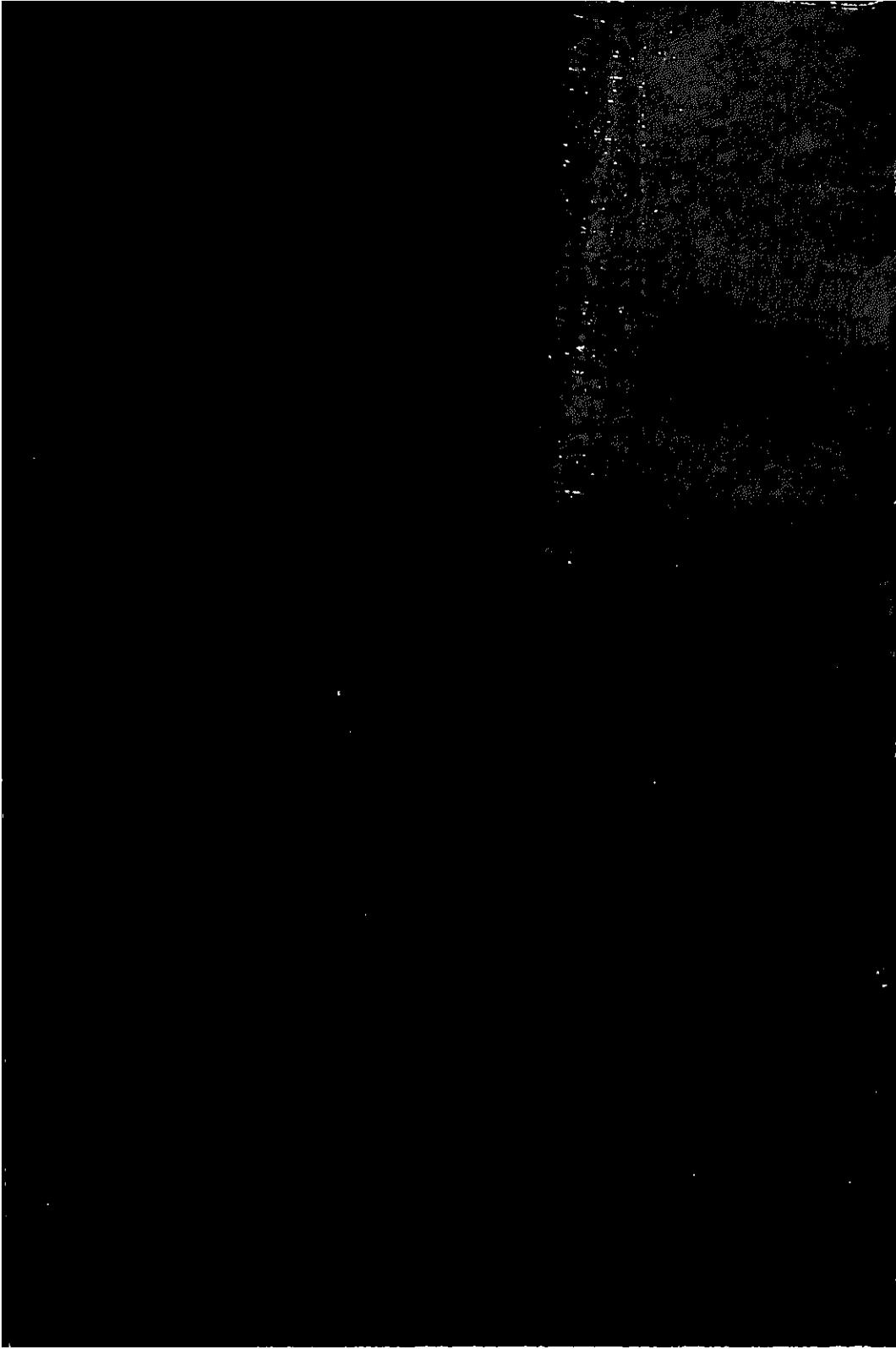
國語研究

都 隆 研 究

——河津清三郎とその時代——

第 12 集

東京大学国文学部国語学研究室編



は し が き

東京都高等学校「倫理・社会」研究会

会 長 徳 久 鉄 郎

昭和48年度の研究主題は、評価研究に発する授業方法への探求であつて、ここにその精華を一応、公表することになつた。都倫研の研究業績は、あるいは進歩の遅々としていることと批評される向きもあるかと思うが、創立以来の努力をモットーにした着実さと、実さいの公開授業を基にしたの討議の積み上げによる誠実さとに目をとめられたいと思う。

ソクラテスの対話形式による教授はいわゆる問答法によつて無知の知を自覚させることを目的とした。このことを強調してプラトンは理性的に弁証法へと発展させる試みを繰返し、その試論の中に展開しているが、われわれのこころみもまた、この系統を追うものといつてよいであろう。教師の直観的把握によつて現実の教授を評価し、これを互の仲間によつて論駁を加えつつ理想の形態を求めてきた。われわれの抱負は、いつの日か、精緻な体系へと組上げられてゆくことであろう。

この研究紀要を纏めあげるにあつて、事務局の委員の労も去ることながら、多くの現場関係者のお世話になつた。また、側面から援助して下さつた、いくたの会員以外の方々にもご厄介をかけている。この小冊の成ることによつて、お礼の言葉にかえたいと思う。

(49. 3. 12)

目 次

はじめに	会長 徳久鉄郎 1
研究分科会参加者名簿	 4
I 研究主題と研究体制ならびに紀要の編集方針	 5
II 研究会の全般的活動の概要	 7
「教科書研究」特別分科会研究経過報告	 9
III 研究報告		
① 第1分科会<現代と人間>研究経過報告	 12
「現代社会と人間」における授業展開と評価問題	小川輝之	... 14
自己展開学習の一実践と評価	木戸能史	... 18
自己展開学習の実践と課題(その2)		
『何をどう評価するか』	東木忠彦	... 23
多層評価への試み	清水洋三	... 29
とまどわせ、ハッとさせ、ニコニコと考えさせる		
○×式問題の試み	森名次夫	... 32
各国人権宣言にみられる権利の問題の学習	大木 洋	... 36
「巨匠ピカソの生涯」を倫社教材に使って	宮崎宏一	... 40
私の評価問題	杉原 安	... 46
② 第2分科会<思想の源流>研究経過報告	 50
「ソクラテスの弁明」原典学習とその評価問題	細谷 斉	... 52
ソクラテスの原典学習の試み	佐々木誠明	... 57
キリスト教	一授業と評価一	海野省治 ... 61
仏 陀		吉沢正晶 ... 66

「孔子の考え方」の評価について

—工業高校の生徒の反応— 本間 精 ... 71

「思想の源流」その導入のしかたと評価例 小笠原悦郎 ... 76

③ 第3分科会<現代と思想>研究経過報告 80

「経験論」の学習にあつての覚え書き 服部進治 ... 81

社会契約説 香川 弘 ... 85

人間関係と思想のテスト 沼田俊一 ... 90

ルソーの人間観・社会観 小川一郎 ... 96

カ ン ト 井原茂幸 ... 100

マルクス主義 永上肆朗 ... 104

キルケゴールの愛の弁証法 佐藤 勲 ... 109

倫社学習における評価の諸問題 中村新吉 ... 116

④ 第4分科会<日本の思想>研究経過報告 120

日本人の思考様式について 佐藤哲男 ... 121

倫理・社会における評価とその問題 勝田泰次 ... 125

古代日本人のころ 浅香育弘 ... 129

親 鸞 池上 裕 ... 133

石 田 梅 岩 木村正雄 ... 137

福 沢 諭 吉 菊地 晃 ... 141

キリスト教思想と日本—「内村鑑三」 高野啓一郎 ... 145

東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約 149

事務局より 153

あ と が き 154

研究分科会参加者名簿 (順不同)

〔第1分科会〕

- 大木 洋(王子工) ⊙小川輝之(羽田工) 木戸能史(育英高専)
 東木忠彦(育英高専) ○宮崎宏一(江北) ○秋元正明(芸芸大付)
 ○鮎沢真澄(国立) ○泉谷まさ(江戸川) ⊕杉原 安(保谷)
 ○葺名次夫(市谷商) ○平沼千秋(東大和) 村松悳二郎(東村山)
 ○渡辺 勉(南葛飾) 川崎啓介(四商定) 清水洋三(荻窪)

〔第2分科会〕

- ⊙海野省治(上野) ⊙野吾信雄(赤城台) 伊佐進一(兩)
 本間 精(田無工) ○渡辺梧郎(文京定) ⊕細谷 齊(墨田川)
 ○佐々木誠明(鷺宮) ○石森 勇(竹早) ○小笠原悦郎(日大二)
 ⊕吉沢正晶(葛飾野) ○御厨良一(三田) 渡部 武(戸山)

〔第3分科会〕

- ⊙佐藤 勲(板町) ○田中正彦(小石川) 茂野本史(江北)
 津田真一郎 ○川瀬吉郎(北野) 小平 克(兩國)
 ○沼田俊一(大泉) 服部進治(豊多摩) ○別府淳夫(教育大付)
 ○井原茂幸(永山) ○中村新吉(千歳) ○永上肆朗(府中)
 ○小川一郎(胥山) ○中村佑二(三田) 香川 弘(安田学園)
 柳田 学(井草) ○寺島甲祐(福生) ○川上清美(福生)

〔第4分科会〕

- ⊙勝田泰次(本所) ○池上 裕(池袋商) ○高野啓一郎(洗足一)
 ○坂本清治(白鷗) ○菊地 堯(国分寺) ⊕木村正雄(志村)
 ○高橋定夫(板橋) ○佐藤哲男(江戸川) 浅香育弘(葛飾商)

○内田兎怒夫(攻玉社)

○印は分科会世話人
 ○印は特別分科会参加者
 ⊕印は特別分科会世話人

I 研究主題と研究体制および紀要の編集方針

研究部長 永上 肆 朗

研究副部長 杉原 安 細 谷 齋

〔本年度の研究主題〕

評価を中心とした授業研究

〔研究主題設定の趣旨〕

①プラン（計画）→②ドウ（実施）→③シー（評価）は教育活動のサイクルであるが、これまでの研究の動向は①→②にそそがれていた。しかし本来指導が②→③を予測するものであることはいうまでもない。倫社の目標にして指導の成果をどういう「観点」に立つてどう「評価」し、どのように指導上の改善に役立てていくかは教科指導のポイントであろう。

したがってこれまでの日日の倫社指導の中で、指導内容がいつたいどれだけ生徒に理解されてきたかの研究や共通理解については、なお不充分であつたといえよう。この反省を通してこそよりよい指導法なり生徒の能力にマッチした指導内容が吟味される必要があるのではなからうか。

こうした点からみてこれまでは評価は組織的に研究されていなかつたといわざるをえない。もとより評価は授業の展開にあたつて生徒の実態をどうとらえ、どうきりこんでいくかという学習過程に適切に位置づけられなければならない。内容の豊富と精選、指導の個性化と多様化などさまざまな授業展開が今後とも試みられよう。こういう状況に対応して、よりよい授業、「考えさせる授業」をめざしていくうえで「評価」の研究はますます必要になってくる。以上の趣旨をふまえて本年度は各自の授業体験をもちより授業展開のあり方を実践的に明らかにし、御社学習における評価のあり方を研究する。

〔研究体制〕

- 第一分科会 現代と人間
第二分科会 思想の源流
第三分科会 現代と思想
第四分科会 日本の思想
世話人 2名ずつ。

※特別分科会「教科書研究」分科会を特設する。世話人 4名。

〔研究方法〕

- 1) 各分科会は項目を設定し、分担し研究。
- 2) 項目の展開にあたっては
 - ①学習内容をどう構造化するか
 - ②学習過程における設問の位置づけや指導上の留意点
- ③方法や内容を吟味、反省するための評価をどうするかについて研究する。

〔執筆要項基準〕(4 8.1 1.6)

○テーマ名(項目名)

㊦とりあげた理由 0.5 p

- ・精選の視点(教材観)、授業展開にあたっての導入、授業計画の中での位置づけがわかるようにする。

㊧指導の方法と観点 1.5 p

- ・指導の内容やポイントを示し、授業構造や流れ、指導過程、学習形態、準備資料、授業の展開例がわかるようにする。
- ・内容に即しての「評価の観点」を示す。

㊨評価の方法 2 p

- ・ここでは各自の授業体験をふまえた評価のあり方についての卒直な考えや実践例をおりこみながら自由に記述する。
- ・但し、テーマに即した各自の評価問題例(ペーパーテスト)を必ず紹介する。・これに関するテスト結果、生徒反応などの実態分析。
- ・さらに指導のねらい、「評価の観点」にてらしてのズレを明らかにしたり、考察を加え、問題点を示す。
- ・小見出しを以上のように三つの柱(仮称)にしぼるが、いずれにしても評価研究の趣旨が、論文の中に整理されてにじみでてくるように内容構成する。各自の授業体験と反省をふまえ、それが投射されたものでありたい。

Ⅱ 研究会の全般的活動の概要

< 第1回 > 6月5日(火) 総会・研究発表大会 都立教育会館

1) 総会

挨拶 会長 徳久鉄郎氏
会務・決算の報告ならびに承認 都立千歳高 中村新吉氏
事業計画・予算・新役員の選出 同
研究事業計画・研究主題の提案承認 都立府中高 永上肆朗氏

2) 研究発表

「昭和47年度の総括報告」 都立青山高 小川一郎氏
「倫社学習における原典の扱い方と読書指導の実際的試み」
教育大付高 別府淳夫氏

3) 講演

「教育雑感」 前神奈川教育センター所長 鈴木重信氏

< 第2回 > 6月29日(金) 第1回例会 都立戸山高

1) 研究授業

「源流の思想一齋教」 都立戸山高 渡部 武氏

2) 研究発表

「私の倫社指導」 都立王子工高 大木 洋氏

3) 講演

「青年期における人間形成」 都立大教授 詫摩武俊氏

4) 分科会

分科会の結成, 世話人の選出, 分科会年間研究計画の決定

< 第3回 > 9月21日(金) 第2回例会 都立府中高

1) 研究授業

「マルクス主義」 都立府中高 永上肆朗氏

2) 研究発表

「源流指導の評価と実際」

都立上野高 海野省治氏

3) 講演

「道元思想」

仏教学者 秋月龍珉氏

4) 特別分科会「教科書研究」の活動方針打ち合わせ

< 第4回 > 11月16日(金) { 全倫研関東大会と共催 } 栃木県立
宇都宮高

1) 研究授業

第3回例会

2) 研究発表

「倫社において公害を展開する実践例」都立羽田高 小川輝之氏

3) 分科会 第1「現代の公害と倫理社会」 第2「現代社会と高校生の意識」 第3「現代社会の諸問題と現代の思想」

4) 講演

「哲学と人間の問題」

東大教授 原 佑氏

< 第5回 > 11月6日(火) 第4回例会 都立福生高

1) 研究授業

「仏教の思想」

都立福生高 川上清美氏

2) 研究発表

「現代を考える倫社授業」

私立安田学園 香川 弘氏

3) 講演

「近代と現代」——ヘーゲル哲学の再検討——成蹊大教授 上妻 精氏

< 第6回 > 2月4日(月) 第5回例会 都立国分寺高

1) 研究授業

「福沢諭吉の思想」

都立国分寺高 菊地 堯氏

2) 研究発表

「倫社における評価とその問題」

都立本所高 勝田泰次氏

3) 講演

「日本思想史の考え方」

武蔵大教授 今井 淳氏

「教科書研究」特別分科会研究経過報告

1. 活動経過

6月5日の都倫研総会で〈教科書研究〉特別分科会を設置する。その趣旨は、新教科書の分析と検討を通して「教材」としての教科書について相互の認識と理解を深めるための研究である。まず量的分析を行ない、さらに質的、内容の分析へ向う予定である。

8月22日第1回の世話人会を永上氏宅で行なう。学習指導要領を参考にしながら教科書研究のさまざまな視点が話し合われた。例えば①教科書の本質。②教科書と学習形態とのかわり。③量的分析の視点。④質的分析の視点。⑤現行の教科書との比較検討。⑥教科書の問題点などである。

9月7日第2回世話人会（於千歳高）教科書の量的分析の対象と内容について話し合い、その骨子を決定した。

9月21日第1回全体会（於府中高）、例会后全体会をもち、量的分析について説明し17社の教科書分析の作業を依頼する。担当の教科書と担当者は、下記の通りである。

東書（勝田）、中教（杉原）、実教一高校倫理社会一（海野）、実教一倫理社会一（高野）、学図（宮崎）、三省堂（木村）、教育出版（坂本）、講談社（菊地）、山川（佐藤勲）、自由（内田）、角川（吉沢）、学研（別府）、第一学習社（小川輝之）、東京学習社（細谷）、清水一現代倫理社会一（永上）、清水一倫理社会一（泉谷）、帝国書院（佐々木）

11月21日第3回世話人会（於保谷高）

1月12日第4回世話人会（於千歳高）質的分析について意見交換を行う

1月24日第2回全体会（於鷺宮高）上記の量的分析の結果について話し合い、さらに細谷氏のレジメにより質的分析の視点、作業プランを検討した。例えば、①指導要領の立場からの視点、a 倫理社会の目標がいかにかまえられているか、b 「内容」がいかにか組織、構成されているか、学習のポイント

がいかにおさえられているか、c 7つのものの考え方の基本的問題についての理解がいかにか具体化されているか、d 「内容」のとり扱いについて配慮すべき諸点がいかにか具体化されているか、e 指導要領が示している4つの学習方法の工夫が、いかにか具体化されているか……。②生徒の意識や学習課題、教師の立場からの視点 a 生徒の心身の発達段階、学習経験の程度に適應した読み易い、理解し易い内容構成、記述内容になつているか、b 学習のねらいやポイントが焦点化されているか、c 生徒の生活意識や問題意識がくみ上げられた記述内容になつているか……。③日教組の新教科書批判の立場からの視点などである。

2月9日第3回全体会（於日大二高）教科書の編集に携つた先生方の意見を聞きながら、質的分析をさらに深める予定である。

2. 活動内容

量的分析の項目は下記の通りである。

(1) 本文の内訳（頁 %）

①序、②現代と人間、③人生観 世界観、④巻末資料、⑤その他

(2) 現代と人間の内訳

①現代社会と人間関係、②青年と人間形成

(3) 人生観、世界観の内訳

①思想の源流 a ギリシア思想 b キリスト教 c インド思想 d 中国思想
②現代と思想 a 東洋の中世 b 東洋の近代 c 東洋の現代 d 西洋の中世 e 西洋の近代 f 西洋の現代
③日本の思想 a 近代以前
b 近代以後

(4) 人生観、世界観でとり上げられている思想家名（とり上げられている観点としては、本文の行、回数、脚注、写真、巻末資料、人物解説である）

(5) 人生観、世界観でとり上げられている書名（原文が抜すいされているもの）

(6) 現代と人間でとり上げられている人名（観点は人生観，世界観の場合と同じ）

(7) 現代と人間でとりあげられている図版，統計，資料の量と項目
上記の量的分析の結果から若干の気のついた点を指摘すると

①巻末資料が現行の教科書より多くなっている。すなわち巻末資料がないのは17社中4社のみである。

②本文の内訳の中で、〈現代と人間〉〈人生観，世界観〉のいづれにも入らない部分がふえている。例えば、今日の問題，民主主義を生かす道，現代に生きる課題……などで17社中11社におよんでいる。

③現代と人間の中の〈現代社会と人間関係〉と〈青年と人間形成〉の割合が教科書により大きな違いがみられる。例えば、両者の割合がB社は、約9対1であるのに対して、A社は4対6 N社は3対7である。

④人世観，世界観への導入，例えば，思想の源流の導入，世界の歴史と世界の諸思想……などをおいている所が数社ある。

⑤人生観，世界観の中で日本の思想の割合が多い所で35%，少ない所で16%である。この事は、とりあげ方にも関係し、古代日本人の考え方から始めている所、それを省略して直接日本の仏教から入っている所などである。

⑥とりあげられている思想家名をみると、例えば、現代と思想の所で、西洋においては叙述に一番多く行数をさいているのが17社中カント（9社）、マルクス（5社）、ヘーゲル（1社）、デカルト（1社）、ゲーテ（1社）である。また日本（近代以前）においては、道元（6社）、本居宣長（6社）、親鸞（4社）、日蓮（1社）である。

量的分析についてはまだ未集計の部分があるので、今後さらに検討したい。

当分科会の活動に当つては、永上，中村新吉，菊地の諸氏の継続的な配慮を受けております。なお分科会の世話人は、木村（志村高），吉沢（葛飾野高），細谷（墨田川高），杉原（保谷高）である。（杉原記）

Ⅱ 研究報告

第1分科会<現代と人間>研究経過報告

第一回分科会は10月18日(土)東京都教育会館で開いた。参加者6名。先ず本年度研究テーマである「評価を中心とした授業研究」をどう受けとめ解釈するかを討議した。研究部原案にあつた「評価について組織的に研究」等の表現から、評価の研究に重点をおくのかと解釈した向きもあり、評価を余り詮索するのは逆に倫社の発展をとめるのでは、との意見もあつた。授業をいかに生き生きしたものにするかの視点に立つた評価が大切な立場から、具体的ケースに於ける具体的評価を検討した。例えば、夏休みに於ける具体的な課題をどう出し、どう評価したか。次に本テーマに関し各自解釈にズレがあるのは、評価それ自体に関し各自解釈が異なるからだとの認識から、評価に対する共通理解、その多様な形態と問題点を出し合う事になつた。目標をたて、授業をし、反応を確かめるそういう意味での広義の評価と、ここではとらうと一致し、ようやく研究部案に近づく。更にマイナスの評価、評価の限界、問題意識をめぐつての評価のズレ、自己申告評価等が討議された。

第二回分科会は、11月10日(土)市谷商高に於て開かれた。参加者7名。今回は討論の論点をはつきりさせ、かみ合わせるため、各自評価に関する各自の考え方が盛り込まれているような具体的資料を持ち合わせた。宮崎先生(「評価に関する私観」『現代と人間』に関する観点ねらいについて)、杉原先生(中間テスト問題)、章名先生(集団社会、人間の分野について、テスト問題)、東木先生(生徒提出文章)、大木(価値と評価)。そして、各自が具体的評価の実例を述べた。例えば、評価の対象として、考え方を合理的に裏付ける努力をしているか、発言した回数、提出レポートの枚数、その表現力等客観的なものに限定している等の意見が出された。又評価の目安として、倫社の評価は生徒の人格に与えるような側面もあるので高くやるようにしている、との意見もあつた。次に紀要執筆の分担等を決定した。

第三回分科会は、12月13日(木)東京都教育会館に於て開かれた。参加者は6名。先ず本分科会の頑張り男、茸名先生が16ページにわたる麗大な、ギリシア思想に関するプリントを用意し、いかなる角度から授業をしたか述べ、これに対応して、「悩ませ、とまどわせ、考えこませ、ハツとさせニコニコさせる〇×式のすすめ」のテーマのもと、授業の力点のおき方と評価に対する考え方を、プリントを使い提示した。その生き生きした授業への情熱は他の者を驚ろかせた。次に東木先生が、生徒の作文を引用し、低学力といわれる生徒からいかにして創造的能力を引き出したか、これに関係して人を評価することの難しさが提示された。最後に各自、本年度研究テーマの中間発表を行い、年度内の分科会活動を終りとした。

(大木・小川記)

〈第1分科会〉 現代と人間

「現代社会と人間」における授業展開と評価問題

都立羽田工業高校 小川輝之

㊦ とりあげた理由

これまでの授業は、教科書を中心に、いわば教科書の内容に則して講義を主体として行なってきた。しかし、その結果生徒の関心と呼びおこす授業ができなかつた。生徒もよく理解できず、不満足のものであつた。

そこで今年には授業計画を作成するにあたり、次のようなことを考慮した。第一に工業高校には、より多様な生徒が入学しており、しかも学習意欲もあまり高くないという現実を認識し、第二にこうした認識にもとづいて、思いきつて内容の精選を行ない、第三に倫社授業の目標を、生徒達が書物を読み考え、自分なりの意見をもつことにおいてみた。それゆゑ、評価問題も評価の基準も、従来のように学習内容の理解度を測定することよりも、上記の三点に立脚しつつ、学校における学習の一過程として位置づけてみた。

㊦ 指導の方法と観点

年間の授業計画（㊦に従つた指導計画）

I 「現代と人間」（現代社会を考える — 一学期）

①「公害」※②を考えさせる導入として10時間配当

②「現代社会の特質」※「公害」問題から現代社会の特質を体系的に把握させる。

③「社会集団における人間関係」

④「青年と社会」「青年期の課題」※Ⅱ、Ⅲへの導入として配慮する。

〔学習形態〕作業学習・発表学習・講義学習・読書学習

〔準備〕毎時間テーマを与えて、生徒に資料を収集・整理させる。私自身

も資料を収集し、それをプリントとして生徒全員に配布する。

II 「人生観・世界観」(先哲の思想から学ぶ — 二学期)

①「源流思想」

②「ソクラテスの思想」※思いきつて14時間を配当

〔学習形態〕源流思想については講義を中心としたが、ソクラテスの思想については、『弁明』を読ませ、各自が分担した2～3章について次のような観点から発表させた。内容をまとめさせ、何が問題にされているかを指摘させ、現代とのかかわりを考えさせた。

〔準備〕あらかじめ宿題にすることが困難なので、教室に毎時間辞書や資料を用意させ、その時間内で『弁明』を読ませ、考えさせるようにした。

III 「人生観・世界観」(現代の思想的状況と課題 — 三学期)

①「現代思想」※現代思想を指導する場会には、各思想の形成に大きな影響を与えた近代思想にもふれる。

②「現代の思想的課題」※民主主義の倫理を、一学期に学習した「公害問題」や「部落問題」を通して考えさせる。

〔学習形態〕①については講義を中心に、②については討論学習を中心とした授業展開を行なう。

〔準備〕特に部落問題は文学作品や統計資料をプリントし、利用する。

以上が、今年の年間指導計画であるが、導入として用いた「公害問題」を例に、具体的に授業展開の過程とねらいを示しておこう。

公害を導入として扱った理由は、それが現在最もトピカルな社会問題であり、生徒も容易に関心を持つだろうと考えたこと、また将来技術者として生活していくであろう工業高校生の、現代文明あるいは科学技術に対するひとつの立場を作らせようと考えたからである。

現代社会は物質的には豊かな社会であるが、それは同時に公害をはじめとするいくつかの病弊を内包したものであることを、具体的な統計資料の読解を通じて理解させる。次に公害問題に関する文献資料を読ませることによ

つて、このような社会をもたらしたひとつの原因がキリスト教における"自然観"にあり、さらに現代社会の病的側面を解決して真に豊かな社会を形成するために、工業高校生として"科学技術のあり方"を、どのように考えなければならないかを模索させようとした。

㉑ 評価の方法

以上のように、文献を読み、考え、自分なりの意見を持つことに、今年度の授業目標をおいたのであるから、授業展開も評価問題も、また評価の基準も前述の目標に合致しなければならない。それゆえ、「試験」も「目標」も…→「授業」←→「思索」←→「試験」という学習における一過程にすぎないし試験を通してさらに生徒の思索をたかめ、次の授業展開に生かされていかなければならない。試験に対する評価の基準も、主に講義で学習されたものをいかに理解したかばかりでなく、読書学習・講義学習などにどの位参加し、いかに自分の考えを作り上げるために努力したかにポイントがおかれよう。

こうした観点に従つて、これまでどのような評価問題を作成し、その結果どのような問題が生じてきたかを具体的に述べよう。

㉒ 評価の問題例

下記に示したのは、一学期の評価問題である。なお、この試験は教科書・参考書あるいは授業で使用したプリントなど、何をみることも許可してある。

- (1) 現代社会は「産業化社会(工業化社会)」と「大衆社会」によつて特色づけられる。では我国が産業化社会であるかどうか、どんな指標によつて知りうるか。また大衆社会とはどんな社会状況をいうのか。
- (2) 我国の社会は"タテ社会"といわれる。その理由を家族集団・地域社会・職場集団を通して具体的に説明しなさい。
- (3) 文明の発展に大きな影響を与えた自然観はキリスト教の自然観だといわれる。それではキリスト教の自然観の特色をギリシアの自然観と対比して述べなさい。
- (4) 倫社資料No.12, 貝原益軒「和俗童子訓」を読んで、家族における人

間関係のあり方として問題にしなければならない点、また核家族時代においても十分参考にしなければならない点を、各々指摘しなさい。

〔評価問題の意図・ねらい・評価の基準〕

高校生にとって、やや難解な問題であつたようだが、この試験時間を通じて、現代社会を客観的・体系的に把握させ、また社会集団における人間関係として何が問題となるかを考えさせようとした。(1)(2)では生徒の理解度を測定し、(3)では源流思想を現代とのかかわりに留意させつつ、同時に現代文明を考えるひとつの動機にでもなればと思ひ、(4)は現代家族に対する問題意識を基底としながら、資料をいかに批判的に読みこなすかをみようとした。

採点は上記のねらいや基準に則して、しかも誤字・脱字がなくよく表現されているかを中心に、3段階で行なつた。これに授業に対する参加度(具体的には発表・質問回数)を加味して、一学期の評価とした。

なお、二学期は試験を行なわず、『弁明』の読後感を原稿用紙3枚以上にまとめさせた。読後感の評価は次のような観点で、3段階で行なつた。

- ①よく読んでいるか。
- ②自分自身の力で考えようとしているか。
- ③誤字・脱字がなく、よく表現されているか。
- ④原稿用紙を正しく使っているか。(レポート量も評価の時に考慮)

回 反省点

今年度の授業は、私なりの授業目標をたて、それにそつて授業を展開し、評価問題を作成し、評価を行なつてきたのであるが、必ずしも年度はじめに意図したようにはいつていない。生徒達はなにかいろいろのことをやらせられるという意識が強く、授業は授業、試験は試験とばらばらになり、授業や試験で考えさせたことが生徒の日常性の中に深く滲透していかない。これらの諸問題は来年度の授業計画や実践に十分生かしていかなければならないが、授業に目標をたて、それに従つて授業を展開し評価問題を作成することには誤りがなかつたといえそうである。

自己展開学習の一実践と評価

育英工業高専 木戸能史

1. 評価について

倫社に接して自己展開学習の理論を知つたが、今年実際にゼミを指導することによつて、倫社教育の困難さ、のみならず“評価”の難しさに直かに当ることになつた。

fig 1

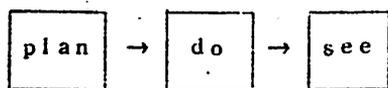


図1のように何らかの目標を設定し、それを達成するために行動し、その結果を観察して判断を下す一連の行為の最終段階

に“評価”が位置づけられる。

一つの考え方として設定した指導目標に対して実際に生徒が学習した内容がどれ程満足しているか、即ち目標達成度だという見方が成立つ。ところが教授目標が知識の正確な伝達にあるとする主要教科のような場合、この考え方は成立するわけであるが、倫社の場合、それも自己展開学習のように、自己啓発を目的とする場合、その考え方は適切ではない。→もちろん、思想史・人間・社会の理解のための方法論などが知識であることは明らかである以上その範囲において限定的に先の“評価”を下すことは可能である。→ただそれらは常に条件づきの評価であることを忘れてはなるまい。

それでは自己啓発を主眼とされる場合は、生徒自身がその学習活動を通じて、どれ程、自己啓発され、人間的に成長し得たか、その度合いを評価とする。という考え方が成立つ。これが果して完全な評価ができるかという問題があるが、完全にという言葉が付けば不可能であると結論せざるを得ない。それでは不完全であることを前提として、その中でどれ程理想的な評価に近づき得るのだろうか。それが我々に与えられた課題ではなからうか。

また後者の評価の場合、前者と異なる点は、評価基準が学習者の外（指導

目標)にあるのか、あるいは内(学習者自身)にあるのかという点である。学習者自身にあるとすれば、その評価は客観的なものになり得ず、まして一連の数字(五段階)で表わし得ない。

また、評価も教育行為の一段階であるとするなら、教育目的の一つである生徒が学習行為に興味を示し、しかもそれが内容の理解(学習の成立)に導くものでなければならない。

図2において⑦の指示であるが、学習心理学の用語を用いれば、Knowledge of Resultという問題である。

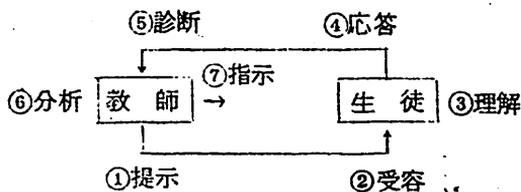


fig 2

直訳すれば結果に対する知識ということになる。生徒が

自分の為した学習行為に対して教師からの応答がどのようなものかによつて彼のそれからの学習行為(意欲)に大きな影響を与えるというのは周知の事実である。即ち、生徒の行為が真に自発的、努力的なものであつた場合、それを認めるならば、結果の正誤はともかくとして、その後の彼の行動によい影響を与えるだろう。またそのような雰囲気のもとで誤りを正すことは、彼らにそれを受入れることを容易にする。それに対して、もし逆にその指示が働けば彼の学習意欲を損ない、それこそ、学習以前の問題となつてしまう。

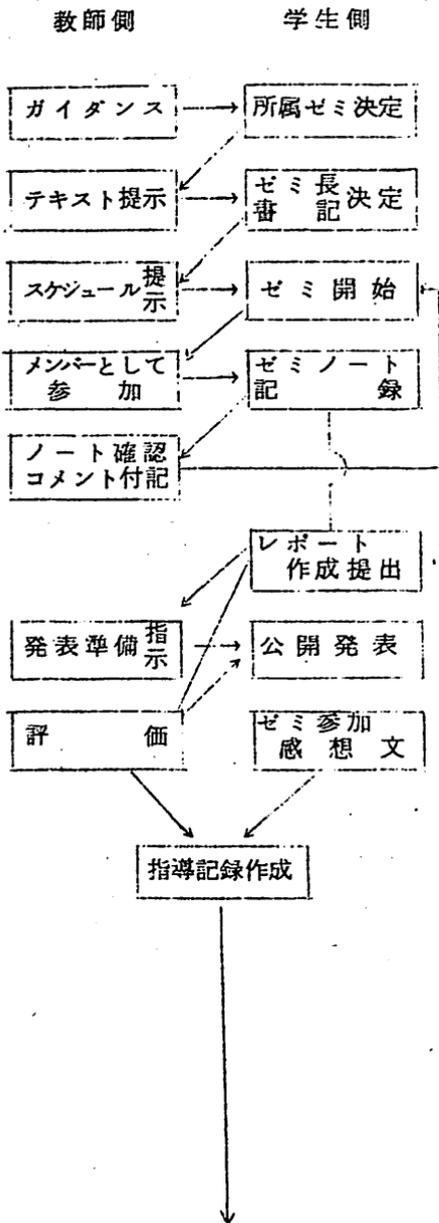
即ち、今述べた評価とその方法はますます通知表につけられる無味乾燥な数字や記号とは無縁なものになつてゆかざるを得ない。では次に指導実践の例を述べながらなにを指導目標とし、彼らが何を学んだのか述べたい。

2. 指導実践について

今年(48年)担当したクラスではゼミナール形式を採用した。その経過は大要図3の通りである。対象学年は4年生(大学1年相当)で30名余を4つに分けグループを構成した。

ゼミの1単位時間の構成

fig 3



10～20分 リポーターが担当セクションの発表を行う

20～30分 ディスカッション・ゼミ長が進行係，書記は記録

15～10分 教師の講評（省略可）

教師はメンバーの1人として参加し，必要以上の発言をせず，問題の論点はずれたとき，難解な障害の起きたときなど方向づけをする。

まずガイダンスで特に強調したことは，自然科学的発想・思想から，人文社会科学的それへの転換（指導目標）を要求したことである。

本校は工業高専であるため，日常，工学技術者としての訓練を受けており，彼らの物の見方・考え方は，どうして前者への傾きがあるからである。（もちろん，専門の立場からは望ましいことだが）

一般に人文社会系における史的発想・矛盾発展的発想は自然科学に少ないものであり，客観的法則性や演繹的論理性は人文社会系にはわかないものであろう。例えば電気工学における，オームの法則は今も昔も

また誰もが認める客観的真理であ

る。(もちろん前提条件を伴う法則もあるが)、それに対し例えばマルクス主義の弁証法的唯物論は社会発展の一原理をよく捉えて解明しているが、それが今も昔も、また誰からも客観的真理とは認められていないのは衆知の事実である。

このような観点から、工業高専の学生である彼らが、広い視野を得られるようにと思い、“日本人と日本人社会”をメインテーマとして選んだ。私自身、社会学出身でもないし、教師も学生も素人でありながら取組んだわけでそれがどんな結末を迎えるかはあらかた予想がつくといものであろう。

まず第一にテキストの選定であるが、その要件として ①興味がもて、理解できる内容であること、②量的に多くなく(ゼミは10時間程度)、質的にまとまった内容であること、③安価で入手しやすいものの3点より、次の2冊を選んだ。

講談社新書	中根千枝	「タテ社会の人間関係」	¥220
”	鶴見和子	「好奇心と日本人」	¥250

ゼミの出来・不出来はその日のリポータの発表のよしあしによつて左右されたようである。また扱われたテーマが身近で理解しやすいときは活発な討論になつた。例えば「タテ社会」では第3章の序列の発達について、先輩・後輩の関係などから、強い関心を示した。特に高専に在学するものとして、大学卒者との将来の競争を暗に意識し、社会や企業における学歴主義、年功序列に強い反発を示し、実力主義への移行を望む意見が多かつた。もちろん同時にそれが決して安易な世界でないことから現状肯定の意見もある。一般に非常に多様な意見がでるが、それは生活体験の差から、考え方に差異が起ると思われる。このような討論を通じて、一つの問題にも立場や人によつて、様々な見解の違いがあることを発見させることが出来たのではなからうか。しかしながら日本人社会の集団志向の分析や構造の解明などについては、社会学的分析方法論を前提知識としてもつていないために理解が困難のようであつた。

3. 結 論

1でも述べたように“評価”は我々教育者が常に背負つていかなばならない十字架のようなものであり、その理想的あり方を考えれば現実から程遠くなつてしまう。今回のゼミ指導もその指導目標（多様な見解と社会科学系問題の方法論の発見）に達したか否かで評価するとすれば、彼らの提出したレポートから判断せざるを得ない。しかしそれは非常に経験を要する作業だし未熟な私には困難なことに思われてならない。実際、学生とともに考え、議論しているうちに、彼らの学習活動を単に数字や記号で表わし得るのかという疑問を持たざるを得ない。結局まとまりのない論になつてしまつたが。これが今の私の卒直な心境である。

最後に彼らの提出した感想文の一部を記しておきたい。

感想文より（48.10）

- A 「グループ討論において自分の考えを正確に他人に伝えることがいかに難しいかということがよくわかつた。」
- B 「社会科学のような一義的に結論の決まらない問題を考える機会を得たことは自分の人生経験にプラスになつた。」
- C 「もつと深く話し合いたくても、時間が足りなかつた。」
- D 「番記をやつていたので他人と自分がどれだけ意見が相違しているか、またいろいろな考え方があるのがわかつた。」
- E 「私が、この学校に入つて、しばらくぶりで友達と話しができたようで有意義だつた。」
- F 「倫社ゼミでは単に傍観者として見ているのではなく、主体的に自分を参加させてゆく必要があると感じた。」

（他多数につき省略）

（49.1）

自己展開学習の実践と課題（その2）

評価を中心とした授業研究『何をどう評価するのか』

育英工業高等専門学校 東木忠彦

㊦ とりあげた理由

前号では、評価が自己展開学習において、「再教材化」という重要な役割りを荷っていること、特に「評価がFeed-backの機能を持つ」ことを考案したので（紀要11号62ページ参照）、今回は、そのFeed-back例を中心に、「何を、どう、評価するのか」を一緒に考察してみたい。

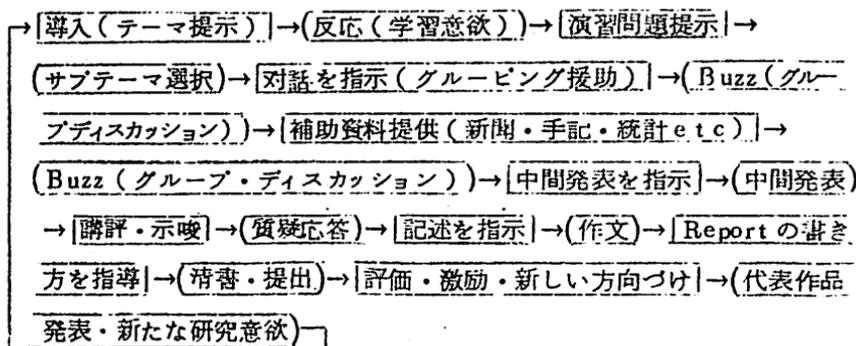
㊦ 指導の方法と観点

まず、自己展開学習の考え方にそつて、その指導方法を考えて行くと、例えていえば、それは、あたかも教授者と学習者との、息の合ったキャッチ・ボールに似ている。たゞ、普通の野球と少々異なることは、投げとりされるボールが、始めは、小さな演習問題に過ぎなかつたものが、しだいに成長してついに、「作品」と呼ぶべき、形ある具体的なものに結晶して行くことである。そして、その作品自身が、ワンテーマを終えた際に、次の新しいテーマへの導入を促したり、集団学習のための新しい資料として、再教材化され、活用されて行くあたりに、その妙味があるのである。

実際、期末近くなつて、そのクラスで生れた代表的な作品を読み聞かせたり、前年度の、いわゆる「先輩の」エッセイを読み聞かせたりする時に起る反応は、教科書や新聞切り抜きにくらべて、はるかに確かな手応えである。作品そのものとしては、まだまだ未熟な欠陥だらけのものであろうが、それだけに、彼らにとっては身近かな、いわゆる「高校生の手記」であり、全員が耳をそばだてて聞き入り、そのすぐれた点をほめたり、投げかけられた疑問をうけとめたり、さらに乗り越えるべき手近かな目標として感じとつてい

ることが、手に取るようにわかるのである。これこそ、一つの確かな評価の観点ではなからうか。

自己展開学習の形態は、必ずしも一つの図式に定式化されないであろうが上述のような授業展開の一例を図式化してみよう。



[再教材化(Feed-back)]

㊦ 評価の方法

さて、いよいよ評価の方法であるが、「評価とは、教授者と学習者の間に行なわれる学習のFeed-backである」という観点に立てば、自ずと定まつて来るであろう。

すなわち、私見によれば、倫社においては、①その特異性を考慮して、出来るだけ、②学習者の表現した学習量と、③その学習意欲の程度を ④レポート、またはエッセイによつて計るべきである、と考える。

①「その特異性を考慮して」というのは、本来、倫社という教科が、学習者の人生観・世界観の確立を目指しているとはいえ、学習者の道徳性、思想性、または人格性といったものを量的に評価することがむづかしく、さらに評価をする立場に立たされる教授者の人生観・世界観と切り離して考えることがほとんど不可能であるから、学習者の表現した学習量と、学習意欲の程度に限定すべきである、という考え方である。

②「学習者が表現した学習量に限定する」というのも、学習者の知識量や情報量では、適確に評価することがむづかしいと思われるからである。一般には、教授者の方がより豊かな経験量と、より体系的な知識量とをもつて、学習者に接していることが前提されてはいるが、最近のように、情報化社会が進行して来ると、いろいろな分野にわたって、学習者の方が、より豊かな情報を握っているケースがふえてくる。従つて、学習者の表現した学習量に限定する、という、いわば教授者と学習者の間のルールをまず作つておくのが望ましいと思う。

③「学習意欲の程度」、いわゆる「やる気」を、学習量の評価に加味するよう、努力すべきであろう。それは、自己展開学習の全過程にわたつて、特にグループ・ディスカッションの際に示される「リーダーシップ」、書記、発表者、などに積極的に示される熱意を、記録すべきである。同時に、学習者の意欲は、教授者の問題提起の仕方、選択課題の提示の仕方、更には、問題の選び方によつても、大きく変わることを銘記すべきであり、学習者の意欲を、量的にも質的にも、促進するよう努力しなければならない。

④さて、最後に、何故、私がペーパーテストではなく、「レポート、または、エッセイ」による評価を選択しているかを考えてみたい。

(i)まず、高校生の年代においては、レポートの記述量は、学習意欲のある程度の目安となる。ちなみに、10枚以上書ける学習者は、最近ではかなり意欲があるといえるのではないだろうか。

(ii)レポートは、学習者の自己展開学習を際限なく促進出来、読む・書く、分析する・総合する、理解する・表現する、思索する・体験する、など多角的な能力を動員し、伸ばすことが出来る。さらに、映像文化、Feeling 文明に生きる現代の学習者に欠ける言語能力、活字文化を補強できる。

(iii)さらに、提出された作品は、単に学習の Feed - back にとどまらず、教授者と、学習者の間に、さらには学習者同志の間に、共感と対話、人間的なふれ合いの場となる可能性を秘めている。以下に、ほんの一例を示したい。

(作品例)

『人はパンだけで生きられるか』 デザイン工学科1年 鈴木喜代志

「人はパンだけで生きられるか」

「否」

「何故」

「考えてみればわかる。人間はパンだけでは生きられない。何故ならば、その他にも食塩・水・肉類・野菜類・その他十分活力に必要なエネルギー資源を取る必要がある、それを取らない限り、まず餓死しかないだろう……」

「でも、それは体力的なものとかだろう……もつと精神的な、四次元的な見方をすれば……」

「なんだつて君はそんな幼稚的な考えをしているんだい。精神的なものだつて……冗談じゃない！なんなら、ためしに、君がパンだけで、どれほど生きていけるか、我身を犠牲にして実験してみるがいい……幾日生きられるか」

「……」

「わかるだろう……いかに美しい言葉も、それは飾られたものではなんでもないのさ。そういう疑問は小学生に人間を教える時とか、死刑になる奴にでも語ればいいんだ。」

「でも、もしかすると、その言葉を直接にとらずに、間接的に考えれば……」

「そうか、ようするにそれは例えであつて、仮に一大決心でもすれば……孔子でもないが『朝に道を聞けば、夕べに死すとも可なり』かい……だが、そんな事は、所詮、歴史にのる人物とか、著名な思想家が達したところであり、僕ら凡人にはとてもじゃないが……」

「そういうふうな考え方をすれば、書物などというものは、全然役に立たなくなつてしまうじゃないか。『人はパンだけでも生きていけるか』、いい疑問だよ、実に……ここにこそ、多く人間全てにおける、疑問の全てが含まれて

いるといつて……だが、君にはそれがわからない。」

「しかし、それは宗教的な思想だろ……？」

「ある意味ではね……」

「僕は宗教というものをあてにしていない。君はドストエフスキーの『白痴』を読んだことがあるかい。あの中でマイシュキン公爵が言つた言葉を知っているかい……無神論でも、誰からも愛され、尊敬されている人物もいるかと思えば、人を殺す時に十字を切つたというものもいる。またキリスト様からの十字架を10ルーブリで売つて、その金で酒を飲んだという男もいれば、なんの教養もない女房が、赤ん坊を抱いて、キリスト教的思想を会得している……というマイシュキン公爵の言葉を……全ては人の自分勝手な思想で成り立っているのだ。人はパンのみで生きられるか、だつて……ヘンクそんな言葉は、現実主義者を惑わす隠語だ……」

「まあ、君、こうふんするなよ。なんだか君の考え方はひどく断片的なんだ……別にそのようにまがつた考え方をしなくたつて、人はパンだけで生きられるか、と問われれば、もしかしたら生きられるかも、と答えればいいじゃないか……それに、さつきの言葉だけれども、その公爵も神を信じている宗教家だぜ……」

「そうかい……ところがその言葉がパンではなく、もしも愛ならばどうなる？」

「愛？」

「そうだ。LOVEだ。同じようなもんだらう。果して、全世界を支配しているその単語で人間は生きていけると思うかい」

「……」

「わからんだらう。パンという現実的なものだから、わからなくなつてくるんだ。もしLOVEという精神的なものであつたらどうなるというんだい。えゝ？おい」

「それは確かにそうだが……しかし考え方を異にすれば、今、君が言つた

人は愛だけで生きていけるか、という疑問は、一種の真実性を含んでくる。これは重要な問題だ。実にこれ一つに、これまでの男女間の全ての問題が含まれてくることになる」

(傍点も原文のまま)

(評語)

一読して、面白かった、とまず言いたい。

50分授業の中で、よくこれだけ書けたと思う。よく自己展開学習していることが読みとれるし、表現形式に対話法を使つたのがよかつた。

現実的な君の主張によると、「人間はパンだけで生きられるか」という問いは、精神的な甘い考え方であつて、非凡な、宗教的な人間にでもまかせておけばよいというわけだネ。

しかし、私に言わせれば、「人は愛だけで生きていけるか」という、君の問い直しこそ、もつと理想主義的な問いかけに聞こえてくる。どうだろうか。

もつとも、そういう問い直しを、君たちがしてくれることを、うれしく思っている、というのが偽らざる本音かもしれない。

それより、この対話の先きの方が、どう発展して行くのか、それが楽しみだ。次の機会には、「人は愛だけで生きていけるか」のエッセイを期待している。

なお、時間があれば、参考文献の著者名、書名、引用ページを附記することを忘れないように。

73.12.3 東木忠彦

以上、簡単に、倫社では「何を、どう評価したらよいのか」を考えてみたが、これは「無気力な学習者に、いかにしたら学習意欲をたきつけ、促進できるか」と、問い直すことができるのかもしれない。評価とは、まさに、この学習意欲の発火点であり、促進剤である。むしろ、ここでは、倫社の評価が、いかに制約されているか、というよりは、一点に集約すべきではないかと考えたのである。大方の御指導を仰ぎたい。

多層評価への試み

都立荻窪高等学校 清水洋三

48年2学期末の2年生 倫社の評価は 10と9に4.5%、4と3と2の合計が6.8%であり、残り88%強は、6と7を中心に5から8まで各々20%位ずつに分布している。100点満点に換算した平均点は63.5となり1学期より10点近く向上し、指導目標への到達度及び生徒の学習の方向づけの観点より、かなり満足すべき結果であつた。殊に1学期、6に33%、5・6・7で75%であつた分布が上位へズレたことは改善の成果であると思える。3学期は討論と作文を主とした評価にする予定である。

1. 本校と読解力・積極的学習評価のねらいと方法

思考力と読解力・積極的学習態度や主体的な取り組み方を知識・理解を主とした客観テストと同等に評価する。これは「どれだけ学習したか、知識の正誤や理解の深さ、或は望ましい結論が得られるか」ということと共に「生徒自身の考えが表わされているか、実践力としてどう具体化されているか」ということを重視したいからである。

評価の方法は ア) 完成法、多岐選択法を中心とした客観テスト イ) 小問の説明・記述による基礎的用語の理解 ウ) 資料の読解力 エ) 複合問題で考えを述べさせる思考力などを定期考査で実施し、平常の学習活動では オ) グループ討議を経た指定テーマによる作文 カ) 指定リストによる読書感想文 キ) 指定テーマによる自学自習ノート ク) 指定テーマより選択した発表とレポート ケ) その他長期休暇中の思索と実践の記録及び自由研究などから多層的な評価資料を得るように努め、ペーパーテストの成績だけ、あるいは、多少の平常点や出席点を加味したり、すべり止めの読書感想文などということ避けたいと思つている。

2. 評価問題例 (主として2学期に実施したもの)

ア 客観テスト

関連のある人物や事項の選択，空らん補充

- その平和が国民の無気力の結果にすぎない国家，その国民が獣のように導かれ隷従させられる国家は，国家というより荒野と呼ぶのがふさわしい。
- 造物主の手を出る時はすべての物が善である。人間の手に移されると，すべての物が墮落する。
- 啓蒙された民族は，自分達の血や富を自分で自由にする権利を回復し，しだいに戦争を最も悲しむべき災害，最も大きな犯罪と見なすようになる。
- ロックは立法者の権利は，民衆の（ ）によつてゆだねられたものであるから，もし立法者がこの（ ）に反して行動することがあれば，彼らをやめさせる権利に（ ）の手に残されていると主張した。ルソーはすべての人は全面的に自己を（ ）に従わせるべきだとした。（ ）とは（ ）の総和である（ ）と異なり人間本性からの意志である。
- マルクスによれば，資本主義社会の（ ）は商品生産が支配的なしくみのもとで，労働も（ ）されているところに最もよく想われている。資本家は（ ）を得るために商品を生産する。労働は労働者にとつて苦しみとなり単に（ ）を保つための手段となつて，労働から（ ）される。
- （ ）の心は仁の端なり，（ ）の心は義の端なり，（ ）の心は礼の端なり，（ ）の心は智の端なり。
- 諸君は（ ）が（ ）のために何をしてくれるかを問うべきではなく，（ ）が（ ）のために何をすることができるかを問うべきだ。

イ 基礎的用語の説明（50字以内）

自分を愛するように，あなたの隣人を愛しなさい。 無知の知 菩薩
4つのイドラ タブラ・ラサ 自然に帰れ 人間の尊厳 ザインとゾレン 豚とソクラテス 人間の自己疎外 万国の労働者よ団結せよ
あれかこれか 神は死んだ 状況的存在 実存的自由
軟かい心と硬い心 真理は暫定的である 為すことによつて学ぶ

ウ 考えを述べさせる記述(200字程度)

- 科学的認識にもとづく倫理的決断の必要性とはどういうことか。
ソクラテスが死をもつて守ろうとしたものは何か、又そのことについて君はどう考えるか、君ならどうするか。
- アガペとエロスと今日の愛とはどんなかゝわりがあるか。
- カントの人格主義とイギリス功利主義とは、人間の幸福についてどう考えているか、又それに対して君はどう考えるか。
- 近代ヨーロッパの思想はどのように行き詰つていつたか、その克服のため現代の思想は何を課題にしているか、又、君はそれについてどう思うか。
- 人間の自由について、実存主義と社会主義ではどう考えられているか。
- 社会主義ではなぜ私有財産は廃止されなければならないと考えるのか。又、私有財産の廃止で人間の疎外を真に回復させることができるだろうか。
- 第2章思想の発表の、人物の短い紹介文をよみ、どんな共通の特色が見られるか。
- 西洋と東洋及び日本古来の考え方を読み、教科書の著者が言わんとしていることは何か、全体をまとめて君ならどういう題をつけるか。
- 亀井勝一郎 三木清 アインシュタインの文を読み、最も共感を覚えたことからについて簡潔にのべなさい。
- 倫社の教科書全体に目を通して長所・短所、満足・不満足 の点を理由をあげて列挙しなさい。

3. 平常の学習活動評価の留意点(主として発表と研究に關したもの)

- ア スピーチ・最低2種の資料を使う ○自分の考えを明確につけ加える
○原稿棒読み禁止・時間15分位(3つの質問に答えることも含む)
- イ レポートも発表に準じて自己の意見を必ず半分つけ加える ○10枚
※ 年間レポート2回 発表1回
- ウ ノート ○きめられたことをキチンとしているか ○最低80 最高120の自学自習小テーマの短文解答ができていますか ※ 提出年1回

とまどわせ、ハッとさせ、ニコニコと考えさせる
○×式問題の試み

都立市ヶ谷商業高等学校 葦 名 次 夫

倫社における「評価」については、いろいろな面から論じうると思われるが、ここでは (1) 教員の側の価値視点と内面の問題意識 (2) とまどわせ迷わせ、考えさせる○×式問題の再発見の2つに絞って、考えていきたい。

Ⅱ 評価の観点

まず、第一の問題として、自らの生に確信薄き者が、偉大な思想を「論じ語る」ことの戸惑いの問題である。信仰なき者が宗教を、安住した小市民がマルクス主義を、不安、懐疑なく満ち足り埋没している者が、ソクラテスや実存主義を論じ、ごちちなくこわばつてベルグソンを語ることは、それ自体がアイロニーの矛盾である。それ故、教員の側の価値観点や問題意識、内的切実性や意味への希求が、評価と関連して問題とされざるをえない。私としては、確信なくも、困惑し、迷い、フラフラし、緊張と葛藤故に、切実に意味を希求するといったマージナル・マン的な生き方に積極的な意義を認めたい。しかし、それさえも希薄な場合、倫社をやる意味が私にとつては弱くなつてゆく — そのような倫社の性格と構造が、まさに、しんどい。このことは、価値視点と相即している「評価」を考える場合、たえず、つきまとう難問である。

さて、この内面的な価値視点の自覚と切実さが希薄な場合、当然、授業は迫力なく、しらじらしく、シラケるであろう。それ故、生徒が「のり、笑い、ハッとする」素材を多く集め構成して、ハツラツと高揚した授業をするためには、先の内面の価値視点やねらいを中心とし、生き生きとした例、比喩によつて肉づけし、心情の深みに働きかけることが、必要とされ、目標とされねばならないだろう。しかし、これも、また、困難な課題ではある。

では、以上のことを考慮しつつ、具体的に、フィードバックとしての評価

問題を、どのように作るかという第二の問題に移りたい。結論を先にいえば、生徒を悩ませ、とまどわせ、迷わせる（難しいということと必ずしも同じではない）、その意味で考えさせ、ハッとさせ、刺激する問題が、「よい」と思われる。従来、採点の都合上、明解で誰にでもわかる一義的な問題が、つくられがち傾向がみられる。しかし、もともと倫社の問題には100%の正答はなく、不明瞭でアイマイで多義的なものが必らず残る。それならば、逆にかえつて、出題者にも明解な答のない、共にとまどい、悩み、めんくらしい、微妙なゆらぎと困惑、あるいは迷いをひき起す、アイマイで不明瞭な、“悪い”問題こそ、“よい”問題であり、それが倫社の問いの生命ともいえなくもない。共々、答えあわせでなく“迷い合わせ”のできる問題をつくることに積極的な意義が認められると思うのである。そこで、以下、悪評判の高い客観的○×選択式の問題に適用して、試みに作製、今期末テストに提出したギリシャ思想に関する評価問題のいくつかを、かかげてみた。いずれも未熟な「問題のある問題」であり、疑義の多いことと思われるが、以上の趣旨をお組み取りのうえ、この拙なき試みが、何らかの御参考になれば幸いです。

㊦ 評価問題例〔○×式〕又は〔選択式〕

1. ギリシャのエロース観は、美に対する愛で醜に対する愛は存在しない。その為、「色男でもなく、力も金もない」という、あらゆるよきものから見離されざるをえない人間の問題を切り捨てている為、残酷ともいえる。
2. エロースは、何かにつかれたように熱中する情熱である。だが、それは糸玉がなく縫い、或いは自らナワを投げて登らんとするように、究極の生きる基盤なく、自己拡充をめざしているとする宗教の側からの見方がある。
3. 「水虫の足をかくのは快ちよい。しかし、それで幸福か」（プラトン）という言葉には、快樂=幸福という考えに対する批判がある。しかし、プラトンは、快樂を否定しざる禁欲主義者ではなかつた。
4. ギリシャの思想には、「正しき者が不幸で、悪しき者が幸福である現実

- 世界がなぜあるのか」という不幸の神義論の性格が、大変強くみられる。
5. ニーチェのニヒリズムは、ソクラテスを「前代未聞の合理的怪物」と非難した。絶対永遠のアイデアを確信するソクラテスのあり方が、全ては虚無とするニーチェの宿敵であつたからだろう。
 6. 身をもつて示す犠牲こそ、人々の心を感動させる。その点、十字架でのはりつけという悲痛で劇的なキリストの死に比べ、楽しげに悠然として、「いつてきまーす」というソクラテスの死に方は、人々を感動せしめない。
 7. ソクラテスが『パイドン』において示した不死=魂の不滅の証明は、それだけ絶対永遠への願いと欲求が強かつたといえる。それは、シャカが、無常を凝視することによつて、死を直視したのに比べ、「死を忘れた思想」といえるかもしれない。
 8. 高名な大学教授が、人生問題に悩み、名前を秘して教会に救いを求めにいくと、自分の著書をさしだされ、「この本を読めば、あなたの魂の悩みも解決するでしょう」といわれた。この話はアイロニーの性格そのものだ。
 9. 逃げる際中の泥棒が赤信号を守つてつかまつた話や、裸の王様の話は、慣習の強さと、常識や権威に束縛されやすい人の姿をよく示す。ソクラテスの無知の知は、このような慣習や制度になじんで、当然のことと安住している人間に対し、落ちつきと確信を与える。
 10. 傍目八目という言葉は、人間の感情や欲求、願望が激しく強い時のみ真実がよくみえることを示すよい例である。「魂が肉体から解放された時こそ純粋な認識が真実をとらえる」という言葉も、このことを示している。
 11. 我々は、無信仰でも、神前結婚や教会結婚式をあげる。このように、根本的な意味を問わず、なにげなくしていることに対し、自分にとつてどんな意味をもつのが、不断に問いかけ覚醒させる働きを無知の知はもつ。
 - (1) 我々は、合理的な論理の世界よりも、非合理的な心情の世界に生きることが多い。それは〔A. あばたをえくぼとみる世界 B. えくぼをひ

つこんだヒフとみる世界]である。

(2) ソフィストの議論は〔A. 結婚式で述べられる祝辞(とても大変、非常に美しい) B. 素朴で真実のつぶやき(唯一言美しい!)〕に近い。

(3) ギリシャの合理的、論理点なものを、日本人はくどいと感じやすい。以心伝心の世界こそ、日本の文化風土だからである。その点、日本は論理も〔A. 線の論理、B. 点の論理〕と、いわばいえようか。

(4) ギリシャの神殿、彫刻にみられる典雅な調和は、〔A. しつとりおぼろげ、温和な風土、B. 明澄、晴朗、くつきり澄んだ風土〕に由来するのだろう。

(5) 論議を確実にするためには、主観的で感情的な言葉ではなく、客観的で分析的な言葉が大切だ。だから、寒さを表現するにも〔A. モゾすごく冷たくて心まで凍りそう、B. 午前0時、-20.8度〕の方を使うべきだ。

(6) ソクラテスの生き方には〔A. 徳を色の如く好む、徳と色の調和、B. 厳しい克己、禁欲、修業〕の精神があるように思われる。

(7) イデアがあるという「あり方」は、〔A. 水がある、B. 涙がある、C. 悲しみがある〕のあるに近い。

(8) 風が吹けばおけ屋がもうかる。は、一見無関係なものを、因果的に関連づける点からみて〔A. 一種の素朴な論理 B 論理でない〕といえる。

(9) デュルフォイの神記は、一種の迷信、占い、呪術であつて、たとえば、ハッとして内面に感ずる象徴的な啓示の役割があつたとしても、科学的な現代からみて〔A. 全く無意味、B. 意義をもつ〕

(10) 四大賢人の死から、西洋と東洋の文化を比較すると〔A. 西洋一無・死、東洋一有・不死、B. 東洋一無・死、西洋一有・不死〕の思想といえる。

(11) ギリシャの思想には〔A. 心情と行為が一致する古代的健康さ、B. ヘルメットの如き心情と行為のズレに悩む近代人の意識の病〕がみられる。

(12) ギリシャの観照・思索は「ながめる立場」であり、内面の切実性やひたすらさの〔A. 重さ、B. 軽さ〕が希薄とするキルケゴールの批判がある。

追記……紙幅の都合で、他の問題や、出題の観点、ねらいを省略しました。が、それについて、まとめ解説した生徒用のプリントの残部がありますので御希望の方にはお送りします。御意見を承まわることができれば幸いです。

各 国 人 権 宣 言 に み ら れ る 権 利 の 問 題 の 学 習

都立王子工業高等学校 大 木 洋

㊦ ね ら い

買占め、売惜しみ、価格つり上げ等が問題として騒がれ、又大衆の生活をおびやかしつつあり、国会でもこれらに関し一連の立法がなされた。私権の制限という事が、野党のみでなく保守党の運動方針案にまで表われてきている。そこで本時は、これらに関係すると思われる権利概念の移り変りを、その源をロックに求めつつ、人権宣言集を資料としてたどつてみようとする試みである

㊦ 指導の方法と観点

(1) 学習の予備知識として — ロックと財産権 —

一般によく知られるように、自然権として生命、自由、財産は列挙したのはロックである。彼は私有財産が自然権である根拠を労働に見出す。「私のものである労働が、それらのものをかつての共有の状態から取り去ることによつて、それらに対する私の所有権を確定したのである」彼はこの考えから貨幣的形態での剰余価値蓄積の正当制、土地生産力の向上発展を理由として土地囲い込み的源蓄の正当化をなしている。私有財産を権利とした事は、こここそ、その権力の源泉を持つブルジョア的社会的表われであろうが、資本主義の興隆発展と共に新しい問題を提起していく事になる。すなわち民主主義はその根底原理に人間の平等をすえるが故に、資本主義による一層の貧富の格差増大は、平等という理念を、実質の伴なわない、単なる言葉にするからだ。

(2) ロックにみられる「権利」の実質化の方法

ロックの政治理論に於て重要なのは、私有財産は権利だと表明するだけで

なく、それを権利としてあらしめる実質化、具体化の方法を考え、それを政治理論の中へくみ入れた事だ。彼は先ず、人々は自分達の所有権を確保し守るため結合して社会を作るが、「立法者の絶対的で勝手気ままな権力や意志に自分達の身を委ねるわけにいかない。そこで「支配権力は思いつきの命令やあやふやな決定によつてではなく、公に宣言され、又世に受け容れられた法によつて支配すべきなのである」と法の支配をとく。続けて「いかなる人も、本人の同意がなければその所有物を、あるいはそのどの部分でも奪う権利をもたないのである」と、同意理論を展開していく。確かに「他人が、私が同意しない時でも勝手に私から奪つていく権利を持つているようなものは、実の所私の所有物とはいえない」、ここでは同意理論や権力の制限に関するロック政治理論を述べるのが主旨ではない。ここで注目されねばならないのは、権利という一つの政治理念が、実質的裏付けを伴つて表明されている点だ。（「」内引用文は全て中央公論社・世界の名著「ロック」による）

※ 権利章典（1689）（岩波文庫「人権宣言集」P. 82）

〔4〕大権に名を借り、国会の承認なしに、〔国会が〕みとめ、もしくはみとむべき期間よりも長い期間、または〔国会が〕みとめ、またはみとむべき態様と異なつた態様で、王の使用に供するために金銭を徴収することは、違法である。

(3) 民主主義の発展

17世紀のイギリス革命における民主主義の高揚は、絶対主義の流れを打ち破つて、アメリカ独立革命に受け継がれ、共和国成立という具体化の中で大きく前進する事になつた。この事実は現代世界人民にも影響を与えている。

※ ヴェトナム民主共和国独立宣言（1945）（同上書 P. 345）

「すべての人間は平等に造られ、造物主によつて一定の奪いがたい権利を付与され、そのなかは、生命、自由及び幸福の追求が含まれる」

この不滅の言葉は、1776年のアメリカ合衆国独立宣言からの引用である。この意味をひろくとると、この文章はつぎのような意味に

なる。「地上のすべての民族は平等に生れている。各民族は生きる権利、幸福の権利、自由の権利を享受すべきである」（以下続く）

更にフランスのルソーは、革命の権利と、人間の平等という点でロックより一層首尾一貫していたといえる。

様々な旧制度の矛盾をつき破る形で勃発したフランス革命は、民主主義を名実共に発展させる主体はどの階級かという課題を提起したといえる。

※「人および市民の権利宣言」（1789）（同上書 P, 128）

第二条 あらゆる政治的団結の目的は、人の消滅することのない自然権を保全することである。

ここには大革命の主導勢力の性格が反映されている。しかし、革命を一層前進させねば救われぬ大衆は、大ブルジョアジー、更にはジロンド派を乗りこえていつた。プチブル、大衆まで含んだジャコバン派は政権を掌握する。

※山嶽党憲法における権利宣言（1793）（同上書 P, 141）

第二条 これらの権利は、平等・自由・安全・所有権である。

第二十一条 公の救済は、一の神聖な負債である。社会は、不幸な市民に労働を与え、または労働することができない人々の生存の手段を確保することにより、これらの人々の生計を引きうけなければならない。

第二十二条 教育は、すべての者の需要である。社会は、その全力をあげて一般の理性の進歩を助長し、教育をすべての者の手の届くところに置かなければならない。

ここには、民主主義を具体的に労働権という立場で保障しようという勤労人民の立場が反映しているといえる。又労働権は必然的に教育への権利の要求へとつながるといふ考え方の萌芽がみられる。この権利宣言は実施されず又恐怖政治の実態はこれらの理念から程遠かつたとはいえ、これらの持つ意義は大きい。革命はテルミドールの反動からボナパルトの登場へと、すりかえられていくが、上記の権利宣言やバブーフの主張を通して、法のたてまえ

での平等，紙の上だけの平等でない，実質的裏付けを伴った平等を勤労人民が要求し出した事が明らかになつた。この要求は，続く産業革命とこれに应じた資本主義の発展につれ様々な形態をとり，発展する事になる。それは，労働者階級の未発達な運動を反映した「空想的」社会主義の試みであり，チャーティズム運動であり，7月革命であり，その他の19世紀前半の動きであつた。しかし，労働者階級はあらゆる面でブルジョアジーに従属していたのが，この時期の特長でもあつた。1880以後はブルジョア階級と労働者階級の闘いが主流となり，1848の2月革命へと続く事になる。

※1848年11月4日フランス共和国憲法（同上書 P. 159）

前文の擧

共和国は，市民をその一身，その家族，その宗教，その所有権，その労働に於て保護し，かつすべての者に不可欠な教育を各人の手の届くところに置かなければならない。共和国は，友愛的援助により貧困な市民に対し，その資源の限界の中で労働を獲得させることにより，又は，労働し得ない人々が家族がないときこれに救助を与えることにより，これらの者の生存を確保しなければならない。（以下続く）

憲法第一次草案は審議の過程で骨ぬきされてしまい，労働権は救助権にかえられてしまつているが，本文第十三条（省略）の想定をあわせみても，上記憲法が人間の社会的権利確立に果たした役割は大きい。2月革命の成果は労働者階級のものにならなかつたが，抽象的な「人間の権利」にかえ具体的な労働者の権利を問題とし，所有権にかわつて「労働権」を基本的人権として登場させた。労働者階級の解放が現実の政治的課題となると共に民主主義運動も前進する。

□ 評価 テストテーマ「基本的人権はどのように発展してきたか記せ」

真実の根拠は客観的事実である。この事実にもっと近いものは最も真実である。この真実を基準として評価する。教授内容が客観的事実であるかどうかの点検がまず評価の前提だ。次に解答を点検する。この2つの点検の相互作用のみがより真実に近づく，従つて正しい評価をする唯一の道であると思う。

「巨匠ピカソの生涯」を 倫社教材に使つて

都立江北高等学校 宮崎 宏 一

＜「パブロ・ピカソ」をとりあげた理由＞

1978年4月8日『画家の仕事に終わりというものはない。“もう十分働いた。明日は日曜日だ。”といえる瞬間は決してやつてこない』という有名な言葉をのこした巨匠ピカソは、91年間のエネルギーな大生涯に終りを告げたのである。

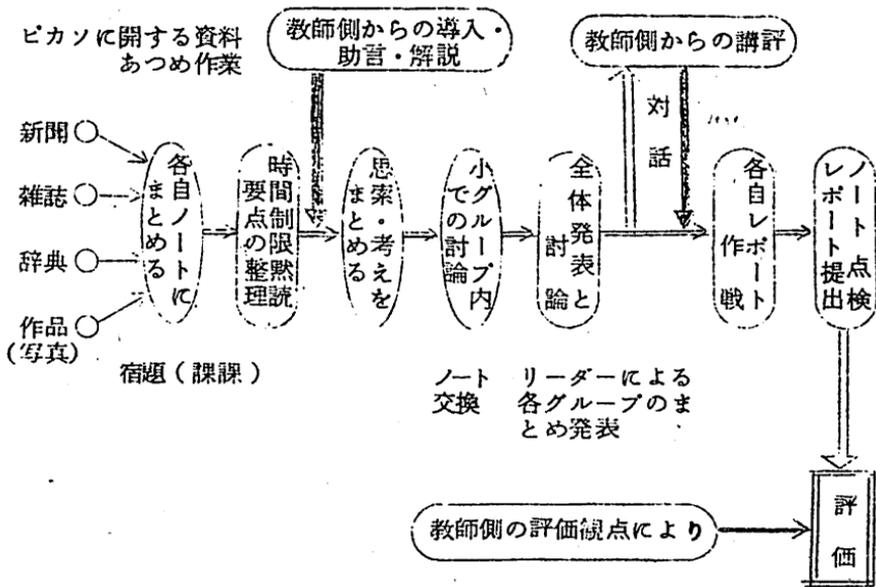
ちょうど新学期が始まり「倫理・社会」という教科についての説明をしようとしていた矢先きでもあつたので、思いきつて「ひとりの芸術家の生涯」を倫社の導入として取り入れ、生徒達に早速、ピカソに関する資料を集めさせたのである。いきなり教科書に入らなかつたので、何人かの生徒は戸惑つていたようだが全体としては比較的スムーズに、こちらのペースに従つていたようである。新聞の切りぬき、人名辞典からの生いたちと作品・生涯などまた美術関係の書物からぬき書きをしてくる者、たちまち倫社のノートはピカソに関する資料で何ページかが埋まり、ある種のざわめきがどのクラスにも出はじめたのである。このざわめきこそが倫社では必要なのである。

幸にも学習指導要領の7つの「ものの考え方の基本的問題」の例示として＜芸術と人生（美と崇高など）＞という指導上の視点が示唆されていることでもあり、また倫理・社会の目標でもある人間の生き方について考えさせ、習年期における自己形成の課題を自覚させ、人生の意義について考えさせるという意味では、絶好のチャンスだと判断し、ひとりの芸術家（ピカソ）を一つの光源としてここにとりあげてみたのである。

＜指導の方法と評価の観点＞

内容の指導に当たつては、まず準備資料の作成である。ここでは特に新聞

の切り抜きが最初の作業であり、切り抜いた記事や写真はきちんと各自のノートに糊で貼りつけさせ、じっくりそれを読み、重要な事項や各自の心に触れた箇所には、アンダーラインまたはサイドラインを引かせたのである。新聞・雑誌・ラジオ・テレビなどの報道する内容や表現の仕方についての相違点等はマス・コミュニケーションの特質であることも合わせて説明する必要がある。授業構造や流れを図示してみると次のようになる。



小グループ(班編成)は、学年の当初男生徒2~3名と女生徒2~3名を一緒にグループをつくり、リーダー、記録係などを決めさせてあるので、その班活動を利用する。なるべくお互いが、face to face の関係になるように教師側は配慮し、偏つた意見だけに固まらぬように、各グループを巡回しながら、軽い suggestion を与える。

私の評価に関する基準は、漠然としているが次の3点を常に考えている。

- (1) 与えられたテーマ(課題)に対して、積極的に参加し研究しようとしている態度がみられるかどうかということである。

(2) どんな問題についても、自分自身の力で、頭でまず考えてみようとする自主的な態度がみられるかどうかである。

(3) 先入観や偏見にとらわれずに、自分の意見や考えを、自分のものとしていかに表現しようと努力しているかどうかということである。

◀授業展開 — 教師側からのピカソについての助言・解説 — ▶

「ピカソのことば」を中心として

◎「私はよく『進歩』ということばを耳にする。そしてくりかえし、私の絵がどんなふうに『進歩してきたか』と説明を求められる。私にとって芸術には過去もなければ未来もない。もしある芸術作品がいまこの場で生き生きとしていなければ、全然問題にならない。ギリシャやエジプトの芸術も、他の時代の偉大な画家の芸術も、みな現在に属している。おそらく、それらが今日ほど生き生きと感じられることはあるまい。芸術が進歩するといわず、人間の想像力、人間の表現形体が変わるといふべきだろう。

人々が芸術家の進歩について云々するのを聞くたびに、いつもこんなふうに思う。彼らはまるで二つの向かいあつた鏡のまんなか立っている芸術家を眺めているようだ、と。鏡には数えきれない芸術家の姿が映っている。そして、彼らは一つの鏡の上の姿を彼の過去だといひ、もう一つの鏡の上の姿を彼の未来だといひ。ところが、芸術家自身はあくまで彼らの目の前にいるのだ。

人々は、すべてこれ同じ絵で、ただ平面だけが異なつていとは考えないのだ。変化は進歩を意味しない。かりに芸術家の表現形式が変わつたとしたら、それは単に彼の思考方法が変わつただけである。良く変わる場合もあるし、悪く変わる場合だつてあるだろう。私が用いた芸術上のさまざまな方法は、だから進歩だなどと受けとられてもいけないし、未知の絵画理念への段階だなどと解釈されても困る。私がやつてきたことのいつさい — それは今この現在のため、今この現在に生きてくれるように念じてなのだ。

◎『芸術家は感覚の宝庫である。感覚は空から大地から1枚の紙片から急ぎ

通りすぎる人間から蜘蛛の巣から、至る所から訪れてくる。物象に関する限り階級のちがいはなく、われわれはこれぞと思う仕事を至る所で探しつくさなければならない。自分の仕事にだけ閉じこもつてはいけない。自分だけを模写する、これはやり切れない。』

◎「もしも、真実がたつた一つなら、誰が同じテーマで百の絵を描こうか？」

◎「私は、すべてをことばで語ることはできないが、絵にすることはできる」

◎「芸術は悲哀と苦痛の娘である。」（集英社「現代世界美術全集」より）

以上のピカソのことばの中には、彼の芸術に対する姿勢と厳しい芸術家としての人生観を感じとることができる。人生に対する考え方の一つを生徒達はどう受けとめたであろうか。ピカソは最後まで絵筆を離さなかつたという。ベッドの横にはデッサン用のクレヨンがあり、なかなか夢路にはいれないとき、ピカソはベッドの上で思いつくままにデッサンをつづける習慣だつたという。2年前、ピカソの生誕90年を祝い記念展覧会が、パリのルーブル博物館で開催されたとき、ポンピドー大統領は開幕の式辞の中で「ピカソは永遠の活火山だ」と述べたといわれている。

またピカソはカメレオンといわれるほど、その画風は何度もひょう変した。まずパリのモンマルトル学生街で修業中の“青の時代”、オランダ旅行以後の“桃色の時代”、続く“黒の時代”、次が大作「アビニヨンの娘たち」に代表される“造形の時代”、それは立体派運動へと発展したが後に早くも“新古典主義”に復帰してしまうのである。画家の大久保泰氏はピカソの一面についてこう語っている。「ピカソの絵は、女性が変わる度に変貌し、その女性の風格、氣質がピカソに感化を及ぼしている。しかも、そのたびにピカソを若返らせ、情熱をわきたたせた。いわばピカソの女たちは、彼のインスピレーションの源であつた。ふしぎなことに、ピカソが一人の女性を描き尽くしたころには、新しい女性がタイミングよく現われる。それをもとに新しい様式がおのずから生まれる。」と。このようにピカソが作画する動機は、あくまでも本能的であり、衝動的であつて、表現の様式は後から来るのである。

＜評価の方法＞

これまで評価という問題をあまり深く考えなかつた、いや考えたのかも知れないが、それは自分だけの尺度によつて堂々と“評価”してきてしまつた爲に、評価そのものの意義をあらためて考えるとき、いささか戸惑いを覚えるのである。元来、私の評価についての考えはどちらかといえば「甘い」といえるのではないだろうか。ここまで考えをひろげてくると単なる評価として安易に自分なりの基準によつて評価する。あるいは評価してしまうことは恐ろしいような気もする。果して一時間一時間あるいは単元毎にしつかりとした目的、理想、目標があつたであろうか。あるいは教師が描く理想的人間像と現代の高校生が描く人間像とには大きな格差はないだろうか。

「評価」の問題は最終的には、教える側つまり教師の側の問題でもあるので具体的には教師の考えている人生観、世界観、宗教観、教育観、政治観などが決めてになると思うのである。倫社の教師として、これは大変なことであり、人間が人間を評価することのむずかしさをまたいやという程、教えられる思いがするのである。次に実際にピカソの生涯を学んだあとに生徒が書いた短い作文があるのでそれを紹介し、どう評価すべきかを考えてみることにする。

芸術家は芸術の世界。美の追求に生き甲斐を見つけ、人生の真のドラマを限りなく求めるのである。人生にはいろいろなことがあると思う、そしてその人生行路をいかに進むべきか。人生の歩み方には数学のような公式は存在しないのだ。ピカソのことばの中で非常に印象に残っているものに、「他の人たちは自伝を書くだろうが、私は絵を描きつづける。それが完成しようが未完成であろうが、それらは私の日記のページである。私の絵はそれ以上の意味を持っていない」という意味の言葉である。実に謙虚であり、自己の歩むペースを自然に掴んだ画家の姿をみることができる。マイ・ペースという言葉があるが、他人の人生の模倣

するような生き方は絶対にしたくない。ピカソは更に「私は川の流れた。それは流れつづけ、岸辺に近く育つた樹木や投げこまれた子牛の死骸やそこで繁殖したありとあらゆる微生物をいつしよにさらつてゆく」と。何かピカソのこういつたことばを読んでいると時の流れをひしひしと感じ、じつとしていられないものを全身に覚える。時間を無駄にせず、ありとあらゆるものを画材とし、モチーフの展開とフォルムの変容につとめた情熱と多感な感情こそピカソが私達に残してくれた教訓ではないだろうか。ピカソのような人生は、たしかに羨ましいと思う。しかし羨ましがっていただけではいけない。この青年期の最も重要な時期を、自分の力で一步一步着実に無駄のないように進んでいきたいと思う。(高2男子)

まあ欲をいえばきりが無いが、ひとりの芸術家の生涯から、このようなものをしっかりと受けとめてくれた点では、成功したように思う。たとえグループ研究や発表の場合、またグループディスカッションの結果を評価する際の技術的方法に苦慮しているのだが、なかなかむずかしい問題がある。

私はこれらの作文やレポートの評価は前述の3点を基準として、大きく三段階に分けて、えん魔帳に記しておくようにしている。◎印…優秀、○印…普通、×印…努力が足りない。精々この3段階の評定を自分なりに実行している現状である。ペーパーテストでは、なるべく記述式と客観式の問題も半分半分出題し、記述式(論文形式)の方は、点を甘くし、優秀者には必ず大きな字でVery goodと書き添えるようにしている。評価とは直接関係ないが、この一年間「倫社月定読書」をはじめてみたが、現代の高校生が毎月本を読みこなしていくということは、実に骨がおれるということがいえる。どなたか理想的な読書指導法がありましたらお教え願いたいものである。

以上ですが、紀要第12葉のテーマに即していたかどうか……私の評価に関する一端をのべさせていたという事でペンを置こうと思う。

私の評価問題

都立保谷高等学校 杉原 安

1. はじめに

倫社における評価は教師にとって頭の痛い問題の1つである。倫社という人格に関する事柄を含んでいる教科においては、ある時にはペーパーテストによる知的理解のむなしさを感じたり、またそれを補うため生徒の態度・行動に目をむけると神ならぬ1個の人間がどこまで正確に把握できるのか、その恐しさを感じる。他方、生徒の方も他の教科と違つたものを倫社に意識しており、時には倫社のテストの不必要を指摘する。そのたびに倫社の意義、倫社は何をやるのかなど、当初の問題に立ち帰り、評価とつないでいく。こういう中であつて、最近のL. H. R.の不活発、無計画とも関連して、倫社の時間に身近な問題を皆と話し合いたいとの希望が強い。

このような生徒の希望を生かすため、1学期の現代と人間の分野においては、講義を中心としながらも身近な問題(例：自由、自殺、マスコミ……)をとりあげてグループで発表させている。さらに2学期以後において、適当な原典精読をしている。他方年間5回の考査(3学期のみ1回)においても脅かせる問題を中心としているが、中間考査はその1つの柱として必ず新聞の社説を使つて問題を作成することにしてしている。これは、社説を使うことによつて身近な問題を倫社と結びつけ、さらに社説を材料にして生徒の内面の意識、考えを知るとともに生徒自身にも自覚させようと思うからである。また最近の生徒は新聞を、特に社説を読まなくなつていゝ。そういつた面を補い、社会に目を開かせることができらばと思つていゝ。1学期の中間考査においては、<ものを大切にする経済へ>(47年11月27日朝日新聞)の社説を使つた。現在大きな問題となつていゝ石油をはじめとする資源問題を先取りするよゝな形になつたが、日本が戦後一貫してつくりあげてきた資

源浪費経済を、ものを大切にする経済に組みかえ、実行に移すことの重要性を個々人の消費生活ともからめて考えさせた。しかし時間的にかなり以前のことであるので、第1分科会の担当分野からははげれるかも知れないが、2学期の中間、期末考査の問題を提示し、評価の問題を考えてみたい。

2. 評価問題の背景

今年の原典講読は<ソクラテスの弁明>を使用した。それに必要なことは夏休み前にプリントで指示し、各自休み中に適当な文庫本を購入するように言っておいた。2学期のはじめに、ギリシア思想の流れを概観し、さらにそれを深める意味において原典講読に入った。グループは6班編成、第1回の弁論部分を2分し(第1章~15章と、第16章~24章)第2回、第3回の弁論部分をまとめて各班に担当させた。したがって同じ部分を2つの班にやらせた。生徒にとつて弁明は、かなり難解だつたようであり、それとつきほくしていくのに時間を要し、結局、当初予定の時間を大巾に上回り、クラスによりいくらかずればあつたが、ほど2学期一杯かかつてしまった。ある生徒はこんな風に書いている。『「ソクラテスの弁明」は、始め文語体であるし、難しいので少しも面白くなかつた。しかし、読んでいくと、ソクラテスの弁明の仕方がとても順序よく、そして一つ一つをくずしていくのが、とても面白く思えた(推理小説を読んでいるみたい)。ぜひもう1度読み直してみたい』(女子)。指導の過程については、紙面の関係もあるので省略する。

3. 評価問題

(1) 2学期中間考査

1. 次の文を読んで、下記の説問に答えよ

現代は、「プロテウスの人間」の時代だという。これをいい出したのは、アメリカの心理学者だが国内にも支持者が多い。(中略)「プロテウスの人間」におけるプロテウスの意味は、この海神のもつ能力のうちの後半、化身の術に長じている部分に力点がおかれている。きのうまでレフトの輝けるス

ターとして活躍していた人間が、今日は極右の重鎮におさまるといつたことや、深窓のレディがあつという間に、テレビ・タレントに変身したりという例は、われわれの身近にも見出すことができる。これらの根底には、世の中が目まぐるしく変化し、多様化する現代にあつては、一つの固定的な信条や生活態度では、対応しきれないし生きていけないという「事情」があるのかも知れない。そして、このプロテウスの性格をもつて少なくとも現代の英雄には欠かせない条件だとする人々もいる。しかしここで忘れてならないのは、目まぐるしく変わる世の中といい、多様化する社会といつても、それらを構成するのは一人一人の人間であつて、一方の思考や態度が変われば、他方も変化するという関係にある点だろう。自分と無関係に社会が存在しているわけではない。

きょう1日から12月31日まで「赤い羽根」をシンボルとした共同募金運動が始まる。(中略) 赤い羽根は、これを帽子につけた三銃士やロビンフッドの例をあげるまでもなく、ヨーロッパにおいて古くより「正義と勇気の象徴であつた。エゴとタフネスな生存をバックボーンに、プロテウス的人間は、日本にも少なくないようである。総理府が先般実施した世界青年意識調査でも「心の深い次元でのつき合いは冷たいと分析されているが、これは青年に限つたことではあるまい。現代のプロテウスは心の深い次元に立ち戻つて、正義と勇気への変身をはかるべきではないか。胸間を飾る一片の赤い羽根が持つ意義は、個人にとつても、社会にとつてもきわめて大きく、深いものがあるであろう。(48年10月1日 毎日新聞社説、紙数の関係で大巾に省略した。)

問1 上記の文章の要旨を考え、適当な題名をつけなさい

問2 上記の文の中で一番重要な箇所を引き出しなさい

問3 上記の文に描かれている人間像を、ギリシヤの人間像と比較せよ。

問4 上記の文の感想を自分自身の問題として述べなさい。

以下の問題は省略する。

(2) 2学期末考査 (各自所有のソクラテスの弁明を見てよい)

1. ソクラテスを裁いた裁判は、今日の日本の裁判と異なり、陪審法廷といわれているが、彼が死刑になるまでの裁判の過程を述べよ
 2. ソクラテスが旧い告発者を新しい告発者よりおそれている理由を示せ
 3. デルフォイの神託に対するソクラテスの対処の仕方およびその結果について述べよ
 4. ソクラテスは死をどのように考えていたかのべよ
 5. ソクラテスの弁明の中で最も重要だと思われる部分を指摘し、かつ、それについて説明せよ。
 6. 14章の要旨を述べよ
- (全10問、他は省略する)

各学期末には、5段階の評定を出さなければならないので、その重要な1つの基礎として(他にレポート、グループ発表の結果などを加味している)中間、期末考査とも各100点になるよう配点してある。説明問題にしてもできるだけ客観的に、生徒に合理的に説明がいくように、予めポイントをきめておいて採点している。もちろん、これは固定的なものではなく、生徒の答え方の傾向により弾力性をもたせている。なお、中間考査の間4のように各自の感想、意見などを問う問題については、予め解答用紙に字数を設定し、努力のあとを評価することになっている。いずれにしても、評価問題か評価問題として独立しているのではなく、日常の授業の支え、はげみ、反映となるよう創意工夫しているつもりである。最後に上記問4の生徒の感想を引用しておく。「確かに現代は他人との連帯感を持つている人は少ない。このクラスにしてもそうである。ある物事を決めようとしても、私には関係のない事とか、また自分だけがよければそれでよいなどという人が多い。せつかく同じクラスになつたのだから各々助け合つて楽しいクラスを作つていきたいと考えるのだが……。正義と勇気とは少し異なるけれど、積極的に他人との連帯感を持つていくように変身したいものである。」(女子)

第2分科会〈思想の源流〉

研究経過報告

〈研究経過〉われわれ第2分科会は都倫評・第1回研究例会の際の会合で、10名をもつて発足した。第1回例会は9月7日都立赤城台高校で開かれた。この時点では今年の研究課題である「評価を中心とした授業研究」の趣旨がまだ充分には理解されておらず、ともすれば従来の課題との差異がぼやけ勝ちであつた。そこで永上肆郎先生に電話でその趣旨を確認し、次回までにそれを深めておくこととして散会した。第2回例会は10月23日都立上野高校で開かれた。ここでは授業内容の精選、よりよい授業展開を得るための研究課題であることを確認し、教育課程の中における評価の位置づけ、評価は授業内容や教材の選択及び指導のねらいがどれだけ生徒に徹底したかなどを教師自身が反省していくための資料を提出してくれる、そして実際に評価を行うときに生ずる問題点などについて活発に議論が交わされた。第3回例会は12月8日都立赤城台高校で行なわれた。ここでは実際の評価問題をもちより、評価問題のあり方や質問の設定の観点のあり方及びそれらと授業との関わりなどについて話し合った。この際大きな問題となつたのは日常の授業態度や生活態度とペーパーテストの成績との乖離を如何に評価するかということである。これは倫社という科目の特殊な性格もあつて、かなり議論が交わされたが、出席者4名という小教であつたこともあり十分な結論を出せずに終つた。そして各人の研究課題とすべき思想を確認しあつた後、散会した。なお私の理解不足により以下の第2分科会の研究報告が十分に、分科会の活動を表わしていないこと、申し訳なく思つています。

〈評価を中心とした授業研究〉

評価は教育活動の一環として生徒自身が自己の理解度を確認するという点でも、また教師自身が自己評価を行ない、更によりよい授業を展開していくという点でも、避けられぬ問題である。ともすれば自己満足に陥り勝ちな我々

の姿勢を正してくれるだろう。「思想の源流」を教える場合には特にこの点を配慮せねばならない。「思想の源流」を指導する際に問題となるのは、現代の生徒の生き方と先哲の思想をどのように結合させ理解させるかということである。現代の思想とは異なり生徒にしてみれば、どのように思想と対決していけばよいか理解しにくいであろう。かりに客観的・基本的知識が増大したとしても、それらの思想がどれだけ生徒の生き方に関わっているかという問題が残る。つまり客観的理解と主体的理解のからみを如何に解決するかそしてそれをどのように評価するかという問題である。また「考えさせる倫社」を実行する上で、生徒の授業への主体的参加が必要となる場合もあるがそれらの結果を如何に評価するかという問題もある。これらを解決するには予備調査を行ない、生徒が先哲の思想をどのように受けとめているかを確認し、授業後の先哲の思想の理解と比べて評価するのも1つの方法であろう。また授業中に絶えず指導のねらいをチェックしていくのも1つの方法である。またねらいを生かす意味での評価の基準を教師がしつかりと理解しておく必要もある。評価問題には客観テストと論文体テストがある。前者には基本的知識の有無の確認や採点の早さなどに利点がある。しかし「考えさせる倫社」を目標としているからには、生徒自身の言葉で思想を述べさせたい。その要求を満たすのが後者である。これによつて生徒の主体的捉え方・論理性・文章力などが評価できる。しかし採点の際に教師の主観の入る部分が多すぎる難点がある。この両者を如何に両立させるかが、評価問題を作製する際に留意せねばならない点である。

いずれにせよ評価について考えるということは、教師自身の授業の進め方、ねらいの設定及びその適正さ、教師自身の理解度を、もう一度教師が考え直すという意義があり、単に生徒にのみ関わる問題ではない。評価は生徒の理解を確め、更にそれを深化する意味と同時に、教師自身がより授業を研究していくための鏡といえるだろう。

(野吾信雄記)

<第2分科会> 思想の源流

「ソクラテスの弁明」原典学習と その評価問題

都立墨田川高等学校 細谷 斉

㊦ とりあげた理由

イ. 本年度の授業計画(4月当初計画案)

一学期前半	講義	「倫理社会」学習の意義, ソクラテス以前のギリシャ思想
	後半	原典講読学習「ソクラテスの弁明」
二学期前半	講義	「仏陀と原始仏教」・「孔子と儒学」・「イエスと原始キリスト教」
	後半	原典講読学習「方法序説」
三学期前半	講義	「ルソーを中心として西洋近代社会契約思想」・「カントの人格主義の市民倫理」
	後半	原典講読学習「日本の思想」或いは「現代の思想」関係

以上の計画案は、私の倫社の授業が生徒にとって、人生や自己の生き方を思索する上でいくらかでも深みのある契機となりうるようにとの思いをこめて立案した。特に思想の源流に焦点を当てた。これは、私自身が所謂四聖人をどれだけ教材化しうるか研究してみたいと考えたことによる。また初めて原典を生徒全員に持たせて読み進んで行くという授業を試みたいと思つたことにもよる。本計画案は実際には予定通り進めず、「方法序説」の学習が三学期の後半になつてしまった。

ロ. 一学期前半の授業の実際

一学期前半の約10時間位は、「弁明」に入るための前置き、導入の意味で、何故「倫社」を学ぶのか、人生や人間を考えるとはどういう意味があるのか等々について講義をした。倫社の授業に於ては、学習する意義を生徒によく納得・理解させることが最も大切だと思い、繰り返しこの点を強調したわけである。実際の授業の内容は次のようなものである。

第1時 「倫理・社会」の名称の意味、人生や人間を考えることが何故大切なのかは、「満足した豚であるより云々」というミルの言葉を引いて考えさせた。

第2時 「人生への問い、人間への問い」とは何か。プリント資料、磯部忠正著「若い世代のための人生論」講談社新書、まえがき、PP. 12～15

第3時 先人に学ぶことについて、一次の論語の言葉とニュートンの言葉を板書し、意味を考えさせた。

子曰 学而不思則罔 思而不学則殆 温故而知新 可以为師矣、その他

I seem to myself like a child playing on the seashore, picking up here and there a curious shell or a pretty pebble, while the boundless Ocean of truth lies undiscovered before me.

Issac Newjon (1643-1727), N・ホーソン「伝記物語」より

第4時 読書のすすめ—青年の自我の目覚めを問題として、プリント資料 下村糊人著「次郎物語」第三部PP. 41-45, PP. 131-133

第5時 人類の思想のはじまりについて—人類の枢軸時代と血聖人に共通する人間愛、資料、ヤスパース「哲学入門」新潮文庫PP. 122-130, プリント資料、西田幾太郎「哲学概論」岩波書店PP. 5-18より抜粋

第6時 ギリシャ思想に入る—ギリシャ人の人間や運命への関心について 資料ソフォクレス「アンティゴネー」「オイデッパス」 プリント資料ギリシャ思想の意味、原佑・他著「西洋思想の流れ」東大出版、PP. 13-37

第7～9時、自然哲学(者)、ソフィストについて

第10時、ソクラテスの生涯について、プリント資料、「ソクラテスの人間探究の意味」旺文社文庫「弁明」解説文より、ラッセル「西洋哲学史」原書、PP. 101-111より抜粋、クセノフォン「メモラビリア」岩波文庫、その他

第11時より「弁明」の読みに入つた。テキストは「岩波文庫」を使用

Ⅷ 「弁明」原典学習の進め方—学習展開— (要点)

- 「弁明」全体を八つのセクションに分けた。例(第1-4章)
- 生徒全員を同じく八つの班に分けた。各自班ごとに担当のセクションを特に念入りに読み、問題点・疑問点をレポートする。
- 授業はセクションごとに1時間の予定で進める。全員の黙読→班ごとの要
点の発表→提出された疑問点、問題点の検討←教師の指導

※「弁明」の内容のポイント(授業でとりあげた点)要約 ○印重要箇所

第1章 雄弁家の意味

- 2章 ソクラテスの弾劾の内容の内容 旧・新二つの弾劾
- 3章 旧くからの弾劾の内容
- 4章 ソクラテス、ソフィストではないことの弁明
- 5章 ソクラテスの名声と中傷の原因—人間的知恵→デルフォイの神託
- 6章 神託の真意の探究→無知の知の自覚
- 7・8・9章 真知の探究のための問答→無知の暴露→誹謗と中傷
- 10・11章 青年や市民への問答 新しい告発者と訴状の内容—反論開始
- 12章 メレトスとの問答「青年の真の教育者は誰か」
- 13章 ソクラテスの活動は真に不正か
- 14章 メレトスらの告発内容の矛盾を指適
- 15章 ソクラテスは神を信ずる者であることの弁明
- 16章 自分を真に減はず者はいか—多衆(二大衆)の誹謗と猜忌
- 17章 ソクラテスの死生観(注 クリトン・パイドン) 愛知の活動

の意味→アテナイ人への魂の呼びかけ

- 18章 ソクラテスはアテナイのアブ、悪人が善人と害することは不正
- 19章 ダイモニオンの声について
- 20章 政府の不正と戦ったこと
- 21章 自分は何人の師でもないこと一誰にでも教える者である
- 22章 自分の真の理解者はプラトンやクリトンであること
- 23章 不名誉な所行は断固さけること
- 24章 裁判官達に正しい判断を望む→第1回票決 有罪
- 25章 有罪の判決に対する気持一意外ではない
- 26章 量刑の申し出→リュタネイオンの食事こそ自分にふさわしい
- 27章 自己の正当性の信念を述べる
- 28章 愛知の探究は絶対止めないこと一それは神命であり、生きる意味であるとの確信の表明
- 29・30・31・32・33章 死刑の判決に対する気持一不動の信念と死生観の表明

※授業の中で生徒がとりあげた問題点の例(一部のみ)

- ソクラテスはすごい雄弁家ではないか ○自信がありすぎないか ○無知の知の意味がよくわからない ○神託を信ずるとはどういうことか ○ソクラテスの本当の罪が何かよくわからない ○死に対する考え方がよく納得できない ○強く立派な人だと思うが自分は好かないタイプの人だ、その他

□ 評価の方法

一学期の期末テストは、この約十時間の「弁明」の学習をふまえて、ソクラテスと中心に出題した。次の問題はそのうちの一部である。

設問①紀元前399年の春、ソクラテスはメレトスらの告発者によつて裁判にかけられ、弁明の効なくついに死刑に処せられた。ソクラテスはいかなる理由で告発されたのか、古い弾劾者と新しい弾劾者の主な訴点を述べよ。

設問②「弁明」の第5章でソクラテスは、自分が名声を博した同時に悪評を買った理由として次のように述べている。「アテナイ人諸君、私がかかる名声を博したのは、ただ私に一種の知懸がある為なのである。しからば一体

それはいかなる知慧であるか。思うにそれは一種の人間の知慧であろう。」と。ここで言われている人間の知慧とは何か、「弁明」をふまえて説明せよ。

設問③ソクラテスは、自分は何人の師でもない、と言ひ、自分はただ青年や市民と問答し、物事の本質を探究しようとしてきたのだと述べている。ソクラテスの問答法(対話法)は後の弁証法のはじまりとされているが、それはいかなるものか、大きな特徴点を二つあげて説明せよ。

設問④「弁明」の第28章でソクラテスは、<魂の探究なき生活は人間にとり生甲斐なきものである>と述べているが、この言葉はどのようなことを言っているのか説明せよ。

設問⑤ソクラテスは、「弁明」の第16章で真に自分を滅ぼすものは、メルトスの告発者ではなく、<むしろ多衆の誹謗と猜忌とである。それはすでに多くの善人を滅ぼしてきた。思うにまた滅ぼしていくであろう>と述べている。このソクラテスの言葉から、現代の私達がよく考え反省しなければならないことは、どのようなことであるか述べよ。

<参考> 思想の源流の評価問題例(2学期の出題例より)

1. 仏教では自己(=自我)というものをどのように考えるか説明せよ。
(ヒントとして、自灯明・法灯明の教えをあげておいた)
2. 次の言葉は鎌倉時代の仏教者道元のものであるが、どういうことを言っているか、端的に記せ。 <自己をはこびて方法を修証するを迷いとす、万法すすみて自己を修証するはさとりなり>(正法眼蔵第一現成公案より)
3. 次の古語はどういうことを意味するか、言外の意味も考えて説明せよ。
<君、看よ双眼の色 語らざれば憂い無きに似たり、君看双眼色不語似無憂>
4. 子曰、学而不思則罔 思而不学則殆(為政)という孔子の教えはどのようなことを言っているか説明せよ。
5. 孔子の思想の中心である「仁」について説明せよ。
6. 人間の本性と倫理・道徳のあり方について孟子と荀子の考えを説明せよ。

ソクラテスの原典学習の試み

都立鷺宮高校 佐々木 誠 明

㊦ とりあげた理由

西洋の源流思想の一つとしてギリシア思想をとり扱う場合、まずソクラテスをあげることに大方の異論はあるまい。私は今年度の授業において、原典学習の試みの一つとして、「ソクラテスの弁明」を全員で講読することにした。しかし、総時間の制約上、この学習に僅か4時間しかとれなかつた。なお、ギリシア思想の学習は、このほかに研究発表方式をとり5時間を費した。

㊧ 指導の方法と観点

「弁明」には、岩波、角川、旺文社版など各種の文庫本があるが、各自自由に一冊を購入するように命じた。廉価という点では岩波文庫が最適であるが、訳文に難語句と思われる箇所があるので、やむをえず自由にしたのだが、授業展開にはやや不便であつたことを認めざるをえない。

さて学習の展開では、あらかじめ「弁明」を4つに区分するとともに、生徒を4グループに分け、それぞれ1区分ずつ責任をもつて予習してぐるように命じた。1時間ごとに教師が設問を用意して、割りあてられたグループの生徒に順次質問し、解答させ、補足説明をするという方法をとつた。4時間という枠のなかで、全生徒に最低1回は質問して答えさせるということを主眼としたので、4つの区分の仕方や設問には多少無理があつたのではないかと反省されるが、以下にその4つの区分および設問の例を示してみよう。評価の観点は、設問のなかにおのずから含まれるので、特記を割愛する。

(1) 1～10章……メレトスの告訴に対する第一の反論

<設問例>

- 冒頭の「アテナイ人諸君」とは具体的にはどんな人々を指すのか。
- 「就中私を驚かした一つの事がある」というのは、何をさしたものか。

○ソクラテスのいう「一種の雄弁家」とはどのような人か。

○「裁判者の徳義は正にここにある」のこととは、どんな点をさすのか。

○ソクラテスが弁明しようとした第一の弾劾とはどんなことか。

○ソクラテスは、当時危険な思想家と目された一群の人々と混同して誤解されたが、彼らは何とよばれたか。彼らの主張の特徴についてプラス面とマイナス面に分けて説明してみよ。

○ソクラテスが「一種の人間の知恵がある」といつた。その知恵とはどんなことか。

○ソクラテスは、デルポイの神託によつて何を知つたのか。

○いわゆる「無知の知」の真意はどこにあるのか。

○ソクラテスとソフィストの生き方のちがいはどこにあるのか。

○「汝自身を知れ」という言葉から何を教えられるか。

(2) 11～17章……第二の告訴に対する反論(その一)

○ソクラテスが弁明しようとした第二の弾劾とはどんなことか。

○ソクラテスのいう「ダイモニア」「ダイモンの声」とはなにか。

○ソクラテスはどんな仕事を自己の使命として自覚していたか。

○「愛知者」とはどんな人をいうのか。

○ソクラテスは、アテナイ人に対してどんな徳をもつように説いたのか。

○ソクラテスの説く「徳」とはどんなものか。

○「盤潔を淨らかにする」とはどういうことか。(以下略)

(3) 18～24章……第二の告訴に対する反論(その二)(設問例省略)

(4) 25～33章……有罪判決後の弁論 (")

ソクラテスの学習を通じてとくにおさえるべき重点としたものは、①ソフィストの功罪およびソクラテスとの関係、②ソクラテスの問答法と無知の知、③ソクラテスの説く徳および徳と実践との関係、④ソクラテスの死刑と逃亡しなかつた理由、⑤ダイモンの声の五点である。そしてこれらの事項の理解をもとにして自己を深く見つめる態度を養うように心がけたつもりである。

四 評価の方法

以上のような方法で、教師と生徒との間に一問一答形式による授業展開を試みた結果、生徒は注意深く原典を読むようになり、前後の関係をよく考えて、全体の脈絡のなかで文の真意に迫ろうとする態度をもつ者もうまれてきた。割りあて以外の生徒は、他の箇所を必ずしも熱心に読んでこないという欠陥もあつたにせよ。このような学習によつて、教室内には一種の緊張感がみなぎり、一応の充実ぶりが見られたことは素直に肯定してよいだろう。

さて、研究発表学習をも含めてこうした学習の評価はどのようになされるべきか。いろいろの方法が考えられるが、今回はペーパーテストとエッセー提出とによる二つの道を採用した。前者については「ソクラテスの無知の知とはどういうことか」、「ソクラテスの説く徳について説明せよ」という記述式問題とした。エッセーにはたとえばつぎのような例があつた。

<エッセー例>

自分で自分を見つめるということは何となく空恐ろしい。見つめた後に、ぼんやりとした嫌悪感や、安住していたものの不当性を暴露された時の狼狽などが残るのを予感しているからかもしれない。おもてぶつては尊大ぶらなくても、正直言つて、やはり自分に対するある種の期待が私にはある。それが錯覚と知つていてもなお、すがらずにはいられないような期待である。こうして考えると、ソクラテスの「汝自身を知れ」という警句の実践がいかにもむずかしく、同時に深い真理をはらんでいるかということ認識せざるを得ない。

私の性格の一端には、いかにも仏教的な「諸行無常」あるいは「輪廻」といつた風の観念が根強く巣くつている。こういうものが、いつごろ私の身についてしまつたのか、不思議だが、(中略)私のとらえる仏教は非常に感覚的で、しかも宿命論のようなものが常につきまとつている。そうすることによつて私は、若者らしいバイタリティーを失つたり、享樂をたたえてみたり、理論を蔑視したりするような馬鹿げた行為への弁解をしているとも言えるだ

ろう。つまり、意識的に自分から目をそむけているのだ。ソクラテスをまっすぐ見つめることができない。(中略)

とかく甘つちよろい涙を含ませ、感覚で物事をはかろうとする私にとってギリシア思想の、あの明快な理性への信頼は脅威でもあるが、適切ないましめとして忘れることはない。私に融和することはなくとも、いつも私のごく間近に目を見開いて立っているだろうことは確かだ。せめて「汝自身を知れ」をこわがらずに迎えいられる自分になれますように。(K. Y.)

ソクラテスは、ただ損得なしに、アテナイ人に自己を追求させようとした。何百人となく問答を繰り返したことにちがいない。しかし、彼が得たものはいつたいなんだつたのであろうか。私はこう考える。それは、人間の無力さと無知さだ。見掛は、世の中のことで知らないことはないといつたふうな貫祿をもつた人が、案外もろく、ソクラテスとの問答によつて崩れ去つたであらう。それに対して、彼自身どんなに傷ついたことであらうか。どんなに人間の無知さ愚かさを知らされたであらう。しかし、自分自身もその愚かな人間の一人であることを認めざるをえなかつたのだ。だが彼はそれにこりず人々に問答するのである。馬鹿馬鹿しいといつたらそれまでであるが、彼のそういった忍耐強さと人間を少しでも真理というものに目ざまさせたいという願いには敬服せざるを得ない。

自己を追求していく者は、結局、自己の無知をまざまざと知らされるであらう。しかし、その苦しみに勝つのが人間なのである。また、生きていく資格をもつた人間なのであろう。

㊦ 反 省

倫社は生徒に倫理的価値を採求させ、自主的思考を促すものでなくてはならない。例示したエッセーにはそうした萌芽がみられる。しかし、それを線香花火に終らせてはなるまい。年間を通して持続的に、求道の精神にも似た真摯さを生徒に要求するものでありたい。そのためにはいかなる姿勢が必要か。教師自身の不断の精進をおいてはかにかあるまい。

キリスト教

— 授業と評価 —

都立上野高校 海野省治

回 とりあげた理由

キリスト教は倫・社の中で扱かう宗教の分野では仏教と並んで重要な分野であり、是非扱かいたい。日本人にとつてキリスト教は不思議な存在である。人々は「神などいるものか」と言いつつもキリスト教そのものに対する関心は非常に高いといえよう。それは例えば最近出版された遠藤周作氏の「死海のほとり」「イエスの生涯」という二作品がベストセラーに入っていることでもうかがい知ることができる。無関心を装いつつも関心を持たずにはいられない思想であるといえよう。生徒にしても、倫社で扱うということで、教会へ行つてきたという者もいるのであるから。

さて授業展開にあつての導入としては、キリスト教関係の文学作品や、映画を材料とするのも一方法であらう。私は今年度、遠藤氏の前述作品を材料とした。イエスという人物にはいろいろのエピソードがある。聖霊によつて身ごもつたとか、奇跡をなしたとか、十字架に於て死んだとか、復活とかがある。こうした中から私は、イエスという人物は、何ら奇跡を行いえぬ、ひたすら愛を分つことをなしたという遠藤氏の論から入つていつた。身近な人物として生徒に理解させることも導入としては適當なのではなからうか。

倫社授業年間計画の中の位置づけについては、ギリシャ思想と並ぶ西洋源流思想としてギリシャの次に扱かい、ついで、東洋の仏教思想を扱かう。私は従来から源流思想は、教科書的配列、すなわち西洋と東洋を別にするのではなく、西洋・東洋と続けて行なうことにしている。従つて授業配列は、ギリシャ—キリスト教—仏教—中国古典となる。こうすることで、東西古代人の偉大さを浮きぼりにできると考えている。尙キリスト教の中世、近世の流れについては、ルネサンス期の時に一諾に扱うこととしている。

⑥ 授業の方法と観点

	授 業 内 容	留意点・資料など
導 入	イエスの奇跡や十字上の死などについて。	エピソードをまじえてイエスに関心を持たせる。
展 開	<p>(1)キリスト教前史になるユダヤ教やその成立の時代について扱おう。民族統合の象徴としての宗教故に厳しさをもちつことを中心にすえる。</p> <p>(2)イエスの人物像や、彼の生れたころのイスラエルの状況。パレスチナ人のメシアへの期待、ヨハネの影響を受けてのキリスト教の成立など。</p> <p>(3)イエスの教えについて。アガペーを中心として、神の国、十字架と原罪、キリスト教における人間観、神について扱う。</p> <p>(4)イエス以後一弟子達の活動、パウロらによる理論化などについて。</p>	<p>歴史的な事実をふまえて、風土的条件が日本とかなり異なること、そこから人間性も異ってくることに留意する。</p> <p>ここではイエスの人物像を浮きぼりにする。イエスについては聖書の中に見られる姿や一人の人間としての解釈、革命家としてのイエスなどの説があるので、それらも紹介する。</p> <p>ここでは聖書からことばを引用してすすめたい。聖書そのものについての解説もあわせておこないたい。</p> <p>アガペーについてはエロスとの対比もしておきたい。</p> <p>ルネサンスで扱う部分への導入にもする。</p>

学習形態については、発表形式、講義式が考えられるが、いずれの場合においても、私は上記のような点をふまえている。生徒の発表がキリスト教中心であれば、発表の前段階としてキリスト教前史を講義しておく。又講義の場合には、解説、原典引用のプリントを用意して授業を展開する。信仰そのものを説くことは不可能であるが、歴史的事実や、各種の資料を使用することによって基本的な考え方を把握させようと思う。尙最近の西洋神学における「神の死」の立場や、ニーチェ、社会主義者の立場からの批判も扱ってみたいところである。

さて「評価の観点」については、のところでもくわしく語りたいが、一般的なことも含めて述べれば、(1)生徒の発達段階に対応して内容が組まれているか。(2)内容が精選かつ系統的となつているか。(3)考えさせる授業となつたか。(4)学習評価が適切なものとなり得ているか。(5)現代とのかかわりが考慮されているかなどが考えられる。上記の点は主として事後評価ということになると思うが、勿論事前に検討は加えられていなければならぬ。キリスト教の場合においては、扱う時期にもよると思うが、(1)について言えば、ギリシャ思想の反応、理解度を見てから必要であれば内容を再検討することとなる。 (3)については、一番むずかしい点ではなかろうかと思う。講義式の場合に教師の側からの適切な発問がなされ、ある程度の間において答えさせるというパターンがうまく行けば、かなり「考え」させることが出来よう。しかし何を生徒に問うてみるかという点が、私はまだ自信がない。現状ではつい一方的にしゃべりまくることになってしまう。こうなると授業をしていて学習の効果があるのかないのかという点での評価はできにくくなる。ポイントをおさえ、発問し、答えがもどつてきたり、逆に質問がなされるところで学習効果の評価が可能となるといえる。問や答の出ない講義は、すべてわかつたか、全くわからぬかのいずれかであるからだ。この点は私は現状では不十分であると思つている。(4)は、例えばペーパーテストに出す問題を考える際に自分が授業で何を話したか、ということが思い起こされねばならない。そ

こから問題が出来るからだ。従つて大ざつばな問題しか出来なかつた時には授業もそうであつたということになる。

㊦ 評価の方法

評価ということに二種類あることは広く知られていることである。これは私も今年度9月の例会で発表したことであるが、もう一度述べるならば、

(1)事前・展開、事後を含めての「授業についての評価」

(2)生徒の学力到達度を見る評価—評定を出す。

の二つになる。(2)の中にも一の部分が含まれてくることは当然のことである。

さて発表の時にも述べたように私は毎年度末にその年の授業形態や内容についての検討をすることにしてゐる。今年度もその時期にやがてなろうとしているのだが、現段階で私が一番感じていることは現任校の上野と前任校の江戸川の生徒の持ち味が異なるのだということである。江戸川の生徒は、例えば、説明が具体的かつ身近なものであることを好む傾向にあつたが、上野においては原理的なこと、抽象化された内容を好む傾向にあるとか、発表学習を行つてみると、上野の方では、一定時間内で終るように要領よく行い、聞も手の方も案外まじめであるとかがいえる。こうした相違から思つたことは、我々教師は生徒の実態をまず十分に把握し、その上に立つて授業展開をする必要があるということである。それからこれも又当然のことであるが、年間計画の充実ということがあげられよう。これ如何で学習効果はかなり異なる。今年度私は、昨年度の反省に基づき、「ソクラテスの弁明」をグループ学習で読ませた後、発表を中心とした学習を行なつてゐる。「弁明」においては原典の読み方、読書ノートの取り方の指導をした。そしてこれを土台として各思想の個別研究を原典中心に進めている。研究過程を生徒に聞いてみたり、メモなどをのぞいてみると、「弁明」が活かされていることがわかる。授業効果についての評価は、随時生徒の動きを見ることでかなりなしうることだと思ふ。又時に生徒に授業についての感想や意見を書かせることもよいことである。

さて次に評定の参考のための評価材料について述べてみたい。ここではペーパーテストの問題をあげてみる。

問 キリスト教の神という概念と、仏教における仏陀（ホトケ）の概念について比較せよ。

この問題は私が良く提出するものである。この問題においては比較ということを中心とする。講義にせよ、発表にせよ思想相互の類似点、相違点を考えさせることでそれぞれの思想を浮きぼりにするわけである。又ここから西洋における宗教と東洋における宗教の有り方も考えさせる。私は試験も授業の延長線上にあり、試験時間においても考えるという作業を続けさせることを考えている。従つて時には、必要資料持ち込み教科書、ノート、プリント、資料集などで実施することもある。又あらかじめ問題を生徒に示しておくいくつかの問題の中から1～2題出すこともある。問題は授業内容に対応したものということになるが、実施して、採点の過程で明確になるのは生徒の授業態度や受けとめ方である。聞いて理解しえたか、全く聞いていなかったか、又こちらの話し方が不十分であつたか否か等々が明確になる。

生徒の学力評価については、私は総合的なものとして成績を出すこととしている。材料としては出欠席、テストやレポートの点、ノートの提出状況、その内容、授業態度、発表内容などである。あまり材料がそろいすぎて五段階を出すのに苦勞する一数字で表わさねばならぬ点で一こともあるがおおむね然るべき評定が出ているようである。従つて単に理解度が良かった悪かつたという点での評価でないことは勿論である。

前にも述べたように、評価の二つの面を考える際に我々がまず考慮しておかねばならぬことは、生徒の実態把握である。これを徹底的になすことで、授業内容も、評定も適正なものとなるといえよう。生徒を把握すること、これが評価の第一歩である。

仏 陀

部立葛飾野高校 吉 沢 正 晶

㊦ 教材観（精選の視点）

1. 仏陀についての学習は、その思想が東洋思想の一大源流であるばかりでなく、人類思想史的に見て重要なものを含み、倫・社の指導目標に照らしても、重要な意義内容をもつものとして、教材の取り扱いを考えたい。

2. 仏教についての生徒の既有的のイメージは抹香臭い葬式仏教のようなものになっているので、それをまず除去し、思想としての仏教、仏陀の根本思想へと誘導しなければならない。

3. 小乗仏教・大乘仏教の発展的概念と仏陀の根本思想（根本仏教）とを混同せず、仏教の根本的な意味、その思想内容のポイントをできるだけ明確にしたい。（学問的用意が必要であるが）。

4. 新教科書では、バラモン教やウパニシャッド哲学など、仏教前史的な内容も従前よりは多く記述されているので、ウパニシャッド思想の超克の上に仏陀の思想が生まれているという点もおさえるべきポイントであろう。

5. 唯一神や絶対者をおかない根本仏教の特徴を、キリスト教との比較において考察させ、宗教や思想についていちだんと知見を広くさせるようにすることも、この教材のもつ一つの重要な意義であろう。

6. 仏陀の思想学習への導入は、人間の苦悩の問題に関心を向けることから、または人生の無常という日本文学に現われたもの（国語教材）から入る、などが考えられる。

㊦ 指導の要点と方法

指導内容のポイントを仏陀の根本思想におき、高校生の理解力に応じて教材化をはかりたい。そしてそれはつぎの諸点にあると考える。

1. 人間にとつて何が人生の苦悩となるかということ（苦諦・苦集諦）

2. 現象の生起について（因果（縁起））
3. 人生苦からの自己解放・主体的自由への道（解脱）
4. この世の中と自己とは（五蘊の無常無我）
5. 仏陀の愛（慈悲）
6. 目が覚めた人生（正覚）

上記の番号づけによつて以下指導過程，学習形態，準備資料などを示しながら，授業の一展開例を示してみよう。

1. 導入として，人はだれでも何か悩みがありがちである，それが何であるか，どこから来るか，を仏陀は考察した，という点から資料の「苦諦」を読ませ，講義で整理する。人生苦の実態と，ことに四苦八苦の最終まとめの「要するに身心のはたらき（五蘊）が執着するのが苦悩である」という点をおさえる。人間の執着心に仏陀は省察を加えていることが一つのポイントである。外見上，何ひとつ不自由のない生活をおくつている人も，その心の内奥に人知れぬ悩みを抱えていることがある。つまり輪廻の苦ということを問題にし，真の主体的自由を問題にさせたいわけである。種々の大学作品から例証を引くことも考えられる。（問答と講義による）

2. パウロのキリスト教が唯一神教としての神の愛に一身をうちまかせるという方向をとるに對し，根本仏教ではむしろ目覚めた知見をもつて現象を観察し，自己の省察悟得を達成することが中心になつている。「もろもろの現象は原因に縁つて起るもので，その原因とその消滅とを仏陀は説く。」という縁起についての知見から後に出す資料へと流れをたどることができる。（資料にもとづく講義）

3. 官能的欲望のままの享樂的な生き方は決して真の自由幸福につながる自己解放の道ではなく，また反対に苦行（禁欲生活）も解説に到らないとした仏陀の体験を資料から読みとる。（資料にもとづく講義）

4. ここでは，いろは歌を参考にしてもよい。すべて生まれたものはまた必ず滅するものであることの省察から，無常ということが人間の身体につい

でもそう観られ、また心の作用についてもそう観られたこと、そしてそこにはアートマン（個人我の原稿）はない（無我）こと、自己と世界の現実がはつきりしたことが仏陀の悟りの内容であつた。（資料並に教科書に依る講義また、いろは歌の鑑賞から発表させ、それに応じた講義を加えるなどの方法が考えられる。）

5. 仏陀の愛はキリスト教の示す神の愛と比較すると理解はしやすい。神の愛が無差別で、どんな小さなものにも、またむしろあわれなもの、劣つたものをも見捨てない愛として示されているのに対し、仏陀の愛はそのような愛も含みつつ（慈悲）、またキリスト教の愛が人間を対象とする愛であるのに対し、仏陀の愛はあらゆる生類に及び生命への愛である。（講義）

6. 仏陀の体験とその教説は何よりも自覚あるはつきりした意識に立つことであり、自己を光明（自覚知）とし、自覚ある自己を依りどころとして他を依りどころとはしない自力になつており、そして自他を含む現実の流れの無常に徹する（執着のない）ことが示されている。仏陀（Buddha）とは覚者（いつも意識判断がはつきりしている人）であつて、天上の神ではなく、地上の人であり生きている人のことをいつたものであることを更めて知ることになる。（資料にもとづく講義）

準備資料としては、ベック・渡辺照宏訳「仏教・上」（岩波文庫）の中からパーリ語文献のドイツ語訳からの和訳になるが、伝記的仏陀資料が得られる。学習形態としては、資料と設問による演習方式や、問答法を入れての講義式など考えられるが、重要事項は講義によらなければならないであろう。

㊦ 評価の方法

倫・社の目標と内容に照らして、倫・社の評価の観点はおよそつぎのような点に考えられる。

1. 読みとるべきことを正確に読みとつて自分のものになっているか。（「学ぶこと」）

2. 読むべきもの（教科書、参考資料など）をよく（くりかえし）読んだ

か。(「習」うこと)

3. 自分で考えたか、人生の思索へと心に向けているか。(「思」索すること)

4. 表現すること。(発表・討議・レポート等)

5. その他、講義の聴きとり、うけとめ方、文章表現、文字の正確さ、など。成績評価はすべての学習活動の記録を総合して表わす。その中で仏陀の学習については、評価の観点を何に置くかを考えてみよう。

前項 ㊦ の指導の要点と方法とその展開例に即して、その1については生徒との問答を通して、自分の身にとつて考えさせ発言させてみる。輪番制その他の演習方式で、理解度、思索の態度、表現力などを評価する。これらの評価は教師の授業方法改善につなげる。指導の要点の2以下6までについては、その一部の評価問題例として、本年度私が作成し実施したものを紹介すればつぎのようなものである。

<問題例1> 根本仏教とキリスト教との相異点を考え、次の(1)~(6)の各項につき、前者に関することは仏、後者に関することはキ、と記入して区別せよ。(1) 唯一絶対の神への信仰。 / (2) 絶対者を考えていない。 / (3) もろもろの現象は原因に縁つて起るものであると説く。 / (4) 神の愛を示す。 / (5) 世界と自己について無常と無我を觀じた。 / (6) 自覚による知をよりどころとする自力の生き方。

この問題のねらいはキリスト教との比較において根本仏教の特質を把握できているかどうかという点にある。そしてその根底の学習の成果として、ことからの関連性把握、宗教とよばれるものの中にも相異性があることへの理解、すなわち宗教なるものについての知見を広めさせること、などの評価の観点が用意されている。なおこの程度の問題水準で、普通高校群中実力テスト平均点最下位レベルの生徒について、90%以上の全問正解率が得られた。もつと学力の高い生徒の学校にあつては、以上のような内容の記述を期待する記述式の問題にすることも考えられる。すなわちつぎのような例である。

〈問題例2〉 仏陀の根本思想につき、つぎの観点をおさえて記述しなさい。(1) 仏陀(Buddha)という語の意味から仏教の問題の中心。(2) 多神教、一神教というような宗教とくらべて、(3) 神の意志というような考え方に比して、仏教は現象をどう見ているか。(4) 仏陀の愛(慈悲)とキリスト教の神の愛。(5) 無常・無我ということ。(6) 他力と自力。

この問題の評価基準は、観点の一つ一つが正確におさえられ、ことからの関連性把握や、比較理解、などが正確かどうかという評価の観点で、まちがい、不足の点を減点法で採点する。問題の観点については整理統合して数を減じてよい。なおこの問題例についてはまだ実施していないので、結果について問題例1のようなことは述べられない。

またもう一つ、ウパニシャッドの梵我一如の大我の哲学を超克した仏教の無我と無常の体験についての考察の問題も考えられる、が、これは高校生の段階では至難かもしれない。

要するに倫・社の評価は末梢的な知識の量的な評価でなく、ことからの本質性の会得、ことからの関連性把握、民族や歴史や時代を超えての人類の相互比較による考察などにつき評価するものであらうと思われる。評価問題はこのような基本的観点から作成されねばならぬと思われるが、これの達成はかなり研究を要することがらであり、この点、われわれの研究実績はまだまだ不足であることを痛感し、今後の研究課題の一つに加えておきたい。また、ペーパーテストによる評価の領域は客観性はあるにせよ全面的なものにはなりにくく、どちらかといえばやはり知識理解を問う領域を中心とし、その他の面はレポートや発表などを通し、日常の学習活動を多面的にとらえた評価となるべきであらう。ペーパーテストの問題も一夜漬の記憶だけを問うものではありたくない。思索を深めることを求めるような問題、ことからの関連性や比較考察から何かに気づかせるような問題をくふうしたい。倫・社のテスト問題は単に点数測定的なものではなく、テスト問題ととりくむこともまた思索的学習となるようなものではないかと考えるのである。

「孔子の考え方」の評価について

— 工業高校の生徒の反応 —

都立田無工業高校 本間 精

㊦ とりあげた理由

私の学校は工業高校であるため、古典の時間は実に少なく、古文を教えるのが精一杯であり、漢文は殆んど教える時間がない。それで孔子の思想については、全くといって良いくらい生徒は知らない。

孔子の思想は日本に大きく影響を与え、私達の中に深く沁み込んでいる。とは言ふ迄もないが、孔子の思想は今日の私達にも教えて呉れる面を沢山含んでいる。私達が生きてゆくときの心構えといった感じのものが多い。特に「論語」の文章は、人間の真実の生き方を求める私達にとって、胸に喰い込んでくるような内容を持つている。このような孔子の思想を、古典の時間が少ないからといって、全然生徒が学習しないというのは誠に残念である。将来社会に出ていろいろと自分の考えを持つてゆくときに、孔子の思想を全然知らないというのでは、本当に淋しい思いがする。そこで、倫社で多少なりとも時間をさいて孔子の思想の一端を扱い、青年期にある生徒達に「論語」の現代的意義を考えてもらえればと思つたのである。

この現代は、人と人が対立したりして何となくぎすぎすした感じがしないでもない。お互いに個人は個人として独立しているだけで、何か心の通うものが少ない。そういう中で、人の「まごころ」「思いやり」に接すると、何かほのぼのとした思いがする。その「まごころ(忠)」「思いやり(恕)」を説いてやまなかつた孔子の考え方を学ぶことは、私達が生きていく時に、真に人間らしい誠実な生き方を教えて呉れるだろう。そして、人間性の溢れる社会が期待されるだろう。

㊧ 指導の方法と視点

孔子を学ぶには「論語」に直接触れるのが一番であるが、多少なりとも孔

子の生きた時代背景とか孔子の生涯などを知っていた方が生きた理解ができるので、大体次のような順序で指導してみた。

①百家争鳴の時代

②孔子の生涯

③孔子の考え方(思想) — 「論語に学ぶ」というプリント2枚

①は孔子の生きた時代背景である。孔子が生きた時代は春秋時代であるがその春秋時代はどのような風潮の時代であつたかを説明する。②は孔子の生涯の概略を説明する。ある程度孔子の生涯について知っていないと、「論語」を学ぶときに理解しにくいことが出てくる。それで、孔子の生涯のあらましだけでも生徒に理解してもらうのであるが、最低次の事柄だけはおさえない。

⑦学に志す(15才) ④魯の国の動乱 ⑥大司寇(司法長官)になる ⑤三桓子打倒に失敗 ⑧流浪の旅 ②燕に帰り教育に専念

③の孔子の思想については、「論語に学ぶ」というテーマで論語の抜粋とその現代語訳をプリントにして、2枚ほど生徒に配り、その各句を検討することにより孔子の考え方に迫ろうとしたのである。ただし、漢文のままの抜粋をプリントにすることは私達の学校の生徒の読解力に堪え得ないので、書き下し文の抜粋にした。そのプリントの一部をここに掲げてみると —

⑦曾子の曰わく、吾れ日に三たび吾が身を省る。人の為に謀りて忠ならざるか、朋友と交わりて信ならざるか、習わざるを伝うるか。(学而)

④子の曰わく、其の以す所を視、其の由る所を覩、其の安んずる所を察すれば、人焉んぞかくさんや、人焉んぞかくさんや。(為政)

②子の曰わく、士、道に志して、悪衣悪食を恥ずる者は、未だ与に議るに足らず。(里仁)

⑤子の曰わく、利に放りて行えば、怨み多し。(里仁)

以上がプリントの一部であるが、おおかたの所は現代でも活きていると思われるような文を選んだ。何故、現代でも活きていると思われるような文を選んだかという、プリントで少しでも論語の言葉に接して、現代に生きる生

徒達の血となり肉となることを願つたからである。論語は知的理解に終るものではなく、日常の生活の中で血となり肉となつて生かされるのが本当だと信ずるからである。

プリントの論語の抜粋文を検討しながら、評価については、論語の各文の正確な理解と共に、それを自分の生活の中に還元してどのように受けとめどのように感じていつたかという点も考慮した方が良いのではないと思つた。だから評価に際しては、2つの柱即ち、**㉠**各文の正確な知的理解、**㉡**論語への主体的感想という2点からの立体的な評価をしようと考えたのである。

㉢ 評価の方法

前述の如く、**㉠**と**㉡**という2つの評価の観点^をを定めた私は、先ず**㉠**を実行すべく、テストに次のような問題をのせた。

※次の各文を現代語訳せよ

- (1) 子の曰わく、巧言令色、鮮し仁。
- (2) 曾子の曰わく、吾れ日に三たび吾が身を省る。人の為に謀りて忠ならざるか、朋友と交わりて信ならざるか、習わざるを伝うるか。
- (3) 子の曰わく、学んで思わざれば即ち罔し。思うて学ばざれば即ち殆うし。
- (4) 子の曰わく、古者言をこれ出ださざるは、躬の逮ばざるを恥じてなり。
- (5) 子の曰わく、君子は諸れを己れに求む、小人は諸れを人に求む。
- (6) 子の曰わく、剛毅木訥仁に近し。

このようなテスト問題である。恐らく、漢文(古典)のテストみたいだという批判も出てくるかもしれないが、冒頭で述べたように私の学校は漢文を殆んどやらないので、敢えてこのような問題にしてみたのである。これに対して生徒も、予想していたよりは比較的良好に解答していたようである。採点しながら、結構みんな勉強してきたなと思つた。このような訳で、評価の観点**㉠**の目的はほぼ達成されたと言える。

⑧の「論語への主体的感想」のために、生徒に感想文を書いてもらうことにした。生徒に「論語のプリント全体についての感想でも良いし、プリントの一部の文についての感想でも良いから、感想文をレポート用紙に書いてみなさい」と言つたのである。そのようにした所、生徒は割合によく身近な問題にひきつけて感想文を書いてきた。全然自分とは関係のない世界の聖賢の言葉としてではなく、自分の問題にひきつけて書いてきた感想が多かつた。

では、次に生徒の感想文の例を少しみてみたい。

㌘ 生徒 A

他の語もそうだが、「子の曰わく、巧言令色鮮し仁」という文は、特に現代に通用する文である。ものの言い方がうまく顔が良く、着るものにばかり気を使うような人間は、中身がうすいことが多い。たとえ頭が良くても、人間的に劣る人間が多い。また「仁」という字は、先生の訳した「まごころ」という意味の他に、何か今の殺伐としたこの世の中で殆んどの人々が見失つてしまつた、人間としての最も大切な心であるような響きを持つている感がある。他にも気に入つた文がいろいろあつた。たとえば、「子の曰わく、故きを温めて新しきを知る、以て師と為るべし」などである。

㌙ 生徒 B

論語は全て人間があるべき姿というものを追求しているようである。「子の曰わく、利に放りて行えば怨み多し」などは、エコノミック何とかといわれる今の日本の企業を鋭く批判している。このままていくと日本はどうなるのだろうか。仏教でいえば、釈尊が説かれた真理とは宇宙の真理であつて、その真理は枉げることが出来ないといわれているが、論語もそれと同じである。時代が進歩していくら文明が発達しても、きたない人間の心というものは、見かけや嗜好が変わつても同じなのであります。

情報の氾濫、知識の流出などで狂つてしまつている世の中。もう一度人間本来の原点に戻つて、この論語などを深く胸の中に刻み込んでおくことが必要なのではないのでしょうか。そう、いつも自分の事ばかり考えている君に、

(ウ) 生徒 C

孔子の思想は、二千年以上もたつた現代においても人々の心の本質を貫き永久不変の理として生きている。論語に限らず、偉大な思想は、どんな時代にあつてもその時代の人々の心に深く涵みこむものだと思う。特に世の中が乱れているときは……。然し、孔子の思想もちよこちよこと解釈してそれで終りにしてしまつては、それこそ「論語読みの論語知らず」となつてしまう。偉大な思想は、それを読んで考えて、自分なりの考えをもつて自分自身の中に取り入れなければならないと思う。でも、まあ現代人の中にはこの孔子の考えは深く入りこんでいると思う。然し、もう少しこういう思想に触れる時間があつても……ように思う。忙しさに紛れて自分を見失わない為にも。

以上が生徒の感想文の例であるが、これらを読むと生徒が主体的に論語を自分の内に取り入れていることがわかる。中には、論語に対して批判的な事を書く生徒もいた。然し、そのような生徒は全体から見れば僅かであつて、生徒も素直に論語に取り組んで呉れたように思う。

以上の事柄をまとめれば、評価の観点(A)(B)から見て、大体において目的は達成されたと言えよう。私も心嬉しく感じられたことである。ただ、心残りな事は、今後より良い授業、より一層充実した授業を望むならば、感想文で生徒Cも言っているように、もう少し時間をかけてじっくりと孔子の思想を扱うことも必要であろうということである。5時間くらいできつと過ぎていくのではなく、もつと時間をかけて幅広く奥行き深く理解できるようにする方が良いのではないだろうか。そうすることによつて、評価の観点(A)(B)もより一層中味のあるものになることであろう。今回の評価にあつて、評価の観点(A)(B)の目的は大体達成されたとはいえ、実質は薄つぺらなもので終つてしまつたのではないかという反省が残つた。

今後、評価の面とも絡みあわせて、より一層充実した授業を目指して一步一步着実に歩んでいきたいものである。いろいろな失敗や試行錯誤があるかもしれないが、それにくじけず、たゆまず前進していきたいものである。

「思想の源流」その導入の しかたと評価例

日本大学第二高校 小笠原 悦郎

㊦ とりあげた理由

「現代と人間」の学習を終え、いよいよ「人生観・世界観」のうち、「思想の源流」に入ろうとするとき、そこにひとつの工夫がなければならない。それは「思想の源流」の導入部であるとともに、「人生観・世界観」全体の導入部ともなり、ひいては、「現代と人間」と「人生観・世界観」との橋渡しともなりうるものへの工夫である。

「人生観・世界観」の学習は、狭い意味においては「倫理思想」といえるであろうが、その倫理思想は、哲学が土台となっており、哲学することへの入門的な教材をとりあげるることによって、思想学習への意欲を高めることもできよう。そこで、「哲学とはなにか」といつた教説めいたことはやめ、東西を代表する哲学者によつて記された文を読解しながら学習をすすめる試みをしようと思う。

㊦ 指導の方法と観点

思想学習の出発点に立つとき、思想を学ぶ意味づけをしたがら、思想学習への興味をかきたてる必要がある。思想の方面でいう「真理とはなにか」、
「人間はなぜ哲学するのか」といつたことへの、不完全ながらも、尋きとしての教材は、ヤスバースの「哲学入門」（草薙正夫訳：新潮文庫）と、三木清の哲学入門（岩波新書23）が手ごろかと思われる。これら2つの書をすべて扱うのではなく、それぞれの一部分を引用し、それを生徒とともに読みながら、読んで理解し、この2人の哲学者のいおうとしていることの共通点を考えさせようとするものである、紙面の都合で該当する部分を記すことができないため、それぞれのページと行を示しておくので、上掲書の該当部分をひもといていただきたい。

㊦ ヤスバース「哲学入門」

P.16, l.1 「人間は人間である限り、根源的に哲学するものであるという事実を示す驚くべき証拠は…… P.17, l.14 ない逃れ路を求めるのでありましょう」まで。これにつづけて、

P.19, l.13 「さて、かくも一般的に、……P.20, l.4 哲学の本質は真理を所有することではなくて、真理を探究することなのであります。哲学とは途上にあることを意味します。哲学の問いはその答よりも一層重要であり、またあらゆる答は新しい問いとなるのであります」まで。

この部分に1時間をあて、その主旨を要約しつつ、著者のいおうとすることをまとめさせていく。その要点は、自己存在の謎への驚き、知性は停止させることができないことの経験、現存在はそれ自らによつて存在するのではないという現存在の不思議さの理解、そして、万物が必滅無常であることに対する驚きと怖れ、などについて、实例をあげて説明されており、哲学することのめばえが、疑いや驚きや怖れにあることが指摘されている。さらには、哲学者は、知識をもつことによつて知者と呼ばれる人ではなく、知識（知）を愛することによつて、はじめて哲学者といわれること、哲学の本質は、真理を探究すること、すなわち、途上にあること、と定義されている。

㊧ 三木清の「哲学入門」

P.1, l.1 「哲学が何であるかは、誰もすでに何等か知つてある…… P.2, l.5 現実以外に哲学の出発点はないのである」（中略）P.3, l.8 「哲学的探求の初め……P.4, l.2 従つて哲学することを措いて哲学はないのである」まで。

この部分に1時間をあて、その主旨を要約しつつ、語句の意味をおい、著者のいおうとすることをまとめていく。その要点は、すべての人間は哲学者であるといえる。なぜなら哲学の出発点は、現実から出立するゆえに。その現実とは、われわれが生きている場所であること。そして、少し知られ、かつ未知なるものを含むから、知識の所有であるより所有への行程が哲学であ

り、哲学することをおいて、哲学はない、という。

以上の学習をふまえ、さいごに、ヤスパースと三木清の両方の文から、哲学とはなにか、への定義の共通点を導きださせるように指導する。

㊦ 評価の方法

上にかかげた2つのプリントを教室に持参させて、下記のような問題を提出した。なお、ヤスパースの文には、あらかじめ、句切れごとに符号をうつておいた。

- ㊱ 「人間は人間である限り、根源的に哲学するものであるという…」
- ㊲ 「或る子供が不思議そうに言います。………」
- ㊳ 「また或る子供が、初めに神天と地を創り給えり、………」
- ㊴ 「或る子供が偶々森の中の草地を散歩しながら、………」
- ㊵ 「また或る少女が人を訪問するために階段を昇つていきます。…」
- ㊶ 「さてかくも一般的に、またかくも独特な形態をもつて………」
- ㊷ 「哲学者 (philosophos) というギリシヤ語は、………」

問題 つぎの文を読んで、あとの問に答えよ。

(A) りんごの落ちるのを見たのは、ニュートンが最初ではない。しかし、落下するりんごからヒントをえて、万有引力の法則という真理の秘奥の扉をひらいたのは、ニュートンの不朽の功績であつた。ニュートンの凝視にありまで、りんごは不敵の法則を黙示しながら、いたずらに落ち続けていた。

(B) わたくしたちの眼前には、わたくしたちが生まれる前から厳然と存在し、その事実を知りながらそれを真理として体系づけることを知らないようなことが、まだたくさんあるであろう。その機微をとらえるには、ものを見る目がかがやいていなければならない。対象の機微を洞察し、なんらかの未知の真実を発見するには、このことにあたる主体にそれを可能ならしめるような充実が必要である。すぐれた観察眼・洞察眼は一朝一夕でかがやきだすものではない。不断の努力が必要である。発明や発見は、偶然を契機として成ることが多いが、そのことをもつて、発明や発見が成る日に成つたと思う

のは、皮相の見かたである。

問 1. (A)の文章の内容を説明するのに、ヤスパースの文章のうち、どの部分が、最も適切と考えられるか。a, b, c……の文の符号で答えよ。

問 2. (B)の文の内容を説明するのに、三木清の文章中から、最もふさわしい個所を見だし、該当する部分を書きだせ。とくに、(B)の文中、アンダーラインをほどこした部分に留意せよ。

問 3. 「ものをみる目は、自然界の現象を科学的に観察し記録するとき光つていればよいというものではなく、精神界の事象に対しても、人間関係に対しても、常にかがやいていなければならない」。

この文章を読んで、哲学の対象とするもの (ア) と、科学の対象とするもの (イ) との、その対象のちがいを、解答欄の (ア) と (イ) の部分にそれぞれ答えよ。また、人間関係のあるべき姿をとくに重視して研究する学問分野 (ウ) は、ふつうなんと呼ばれるか、〇〇字と、漢字2字で、解答欄 (ウ) の個所に答えよ。

問 4. (B)の文中、「真理」の語は、古代ギリシア人はロゴスと呼び、古代インド人はダルマと呼んだ。ロゴスといい、ダルマといい、その呼びかたはちがついていても、同じ内容を別の表現をしているとも解せる。両者に共通する点を、ロゴスとダルマとの語義から考えて、答えよ。

問 5. ヤスパースと三木清とは、「哲学」をどう定義しているか。

<さいごに> プリントを教室にもちこませ、学習したところをベースに解答を考えさせたので、生徒は困つたらしく、それが得点にあらわれ、全体としてできがよくなかった。あとで、ひとりよがりの出題ではなかつたかと反省したが、ねらいはあくまでも、考えさせる問題の作製にあつた。

新しい方向を模索するには、いたずらに敬遠することなく、積極的に、大学入試にみられる良い問題を研究し、それをもとにして、自らの授業にふさわしい評価問題の作製に努力しなければなるまい。授業はすばらしいか、評価問題は他人の作ったもので、と逃げないで、授業には責任をもちたいもの。

第3分科会〈現代と思想〉

研究経過報告

第3分科会は、第1回目の会合を9月8日の土曜日の午後、小石川高校で行った。まず本年度の研究テーマについて話し合った。確認されたことは

日々の「考えさせる倫社」の授業の実践を基礎にして授業は次第に改善されねばならない。評価を伴わない授業は空論に走るおそれがある。評価によつて指導のあとを省み、次の指導の実践が計画されて、実践は反省によつて向上する。反省は評価によつて裏づけられる。倫社の学習の結果、生徒は各自どうなったか。学習活動をした結果の価値が確かめられなくては本当の評価とはいえないだろう。「考えさせる倫社」の実践のためのより良い評価の仕方、方法を研究していこう。

以上の確認の上で、第2回目の会合を10月20日小石川高校で行った。苦勞したのは分担する項目で、研究テーマにそつた項目は特に考えられず、ルネサンス、合理論といった分類、思想家ごとの分類、「哲学的なものの考え方」など指導要領の主題による分類の三種類の項目をつくり、各自の分担を次の会合までに決定することにした。

第3回目は第2分科会と合流して 月 日 に上野高校で行った。そしてもう一度執筆内容をどうするか意志統一を行つた。

第3分科会主催の都倫研例会は11月6日(火)、福生高校で開かれ、福生高川上先生の研究授業、当分科会の安田学園香川先生の研究発表と成澤大上妻精氏のヘーゲルについての講演が行われた。香川先生は私立の職業高校の生徒の学力低下の現状の中でどのようにして「現代に生きる倫社」の授業を行うかへの苦心を述べられた。そして評価については実践されている試験問題と課題学習についての報告をされた。教科書、参考書を学習させる試験問題と課題研究で、オーソドックスな評価の仕方であると見受けられた。

以上が今までの第3分科会の活動経過である。 (田中記)

〈第3分科会〉現代と思想

「経験論」の学習にあつての覚え書き

都立豊多摩高等学校 服部進治

はじめに

教壇に立つて数ヶ月を経たにすぎない私にとつて、体系だつた授業の実践報告はのぞめそうもない。したがつて、以下の叙述は、与えられたテーマである「経験論」を学習するにあつての、私自身の立場あるいは学習の視点についての個人的な覚え書きである。

1. 授業への視点

以下長くなるが授業を展開するにあつての私の視点を述べるることによつて教材観に代えたいと思う。同時にそれは評価の視点ともなろう。

現代の「不安」な状況におかれた生徒達は、将来にわたる自分の生き方を見定めることを願いつつも、その糸口を見いだせないでいる。またそれを見いだすための経験もしていない。狭い自己の世界にとじこもりがちである。そして何よりも彼らが未来を生き生きと生きていけるための教育の状況はいかなるものであろうか。

確かに彼らは、「人生」の問題に関心を持ち、考えてはいる。しかし、彼らの人生論は、個人的な精神のあり方いかんで現実には灰色にもバラ色にも変わる「心がまえ論」あるいは「根性論」でもある。したがつて狭い個人主義的な「生きがい論」からぬけでるには、どうしても我々の人生を含めた世界をそもそもどの様なものとして理解したら良いかという、哲学の根本問題をあきらかにせざるを得ないのである。

「思想家の思想を自己の問題としてうけとめる。」というお題目も、生徒には、例えば「ソクラテスの死」が直線的に、「自己の節をまげずに死に服したソクラテスは、現代のひ弱な僕らに比べると偉大だ。」と狭い自己の世界に短絡させられてしまう。キリスト教の「アガペー」も「現代の私達には

愛の精神が欠けている。」と短絡的に即ち非歴史的に抽象化されてしまう。

哲学の根本問題ぬきの倫理思想は、抽象的な—非科学的な—そして非歴史的な、したがって、ばらばらのまとまりのない「知識」のそれも「個人主義的な「把握」へと生徒をおちいらすのではないか。

思想は具体的であり、歴史的である。そのことによつて、かえつて思想は世界的、普遍的になる。具体的、歴史的とは、ひとつひとつの思想が、その時代の社会、民族、民衆の切実な課題を自らの問題として追求したということである。そうして形成された思想は、思想それ自体のもつ論理の自己展開として、その時代へと発展継承させられるのである。

私は、生徒が歴史的なそして具体的なものの見方をすることによつて、現実認識を豊かにし、広く社会的なもの見方考え方ができる様にと願う。それが科学的・論理的思考に裏うちされた時には、ものごとを多角的に、構造的、全局的に把握できるだろう。ニヒリスティックな相対主義におちいることなく、自己と他者との共通認識を謙虚にわがものとして、そこから広く他者と連帯する中で現実問題を解決していく態度が身につけばと思うのである。

2. 学習の課題

① 経験論の認識論的とりあつかい

近代思想のとり扱いは、どの教科書も社会契約説を中心とした倫理思想史で、認識論の問題はその比重が軽い様に思われる。しかし、契約論の導入として、さらにドイツ観念論との比較においても、近代の人間観の歴史的到達点をあきらかにするためには、経験論の認識論的側面をあきらかにせねばなるまい。

生徒は経験論の「経験」を、多くの事物の経験をするといつた常識的、日常的な経験と解釈する。したがって先ず、経験論の哲学的な原理は、感覚の問題であることをあきらかにする。ロックの『人間知性論』におけるタブラ・ラーサの説明をデカルトとの比較においてなす。知識と行動の源泉を感覚に求める立場を経験論という。

ここで生徒は、周囲の事物が人間の意識とは独立に、客観的に存在することを、あつさりと体験的に確認する。しかし、このままでは単なる素朴實在論の立場であつて、重要なのは物質の客観的實在性を承認したうえで、主観と客観との関係についての、意識的な問いかけが必要なのである。経験論は自分の感覚の實在性を承認するだけでなく、感覚を呼び起こす物質的事物および過程—運動（ホッブス）—が存在することを承認する。経験論が哲学的唯物論の発展にはたした意義はここにある。

ここで、さらにその歴史的意義と同時に、限界を指し示すことは、カント、ヘーゲル、マルクスへの流れをつかむうえで重要である。経験論の認識論的研究の中心は、感覚的認識であつて、理性的認識はまだ質的独自性をもつていなかった。人間を自然的存在（Human nature）として解したので、認識過程が社会的歴史的過程でもあるとは解されず、それ故抽象的な主観の孤立した個々の認識過程であつた。そこには、主観と客観（対象）を能動的に媒介するものとしての実践的活動がないから、認識（意識）は、単に客観が主観に働きかけた結果の受動的な模写（鏡）でしかなかった。ここから、素朴實在論を克服する道が、実践の問題即ち認識論的には弁証法の唯物論的適用の問題に求められる。（マルクスへの予備知識として）

経験論は、人間の社会的存在についてあきらかにする一契約論の導入として—。太田可夫氏が指摘する様に、ドイツ観念論における感覚に左右されない（従つて欲望から自由な）純粋な人間—むしろ個々の区別が抽象された人間性一般—からは、人間の社会的存在の理論はでてこない。純粋な人間は区別を持たない。人間は経験的になることによつて、即ち肉体を持ち、欲望を持ち、感情を持つ個性の人間になることによつて、社会的になる。従つて他の人間から独立することが、経験論では自由の意味となり、ここに自然法としての他人との関係を考慮する社会規範—社会契約—が必要となる。

② 学習の評価

試験問題（2題のうちI）は経験論と合理論において到達した近代の人間

観をまとめさせた。生徒は自分の感覚的経験から判断して、経験論の方を受け入れやすいものとした。しかし問題は一従つて私の指導上の反省でもあるのだが一生徒がそこから推して、安易に個人的な「好き嫌い」の価値判断をしてしまったことである。長い歴史の中で科学的な世界観の形成という観点からみると、思想内容の歴史的役割を客観的にみつめさせることが必要であろう。客観的（科学的）に把握したうえで批判や反批判は生まれるのである。これは思想そのものをとらえる態度の出発点ともいえる。

今回初めての試験にあつての評価の基準は、この歴史的な見方（意義と限界ならびに科学的世界観へむけての課題）を謙虚に誠実に叙述することに眼目をおいた。

問題Ⅱは、経験論哲学が自然の因果法則を、そのまま社会体系に持ち込んだため（人間と自然の区別を措定しなかつたため）主体と客体との弁証法的関係をつかめず、人間の実践的（活動的）な主体性を反省することができなかつた自然法—契約論の限界性を、現代における法律と現実（具体的には日照権の問題）との矛盾に求め、生徒自身のとるべき姿勢について自由に叙述させた。その中で、人間存在の現実、前進する人間的活動の成果であり、人間の実践的活動（この場合、住民運動の例をとる生徒が多かつた。）の中で、客観世界をわがものとし変化させ変形させるその程度に応じて、客観世界は認識の客体となることをあきらかにさせた。従つて、人間の主体的な環境変革（自然のそれも含めて）のための実践の意義をどれだけ自己の思想としているかが評価の基準となつた。この点は紙数も尽き、契約論のテーマにも関係するので、簡略かつ論旨不鮮明になつてしまつたことをおことわりする次第である。

以上総じて、現在の私の評価の基準即ち私自身の授業への視点は、先に述べた「1. 授業への視点」に要約されるだろうし、それが私の目下の到達点でもある。

社会契約説

安田学園高等学校 香川 弘

㊦ とりあげた理由

生徒達に民主主義がどのように形成されたかについて考えさせることは、重要である。現代においても、民主主義の滲透が十分でないためにごたごたをおこす国もあれば、そのゆき過ぎや放逸のため社会にさまざまな混乱が発生するところもある。わが国の最近の経済混乱についても、そのような視点で考えることができよう。

考える教科である「倫社」で、人間の理性の根底にある自然法から、民主主義が社会契約説の中にどのように生まれたかについて、生徒によく理解させることは、将来にわたる民主主義の堅固な保持をめざすために大切なことであると信ずる。

㊦ とりあげた理由

(1) 「社会契約説」は社会的自由の確立、そして展開である。その基礎となつた考え方に、「自然法」ならびに「自然権」がある。

◎ 社会的自由(liberty)とは何か。

これは社会的・身分的拘束からの解放を意味する言葉からきている。中世を通じて多くの人びとには自由がなかつた。ルネサンス以後の人間性の回復はその意味でとらえられる。併しながら個人の欲望のままに行動して、いつさいの拘束から解放されたいとするならば、結局は他人を犠牲にするか、自分が他人の犠牲になるかという心配がある。そのために社会に合理的秩序がなくては、何人の自由保持とのバランスがとれなくなる。即ち、社会的自由の確立は社会と個人の両者から考えねばならない。

◎ 自然法そして自然権はどのように展開したか。

私達の日常会話のなかに、「自然にそうなった。」とか「不自然ななりゆき…。」などの用法がある。ここでいう自然とは、自然界の自然を意味していない。それは事物の本質・本性の意味と同じである。

自然法とは人間がその理性に照らして考えるとき、ごく自然に理解していける物ごとの道理である。このことは西洋のみならず東洋においても古来から考えられる普遍性をもつものである。即ち古代ギリシヤの自然哲学者やソフィストの自然も、古代中国の「天」という概念も人間の本性にかかわる原理として同一のものといえよう。

近代自然法は人間肯定の思想の高まりとともに、自然法を神から切り離してとらえている。つまり中世の神中心の考え方ではなく、人間の理性でとらえられる原理とした。そして自然法による人間の権利、たとえば、自己保存・自由・平等や勤労による財の所有などの権利を自然権として人間の根本的なものとして社会契約説とともに展開していった。

〔2〕「社会契約説」はどのように展開したか。

現代のデモクラシーの直接的要因となつた「社会契約説」は、次の思想家、即ち、グロチウス・ホッブス・ロック・ルソーらによつて展開された。以下、そのあらましをのべる。

- ◎ グロチウス(1538～1645) オランダの法律学者・国際法の父・近代自然法の父といわれる。自然法を人間の理性の法として考え、法に人間の理性に合致する社会秩序を求める。主著「戦争と平和の法」「海洋自由論」
- ◎ ホッブス(1588～1679) イギリスの哲学者。
 - かれによつて「社会契約説」が成立する。
 - その時代的背景 → 「ピューリタン革命」(1649年)の勃発。
 - その考え方 → 人間の本性は利己的…。自然状態は「万人の万人に対する戦い…。」また反面人間のもつ本性には平等に自己保存の欲求があるが、そのままでは人類は滅亡する。故に人の生命を守るため国

家をつくるが、国家成立の目的のために国家主権の絶対性が必要である。

- その影響 — 以上からホブスは絶対主義ととられるが、国家は個人のためであるという考えから、かれは近代国家観の原型をひらいたことになり、ロック・ルソーなどによつて民主的國家論が展開する。

主著「リヴァイヤサン」

◎ ロック (1632~1704) イギリスの哲学者・政治思想家

- かれによつて、「社会契約説」が展開し、民主的代議政体のもとが開かれる。
- その時代的背景 → 「名誉革命」(1688年)がおきる。
- その考え方 → 人間の本性は自然状態にあつても、理性が作用し、自然法により人びとは幸福。しかし自然法をいかに解釈するかは個人の考えに相違があり混乱が生じる。それを防ぐため国家をつくり、国民のために納得のいくよう自然権を守る。その國家のあり方は「多数決」・「代議制」をとり、国民から「信託」された権利による。そして代表者がこの権利を乱用して国民を圧迫する場合は、国民に「抵抗権」、即ち革命の権利がある。
- その影響 — 以上は名誉革命の理論的意義づけとなり、イギリス憲政発達に寄与する。なおアメリカ独立宣言・フランス人権宣言に影響

主著「人間悟性論」「統治論」

◎ ルソー (1712~1778) フランスの哲学者

- かれによつて、「社会契約説」がイギリスとは異なつて発展し、民主権主義のもとがひらかれる。
- その時代的背景 → 「フランス革命」以前の絶対主義体制
- その考え方 → 自然状態における人間、即ち自然人は自己保存という自己愛と仲間に対する同情心を持ち、恐怖心もなく自分の心のおもむくままに自由に生きていた。ところが現実に社会ができ文明が発達

すると、自然状態でのそのような人間性が失われ、制度の鎖につながれ不平等と悪が生じた。そこであるべき国家の政治の原理には、自分さえ利益を得ればよいという意志の総和、つまり「総体意志」ではなく国民全体の自由と平等の保護を目的とした公共の意志、即ち「一般意志」を政治の最高の原理にすべきである。

- その影響 — アメリカ合衆国の独立戦争やフランス革命などの政治的事件や哲学・文学・教育についても多大の影響を与えた。

□ 評価の方法

◎ 生徒の学習に対して評価するとは一体何か

教師の授業やその他の学習活動から、生徒がどれだけ理解しているか。考えようとしているか。さらに彼らがどれだけ学習活動に打ち込んだかという事実についても判定せねばならないという。前の二つはペーパーテストやレポートなどによる判定であり、後者は教室での学習態度とか、学習参加の出席状況などをさすようである。出席については客観性があるが、学習態度の判定は甚だ客観性をつかみにくい。たとえば教師の質問への解答も、質問そのものにも問題があつて評価の統一性が難しい。いきおい評価といえはペーパーテストやレポートによる判定が主なものにならざるを得ない。

生徒の学習活動について大切なことからは教師の学習指導のあり方であろう。よき学習指導とはどのようなものであろうか。生徒の興味を高めつつ、まとまりのある適正な内容を学習させる。特に倫社の場合は、学習内容が生徒の人間性形成に大きく影響するものであるから、そのことを考えに入れて指導せねばならない。内容について精選しつつ、かたよることなく教材が提供されなければならない。

テストの出題は教師にとつて頭をつかうところだが、次にいくつかの意見をのべよう。

- (1) 学習指導内容のうち、特に重要であると思われるところはつとめて

出題する。生徒の裏をかくという出題であつてはならない。

- (2) 学習した範囲から、つとめて平均的に出題する。
- (3) 出題は難易度を考えた問題が望ましい。
- (4) 断片的知識を求めたり、○×式などの出題はつとめてさける。
- (5) 生徒にできるだけ思考させる問題、とくに現代に生きている私達が直面していかなければならないことがらに関連づけるような出題を考える。(改訂倫社の指導要領で強調されていることは、「現代と人間」も「人生観・世寄観」も生徒達が現代にたつて思考するということではないかと思う。先哲の思想もその時代背景を考えて現代の視点でとらえることが肝要である。)

◎ 「社会契約説」を範囲とするテストの例(すべて記述式のものを考える。ただ、私の場合は二学期期末テストはテーマによる小論文記述としたため、これとは異なる。

○ テスト例作成のねらい。

- (1) それぞれの思想形成について時代背景の理解をつかむ。
- (2) 思想家たちの考えの特色の理解を問う。
- (3) かれらの及ぼした影響について理解をしらべる。
- (4) 現代の民主主義のあり方や社会の問題点に関連していかに考えているかをつかむ。

○ 出題例 (実際のテストでは生徒が記述しやすいようプリントする)

- 問1 ホブス・ロック・ルソーについて、それぞれの時代背景をかいたんたんにのべよ。
- 問2 上の三人の思想家のいう自然もしくは自然状態をのべよ。
- 問3 かれらの後世に及ぼした影響をのべよ。
- 問4 ロックの抵抗権の思想をのべよ。
- 問5 ロックは経験論の完成者だが、知識の形成をどう考えたか。
- 問6 ルソーに照らして、今日の公害や経済混乱をどう考えるべきか。
- 問7 ルソーの教育論は今日に生きている。その要点をのべよ。

人間関係と思想のテスト

都立大泉高校 沼田俊一

㊦ とりあげた理由

西洋近代の思想の中から何かテーマをもうけて、評価を中心とした授業研究をするというのが本年の課題であつたが、実際の授業は主題別な扱いに近く、たとえば2学期の中心課題は「人と人、および人と社会の関係はどうするべきなのか」ということであつたので、一人の思想家にしぼつて研究するわけにはいかなかつた。一人の思想家の思想内容を精選するのは、むずかしく、結局、市販の資料集が共通の欠点としてもつているように、網羅的でしかも説明不足という結果になりやすいが、観点を上部のようなテーマにしぼると、各思想家がその問題についてはどう答えたかに集約して考察していけばよいわけで、自然と内容が精選されてくるように思われる。授業でやつた内容に対しての評価しかできないので、第3分科会の他の方々と若干違つた内容になると思われるが、お許しねがいたい。

㊦ 指導の方法と観点

指導の方法については、生徒と共に倫社の授業をすすめていくことが、生徒に深く考えさせることになると思つているので、次のような試みをここ数年行つている。(1) 3分間スピーチ、出席簿の順番に5人おきに当てる。スピーチの前に、男女各1人ずつ、きいた感想を言つてもらうために、あらかじめ指名しておく。内容は何でもよいことになつている。発表の内容は実に多彩であり、きいていて楽しい。(2) 倫社ノート、3分間スピーチをやつた者は、倫社ノートを書いて、担任に翌朝出す。倫社ノートには、授業内容、授業の感想、近頃考えること、の3点を書くことになつている。普通の大学ノートに替かしているが、多い生徒は、数枚も書いてくる。読み終ると私の寸評を書いて、次の生徒に手渡す。倫社ノートは、3学期になると3冊

にもなり、クラス全員にとつても大変貴重なものになつてくる。3分間スピーチや倫社ノートの内容は時折、授業中も話題になり意見が交される。(3) 授業は講義と話し合いで進められる。一般的なパターンは、まず一つの文章(教科書でも資料でも)をよく理解させるために説明し解説する。要点を指摘したり、具体例をあげて詳説したりする。この時、評価することを予想して述べることもあり、そうでないこともある。説明が終つて残り時間に、生徒の感想や疑問を指名して言わせる。生徒の意見は板書し、それについて、他の生徒の意見を求めたり、私の考えを述べたりする。私の意見は、生徒は、時として「押しつけ」のように感じることもあるらしいが、あくまで、一つの考え方として述べているのだということを強調する。この場合、一つの考え方として、筋を通して明確に言つた方が、あいまいに言うよりも、生徒の自主性を高めるのに効果的である。先生に対立することによつて深く考えるようになる生徒もいるからである。そんな生徒は、たいてい、授業が終つてから、すぐ意見を言いにくたりする。反論が出た方が活気があつて楽しい。

評価の観点は、(1) 指導した内容をよく理解したか〔知識〕 (2) 授業を通して、テーマに即してよく深く考えたか〔技能〕 (3) 授業を通して学んだ内容を、自分なりに受止めて、深化しようとしているか〔態度〕の3点になるのではないかと思う。学期末のペーパーテストは(1)の〔知識〕をテストするのが主である。しかも、テスト用紙に表現されたものを評価するわけで、人物を評価しているわけではないことを強調する。〔技能〕も若干はテストできるが、ペーパーテストではむずかしい。先に述べた3分間スピーチや毎年2〜3回提出させる「エッセイ」や読書感想などで判断することになっている。〔態度〕も評価するのはむずかしい。学習意欲があるかないかは、出席状況やレポートの内容、授業中の発表内容などではわかるが、これは、長い間かかつて先入観を排除しながら考察してはじめて評価できるものと思う。

□ 評価の方法

2学期末の問題から例をとつて考えたい。先述のように、2学期の学習内容は主として「人間関係」であつた。そこで扱つたテーマと関連人物および事項を列挙すると次のようになる。

第1章 人と人との関係(ホッブズ, アリストテレス, 仏教, 儒教, キリスト教の考え方, プーバー, 三浦綾子の「光あるうちに」よりプリント「愛のさまざま」をつくり「利己的でない愛はあるか」で討議させる)

第2章 人と集団の関係(個人主義, 集団主義, アナーキズム, 法と道徳, 実定法主義と自然法主義, 連帯と奉仕, パウロ, テンニエス)

第3章 現代社会と人間(オートメーション, 中間層, 人間疎外など)

第4章 家庭生活と教育(離婚の是非, 妊娠中絶の是非, 学校教育の現状)

第5章 地域社会と職業(資本主義の社会, その成立と特徴, スミス, オーエン, マルクス, エンゲルス, 公害問題など)

第6章 民主主義(ペリクレス, プラトン, 登村ヘンリー, など)

各項目については討議を加えて、みだりに先を急ぐことはせず、十分理解させることに主眼をおいた。次に2学期末のテスト問題を示す。自分のノートと資料プリントだけ見てよく、時間は40分間。

□ ① 次の文を読んで下の問いに答えなさい。

このような状態においては①もつとも悪いことに、たえざる暴力と恐怖による死の危険とがあり、人々の生は孤独で、険悪で、貧しくて、残忍で、しかも短い。万人の万人に対する戦いにおいては何でも不正ではありえない。正と邪、正義と不義の観念はそこにはありえない。②人々を平和に向かわせる諸情念は死の恐怖であり、その勤勞によつて、それらをえようとする希望でもある。そして理性は平和についてつごうのよい諸条件を示唆し、人々はそれについて協定するように導かれるのである。これらの諸条項が自然の法則と呼ばれるものである。

①文中から連続した10字を選んでどんな状態かを示せ。②この考えと「

人間は平等である」という考えに矛盾するか、③誰の文章か、④本の題名は「ア」で、それにもともと「イ」に出てくる海の怪物のことであるが、彼はそれを(ウ)になぞらえて本の題名としたのである。

これは授業中生徒に示した資料のホブズのリヴァイアサンからの引用である。基礎的な知識現解を調査したものだが、あまりよい問題ではないと思う。その点次の問題は、この種のものでは比較的よいと思う。

③ 次の文章を読んで以下の問に答えなさい。

しかし、①当時すでに、②この生産様式は目にあまる社会的害悪をうみだしていた。すなわち③大都市のもつとも悪い居住地帯への浮浪人口の密集、慣習や家父長制的従属や家族など、すべての伝統的紐帯の解体、ことに婦人および④児童のおそるべき過度労働、ふいにまつたく新しい状態へ、農村から都市へ、農業から工業へ、安定した生活条件から日々変化する不安定な生活条件へ、投げこまれた労働者階級の大衆的な頹廃をうみ出した。そのとき⑤29才の一製造業者が改革者として登場したのである。(⑥エンゲルスの有名な著作より)

①この文章が書かれたのは(17世紀後半, 18世紀前半, 18世紀後半)

②どんな生産様式か ③なぜ浮浪人口がそのようなところに集まったか

④たとえば労働時間は1日どれ位であつたか。 ⑤誰のことか ⑥エンゲルスの著作にはどんなものがあるか。

これはエンゲルスの「空想より科学へ」の中のオーエンについて述べた箇所からの引用である。基礎的な知識の評価はこのような形式で確かめることができよう。まじめに授業を受けた生徒は、得点のとりやすい問題でもある。

しかし、考える問題となるとやはりむずかしい。

次は、生徒に配布して使用したプリントを見ながら答えさせた問題である。

▽ 「恋する」と「愛する」の違いについて、三浦綾子が「愛のさまざま」のプリントの中で述べていることをよく考え、結局、何が本当の愛であるかを指摘している一行を抜き出さない。

紙面の都合でプリント全文を引用できないのは残念だが、三浦氏は、この中で愛について、3ヶ所ほど定義めいた表現を述べているのだが、本当の愛は、自分の命を捨てるほどのきびしさをもつものだというところが正解に当たる。

このように配布したプリントを持参させ、再読させながら考えさせ判断させるのは、内容を深める上で効果的である。このテストではもう1問、やはりプリントを見て答える問題をつくつた。

8. ベリクレスの考えた民主政治とはどんなものであつたか。基本的なことと具体例を1つあげよ。

生徒に配布したプリントは、平凡社「心」48年9月号の「民主政治と哲人政治」（高山岩男）からの引用であり、民主主義の原典ともいふべき、ツキジデスの「ペロポネソス戦史」の中に収録されているベリクレスの葬礼演説とツキジデスのベリクレス人物評が、その内容である。

この中でベリクレスは「少数者の独占を排し、多数者の公平を守ること」を民主政治の基本的なこととしてまずあげ、それがアテネにおいて具体的にどのように展開しているかを述べている。授業中に一度読んだものであるが内容を思い出しながら、判断して答を選び出させるわけである。

なお、時々には応用問題としてマンガを考えさせることにしている。

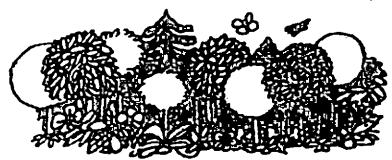
9. ①次のマンガの題を日本語でつけると□□□□

②左のマンガの看板を完成すると、□□□□，□□□□のため。

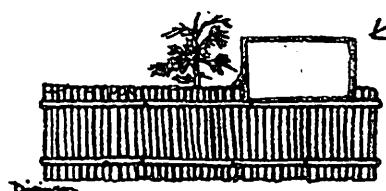
正解は①が官僚制度，②が立入禁止，自然保護なのであるが実に多種類の解答があり、人々の考え方や授業での受け取り方も多様であることが想像されて、評価がむずかしいのも当然なことながら、倫社を教えるというのは、本当にむずかしいものだと痛感した次第である。

9. 必ず解答らんに入ること。

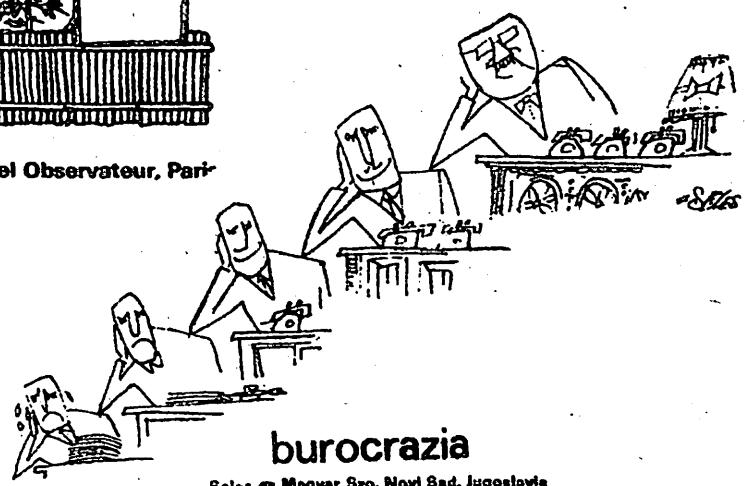
- ① 下のマンガの題を日本語でつけると□□□□
- ② 左のマンガの看板を完成せよ



□	□	□	□	
□	□	□	□	ww のため



(Le Nouvel Observateur, Paris)



burocrazia

Solas @ Magyar Szó, Novi Sad, Jugoslavia

ルソーの人間観・社会観

都立青山高等学校 小川 一郎

④ とりあげた理由

ルソーの著書『人間不平等起源論』の冒頭に「私が語らなければならないのは人間についてである」という文章がある。ルソーはいかなるときにも人間のあり方を問題とした。政治や社会を論ずるときでも例外ではなかつた。一般には、人間については自分のことなので解っている、ということかも知れないが、最もむずかしいのが人間についての理解である。人間は意外に身近なものほど解らないものである。ルソーは「人間のすべての知識のなかで、最も役に立つのに最も進んでいないのは、人間についての知識である」（『人間不平等起源論』）といっている。

ここでは、ルソーの人間についての考え方を基本にしてルソーの思想を取り上げて考察する。

⑤ 指導の方法と観点

1. ルソーの自然状態における人間について説明する。
2. ルソーの自然状態は歴史的事実としてのものでないことを説明する。
ルソーはなぜそのような自然状態を設定したのか明らかにする。
3. 自然状態における人間と社会状態における人間について、自由・平等の観点から説明する。
4. なぜ、社会状態において、人間は不自由や不平等になつたか、その経過について説明し、どのような人間の能力や性格が墮落をもたらしたか明らかにする。
5. 自然状態から社会状態への移行は歴史の必然であつたことを説明し、どのようにすれば、自然状態における自由や平等が守れるかについて、ルソーの説くところを説明する。

6. 一般意志と総体意志について説明する。
7. 人間は、自然状態にありうと社会状態にありうと自由・平等であることがその本来的なあり方で望ましいものであることを説明する。なお、自由・平等であることとは、人間は自己の命令に従い、自己の主人は自己である、ことを明らかにする。
8. 一般意志に従うことがなぜ自己に従うことであるか説明する。
9. 一般意志はどのように表現されるかについて説明する。
10. ルソーは、一般意志は誤らないとしたのは、どのような人間観によるか説明する。

WV

以上の順序と観点で授業をすすめる。その際できるだけ、ルソーの著書から資料を抜き出し、資料を読ませ、解説するという授業方法をとる。

つぎに、説明にあたり特に留意すべき点をあけておく。

ルソーの基本的な考え方としておさえておかなければならないことは、人間の生き方、道徳を問題とし、文化の発達が道徳的な墮落をもたらしたということである。かれの出世作というべき『学問・芸術論』の冒頭に「いつそう力強い学問、文学、芸術は、人々がつながれている鉄鎖の上に花飾りをひるげ、彼らがそのためにこそ生まれたと思われるあの根源的自由の感情を押し殺し、彼らにその奴隷状態を好ませ、彼らをもつて文明国民と称せられるものをつくりあげる」と述べている。なぜ奴隷状態や不平等が生ずるようになったか。人間の中にそのようなものが存するからである。すなわち欲望と能力のアンバランスが原因であると考える。社会状態に入り、他人との関係において欲望の対象を奪うようになる。競争心、羨望の念、虚栄心といった情念が生まれ、さらに支配欲や致富欲といったものまで生まれてくることになるとルソーは考えた。

また注意しなければならないのはルソーの自然状態は「もはや存在せず、おそらく存在したことがなく、多分これからも存在しそうなない」ということである。ルソーは歴史の歯車を逆にまわそうとしたのではないのである。

㊦ 評価の方法

1 評価について

テストをするたびに自分の授業について反省させられる。最初に考えさせられるのは、テストの問題をつくる時である。指導の観点をもつとはつきりさせて授業すればよかつたといつも思う。そこまでいつも考えて授業すればよいのだが、ついマンネリ化してしまう。研究授業などにおいてさえ、いつも指摘されるのは指導の目標がはつきりしていない点である。だからいくら考えても指導の目標について考え過ぎるということはない。

つぎにテスト終了後採点していて、どうして出来が悪いのだろうと思う。生徒は確かに授業を聞いていた筈だがと思う。自分の指導の至らなさを考えないで勝手に考えてしまう。採点も中ばを過ぎてようやく指導の観点の甘さに気がつく始末である。

評価はテストのときだけのものであつてはならない。だが現実にはこのことを忘れがちである。評価は指導内容・方法と常に一体のものとして考えられなければならない。評価なき指導内容は、実現の方法なき理念のようなものであろう。

私の評価問題は、客観テストと記述テストが半分半分である。客観テストは、テストの範囲全体の観点から出題する。例えば、「人生観・世界観」の分野ならば思想的な観点からの場合が多い。基本的な知識、それもテクニカル・タームといったものである。記述式テストの場合は、あまり大きな問題を出題することはない。特定の思想家や思想に限られる。だから2〜3問という数になる。記述テストでもつとも授業の効果が見られる。思考の過程まで解るし、何を基本におさえて論理を展開しているか明らかになる。ごまかしはきかない。授業そのものが問われることになる。

今年度の授業は、ルソーにのみ限定した問題は出題していない。これから実際に出題した実際例をはじめに紹介検討し、ついでこの小論のルソーの評価問題を考察することにする。

2. 評価問題例

(1) 本年の評価問題例

〔例1〕 記述式

カルヴィンの予定説を説明し、なぜ勤労を尊ぶ当時の市民階級に支持されたか説明せよ。

〔例2〕 記述式

ホブズ、ロック、ルソーの自然状態を比較し、それらはどのような人間観にもとづくものか説明せよ。

(所見) 以上の問題は本年度の2学期の期末テストに出題した記述式の100点満点中の60点分の問題である。

カルヴィンの予定説の出題のねらいは、ヨーロッパの近代思想の出発をなす思想としてどのように位置づけているかにある。中世の教会の権威の否定と資本主義の精神的推進力として把握しているかを評価しようとしたものであり、おおむね書けていた。

ホブズ、ロック、ルソーの問題は、自然状態については説明できているが、「どのような人間観に基いて」となると大多数の生徒には徹底しなかつた。

(2) ルソーの人間観・社会観の評価例

〔例1〕 記述式

ルソーの自然状態における人間について説明し、文明発達後の社会における人間をなぜ墮落と考え、なぜ墮落するにいたつたか、ルソーの人間観から説明せよ。

〔例2〕 ルソーは一般意志は誤またない。といつたが、ルソーのどのような人間観からいわれたものか説明せよ。

〔例3〕 社会状態においても自由が守られる社会をルソーは考えたが、ルソーのいう社会的自由とはどのようなものか説明せよ。

※授業過程における資料例、評価例のねらいなど紙面都合で割あいた。

カント

都立永山高校 井原茂幸

a 取り上げた理由

ルネサンスと宗教改革によつて火をつけられた近代思想の歩みを、さらに一歩進めたのは啓蒙運動であつた。人間理性の光によつて宗教・道徳・社会の問題を照らし出そうとするこの運動は、近代自然法と自然権思想を武器として、ヨーロッパ全土に市民社会を実現する土台をつくつた。この啓蒙運動を集大成し、深い哲学的思索に持込んで道徳の本質を基礎づけ、人格の尊厳の理念を確立したのが、カントである。このような観点に立つて市民社会の倫理を内心の深い道徳性から基礎づけたカントの思想を学ぶことは、近代現代の社会や思想の理解のみならず現代社会における生き方を考える上でも必要なことと思われる。

カントの思想を取扱うに当つては、道徳の本質・人格の尊厳を中心とする人格主義の立場から内容を精選し、3時間を充当することにした。第1時はカントの思想を中心として道徳の本質の問題を、第2時は道徳と自由の問題を、第3時は人格の尊厳性の問題を取上げ、それぞれの問題に対する理解を深めることをねらいとした。

授業形態はおもむね講義形式をとつたが、単なる思想の解説に終始せず、主題別取扱いをも加味して、生徒に問題意識をもたせ、自ら話し合いによつて考え方を深めさせるように意を用いた。

b 指導の方法と観点

指導のねらい

- 第1時 カントの考え方を中心に道徳の本質についての考え方を深める
- 第2時 カントの道徳と人間の自由の考え方を明らかにする
- 第3時 カントの考え方を中心に人格の尊厳性の根拠を考える

時間 配当	主題	指導内容	学習活動	評価の観点	準備資料
第一 時	一、 道徳の 本質	1. 行為の善悪の基準 動機説と結果説 カントの考え 方 2. 純粹意志の 道徳法則 道徳法則の普 遍性 定言命法と仮 言命法	○行為の善悪は 何によつて決 まるかについ て話し合う ○カントの生涯 これについて の考え方につ いて話しをき く ○カントの道徳 の原理(道徳 法則)につい ての説明をき く	○カントは無条 件に善だと思 われるものを 何と考えたか。 それはどうし てか ○カントは真の 道徳はなぜ定 言命法をとら ねばならない と考えたか	資料集 「善意志」 「道徳法則」
第二 時	二、 道徳と自由	1. 法と道徳 その相違点と 共通点 2. 道徳と自由 意志の自律と 道徳 カントの自由 の考え方 3. 道徳の主体 として的人格	○法と道徳はど のような相違 点や共通点をも つているか 話し合う ○自由について 討論する ○カントの意志 の自律=自由 についての話 をきく ○道徳的責任の 主体としての 人格の意味に ついて考える	○カントは真の 自由をどのよ うに考えたか ○道徳と自由は どのようなつ ながりをもつ ているか	道徳形而上 学原論 よりの抜粋 「自由の概 念と意志の 自律」 「自由と人 格」

<p style="text-align: center;">第 三 時</p>	<p style="text-align: center;">三、 人 格 の 尊 嚴</p>	<p>1. 人格の尊嚴性の根拠 人格の目的としての価値 道徳的主体としての人格</p> <p>2. カントの目的の王国の理念 人格の共同体としての理想 社会 カントの「恒久平和論」</p> <p>3. カントから学ぶもの。</p>	<p>○人格はなぜ尊嚴かについて話し合う</p> <p>○カントの目的の王国について講義をきく</p> <p>○カントの恒久平和の考え方をきく</p> <p>○カントの考え方について話し合う</p>	<p>○人格が尊嚴である根拠は何か</p> <p>○カントは理想社会をどのように考えていたか</p>	<p>資料集 「人格の尊嚴」 「目的の国」</p> <p>「恒久平和論」の抜粋</p>
--	---	---	---	--	---

c 評価の方法

私は評価の方法として(1)レポート、(2)発表、(3)授業態度、(4)ペーパーテストの方法をとり、それらを総合して評価することになっている。

(1)レポート 毎年夏休み前に読書課題を出し、2学期初めに提出させ、その内容を a. b. c 3段階に分けて評価する。課題の出し方については予め図書を指定してその中から選ばせたり、書名は参考程度に自由に選ばせたり、発表予定の主題に関するものを選ばせたり、毎日出し方を変えレポートの形式も少しづつ工夫して変えてやっている。

(2)発表 毎年誰でも一回は発表させる。現在は3人一組で予定した主題の中から希望によつて選ばせ調整する。発表前のレポートの検閲、発表者との打合わせを経て発表に移るが、研究意欲、理解度、発表態度などを総合して評価する。

(3)授業態度、授業への積極的参加態度、提出物、出欠の状態、熱意などによ

つて平常授業の評価を行なう。

(4)ペーパーテスト 単なる記憶テストはさけ、書かせる問題を必ず入れる。難かしいことであるが考えさせる問題、理解程度が見られる問題を出すよう工夫している。

<評価問題(ペーパーテスト)の例>.....カントの学習から

次のそれぞれの事項について、カントの考え方から見て正しいと思うものを { } の中から選び、それに関する設問に答えなさい。

1. 人間の行為の善悪は {イ. その行為の結果がよかつたか悪かつたか, ロ. その行為の動機が純粹であつたかどうか} によつて決まる。

その理由は何か ()

2. 道徳法則は {イ. 假言命法, ロ. 定言命法} という形をとらなければならない。

その理由はなぜか ()

3. 自由意志とは {イ. 道徳法則を自らに課し義務のために行為しようとする意志, ロ. 人間の本性に従つて他からの束縛を排除しようとする意志} である。

カントは人間の自由をどのように考えていたか ()

4. 人格が、尊厳であるのは {イ. 人間が他の動物より高い能力をもち、すぐれた文化をもっている。ロ. 人格は何の手段にもなり得ず、それ自身目的である} からである。

このことを別のことばで表わすと人格はどのようなものであるということになるか。()

5. カントの目的の王国とは {イ. 相互に人格を尊重し合う社会, ロ. 最大多数の最大幸福を実現した社会} である。

このような社会を実現するにはどんな個人でなければならないか ()

<結果評> { } の中は大体できていたが、書かせる問題が駄目、40点平均、女子は男子より10点余り低かつた。

マルクス主義

東京都立府中高等学校 永上 肆朗

a とりあげた理由

マルクスは生徒にとつても、最も関心のある思想家である。しかしそれは革命思想であることや、有名な『資本論』という書名を通じて知っているという皮相なものである。倫社では、そういう政経的立場よりも、むしろマルクスの思想の発想を基盤にすえてかゝる必要がある。しかし、展開の順序としてマルクス主義をヘーゲルを終つて思想史的課題としてとらえるより、むしろ現代的課題という側面から取り上げてみてはどうだろうか。

- 1 今日の日を戦後の高度成長もたらした公害というマイナス面から捉え、最近の石油ショックは日本経済に深刻な反省をもたらしつつある。
- 2 巨大社会におけるサラリーマンの生きがい喪失をどう考えるか、労働と人間の本来的なかゝわりを考えさせる。

これらの視点から社会主義思想学習の手がかりとする。

b 指導の方法と観点

本年度は一学期の前半をⅠ『現代と青年』として「現代社会の特色」と「青年の生き方」というテーマをやり、現代社会のかゝえている諸問題のとくに「人間疎外」を浮きぼりにすることにより後半からのⅡ『人生観・世界観』で最初にとりあげる「現代の思想」に結びつけてみた。「現代思想」の展開では生として実存主義とマルクス主義(9回実施)にしぼつた。

<マルクス主義学習のための設問>

- 1 マルクス主義は実存主義とともに現代社会における「人間疎外の克服」を思想的課題としている。しかしそのとらえ方、理由などには基本的に異つている点がある。この点を説明せよ。
- 2 マルクスがなぜ資本主義的な市民社会の解剖に生涯をかけたのか。そのいきさつや、かれの思想形成の過程(

若きマルクス)を調べ、彼が人間や社会や国家をどうとらえたかをのべよ。

3. マルクスの「人間疎外論」をよんで、マルクスがなぜ人間の本質を労働と見たのか考えよ。そこでいわれる「類的人間」でなにをいおうとしているのか。できればフォイエルバッハとも比較せよ。これらについてあなたの感想をのべよ。4. 『経済学批判』(序文)を段落に分けてよみ、唯物史観の考え方をまとめよ。5. 唯物史観のように世界や歴史が科学的にとらえられるものであろうか。また、このような思想についてどう思うか話し合おう(階級斗争や革命観)、6. 社会主義の考え方はマルクス主義だけではないことに注目しよう。その後どのように、マルクス主義は発展・変化したか。さまざまな社会主義の特色をまとめておく。

以上の六問を出して期間中の各自の予習、レジメの基準を示した。

<学習計画>…グループ原典講読(「空想より科学へ」または「共産党発言」)による班の発表によつて学習をすすめる。そのさい、8-4章のレジメをあらかじめ必ずプリントして問題提起する。班は5-6人、司会・進行迄たて教師を助言者としてすすめるグループ討議方式。

第1時 マルクスの生涯・背景……………導入

- 2 空想的社会主義・人間疎外論……………マルクス主義の原点
- 3, 4, 5 科学的社会主義・唯物弁証法→唯物史観と剰余価値
- 6 マルクス、レーニン主義ほか……………さまざまな社会主義

<評価の観点>

1. 現代の思想的課題である「人間性喪失」状況に現代思想がどのように対応しているか、実存主義と比較しながら、共通性と根本的なちがいがとらえられたか
2. マルクスの基本的な考え方が理解されたか。
3. マルクス主義の自由、平等な理想社会をめざす科学的社会主義の考えがマルクスによつてそもそもどのような過程で生まれてきたか、マルクスの人間観や労働観が理解されたか。

C 評価の方法

＜マルクス主義に関する評価問題＞（48.12.15実施）

I 次の文をもとにしながら下記の問題に答えよ

マルクスの思想的源泉は、Aドイツ古典哲学、イギリス古典経済学、フランス社会主義の三つといわれる。とくにBマルクスはヘーゲル左派に属し、フォイエルバッハの影響をうけてかれの思想的立場を確立していつた。やがて若きマルクスはジャーナリストとなつて活躍し、当時の腐敗した世相を暴き、そこにC資本主義に内在する矛盾や問題点を鋭く指摘した。この間におけるエンゲルスとの出会いはかれの思想形成を決定的なものにしていつた。このような背景の中で書かれたD『共産党宣言』はすぐれた政治的・歴史的文書となつた。後にエンゲルスは、これをもとに『空想より科学へ』でマルクス主義の考えを万人に平易に説いている。20世紀に入つてマルクス主義はさまざまな試練をうけながら、新しい時代に対応して、Eいろいろな社会主義思想に大きな影響を与えながら、今日に至つている。

A. それぞれに代表的人物を1人ずつあげよ

B. ヘーゲル哲学を学びフォイエルバッハの影響をうけたとはどういう考え（世界観）のことか。

C. 以下はこのころかゝれた『経哲草稿』の引用である。以下に答えよ。

1. 労働者の労働が彼の外に彼から独立して、疎遠に存在し、彼に対して一つの自立的な力となるということ。彼が対象に与えたところの生命が彼に対して敵対的に疎遠に立ち向う意味をもっている。
2. 労働の外化—労働が労働者にとつて、外的であること、すなわち労働が労働者の本質に属していないこと、そのため、かれは自分の労働において肯定されないで否定され、幸福と感ぜずにかえつて不幸と感じた。だから労働者は労働の外部においてはじめて自己のもとにあると感じ、そして労働のなかでは自己の外にあると感ずる。
3. 人間の類的存在、すなわち自然をも人間をも人間の精神的な類的能

力をもち、かれにとつて疎遠な本質とし、かれの個人的生命の手段としてしまう。

設問1 上の三つの文は「労働者の疎外」をのべたものである。これらについてあてはまるものをのべよ。

ア.ブルジョアからの疎外 イ.類的存在からの疎外 ウ.労働生産物からの疎外 エ.機械からの疎外 オ.生産活動からの疎外

設問2 上の三つの文はそれぞれ下のどの文を示しているのか、えらべ

ア.ブルジョア文明は人間と人間を結びつけていた前近代的な人間関係を引きさき、冷たい現金勘定がこれにかわつた。

イ.生産活動は社会的な働きであるのでみんなのものでなければならぬ。したがつてそれはブルジョアジーやプロレタリアートに公平に分配されなければならない。

ウ.かれら自身が生産した富は、かれらのものにならないで、彼らを使う資本家の私有物になつてしまう。

エ.生産したものが、自分のものにならないという感じからいやいや働くということ。

設問3 上の文からしてマルクスは本来労働をどうみたのか。マルクスの労働観をのべなさい。

設問4 現代にみられる、いわゆる「人間疎外」の状況には、ほかにどんなことがあげられるか、例を示しなさい。

D-1 『共産党宣言』または『空想から科学へ』の内容を三点にしぼつて要約せよ。

-2 次の文はマルクス主義に批判的な立場からのべられた論文である。これをよんで設問に答えよ。

「…エンゲルスがマルクス主義的社会主義を「科学的」と称したのは、マルクス主義が歴史は法則によつて必然的に展開していくものと考え、ここから資本主義から社会主義へ移つていくのは歴史的必然であるとい

う結論を導いたからである。(中略) しかし、こういう考えがほんとうに「科学的」なものでしょうか。(後略) (「正しく考えるためにP71」)

設問 これはマルクスの何についての批判であるか。筆者はこれを通して何を言おうとしているのか。要約して下さい。

E 次のうちBernsteinのものはどれか

1. かれは『矛盾論』の中で、いろいろな矛盾を区別して異つた矛盾は異つた方法によつてのみ解決される、と説いた。
2. 帝国主義時代においては世界革命によらなくとも、一国だけでも社会主義は可能。
3. 階級よりも国家・自治体を実現し、生産手段の公有によつて欠陥を克服、漸進的な社会正義の実現によつて社会主義が可能。
4. 労働者階級の窮乏化による資本主義崩壊の必然性を否定、労働者階級の倫理的的努力によつて社会主義の実現を説いた。

<分析と反省>

このペーパーは配点56点で抽出2クラスAクラス(男37点,女39点), Bクラス(男35点,女36点)とまりであつた。とくに正の低いのはAのうちイギリス古典経済学であつた。これはとくにふれる余裕がなかつたことにもよる。マルクスの思想形成をヘーゲル思想(弁証法)とのかゝわりでじっくりとりあげなかつたことにもよろう。とくに「唯物弁証法」的世界組などの説明不足が目立つたと思う。『現代と人間』からいきなり「現代の思想」に入るためには相当に思考の訓練が準備されていなければ困難であることを改めて認識させられた。比較的誤答が多いのはCの設3の記述式問題であつた。論旨に不明確なものが目立つた。これは現代の疎外論がマルクスの立場に立つものと、大衆社会における個人の疎外をテーマにする実存主義の立場との明確な位置づけや説明が依然として不充分であつたことにもよる。その点Cの設4ではきわめて多様な現代社会の疎外のユニークな解答がえられた。「マルクス主義はむづかしい、もつと勉強せねば」というのが生徒の反応であつた。

キルケゴールの愛の弁証法

都立桜町高等学校 佐藤 勲

Ⅲ とりあげた理由

実存主義の成立が、現代の社会機構にあっては、私たちは各々自分の主体性を失いつつあるという歴史的状況を前提にしている。キルケゴールやニーチェは、水平化され平均化された社会のうちへと組み入れることの出来ない「例外者」(アウトサイダー)としての主体的内面性を徹底化しようとしたのである。実存するのは人間のみであり、具体的個別性において単独者としての人間(実存)をとらえようとしたのがキルケゴールである。⁴⁴

このキルケゴールを祖とする実存主義が現代社会において生まれ育つた歴史的状況、つまり人間の危機に対して、私たちはどう考へ行動すべきなのかという観点からとりあげるのである。

Ⅳ 指導の方法と観点

現代社会における人間の危機は、人間性をないがしろにする「公害」などに象徴される。その公害は、自分の利益を優先的に追求して他人をかえりみないというエゴイズムのあらわれである。この人間の危機を乗り越え、人間性の回復をめざす実存主義の祖であるキルケゴールは、人間の愛におけるエゴイズムと絶えず対決しながら生きていたのである。

キルケゴールが、レギーネ・オルセンという女性との婚約を破棄したという、彼の生涯における決定的な事件を体験している。

何故に破約したかという理由は、色々に解釈されているが、その根本理由は、霊と肉との葛藤であり、霊の肉に対するたえざる圧迫と、その圧迫に対する肉の反抗、この両者の緊張関係にあったと考えられる。愛における霊肉の矛盾葛藤を宥和あるものとしての神の愛というキリスト教精神にあったと考えられる。

キリスト者として愛し合うためには、何よりも神において、神を介して愛することが必要であった。ところが神を信じないとすれば真に愛することにはならない、真に愛することなくして結婚する——これはキルケゴールにはできないことであった。

キルケゴールにおける愛の弁証法とは、宗教的愛が美的愛と倫理的愛とを二つの契機とする弁証法的なものを意味している。飯島宗享（いじまむねたか）氏の「キルケゴール」（講座現代の哲学Ⅰ実存主義、有斐閣、昭和40年）の愛の弁証法をプリント（教材）にして生徒に読ませながら講義を展開することに例年やっている。

(1) 美的愛……恋愛に代表されるように、恋人を他人から切り離して偏愛する。自己にとって特に選ばれ、自己に関係づけられた恋人は、実は「もう1人の私」であり、恋人に対する愛は自分だけを受愛するが、「もう1人の私」すなわち自分自身を受愛しているところの自己愛に他ならない。

美的愛とは、官能的、情熱的で、第三者を排除する自己愛である故に、相手側の愛が不確かな場合には常に嫉妬の危険にさらされ、また自分を裏切った恋人に対しては憎悪へと一転する危険性をはらんでいる。このような危険が偏愛を常に不安たらしめる。その不安を必然的ならしめているのは、官能的なものが人間を支配する場合に無視し抑えつけた（無意識にもせよ）ところの、人間のもう1つの契機、すなわち良心が偏愛の利己的自己を否定するのである。したがって良心のめざめと共に美的愛には倫理的愛が対立者として生じる。

ここに具体例としてどうしても夏目漱石の「心」を話に出さなくてはなるまい。「心」の先生は、私にあてた遺書で、過去に犯した自分の罪を述べる。友人Kが下宿の娘さんを好きだと先生に告白する。先生はKを精神的に打ちのめして、更に出し抜いて下宿の娘さんとの婚約をかちとる。そしてKを自殺に追いやってしまったのである。ふだんは親切でやさしい暖い人間（先生）が、いざという間際（まぎわ）に急に悪人にかわる恐ろしさよ。先生の言う

「恋は罪悪」とは、美的愛の偏愛性という罪、醜さ、エゴイズムを意味しているのである。2学期の初め(9月)にこの話をする、現代国語で一度接したことのある生徒の顔が一言に輝き出すのである。

もう一つの例として、三浦綾子の「氷点」の話もすることになっている。
(2) 倫理的愛

美的愛が自然的にあるがままの自己がもつ愛であるのに対し、そういう愛の反省からあるべき自己をめざして自己が自己に良心的に課する愛がキルケゴールの意味の倫理的愛なのである。したがって、美的愛に潜在する危機、矛盾を主体的自己が人格的に反省し自覚するときに倫理的愛がその地盤を獲得するのである。

倫理的愛の内容は、誰一人除外されてはならない人間一般への自己犠牲的献身であり、美的愛の偏愛性を徹底的に否定した、へだてのない無償の愛なのである。

美的愛は自然発生的、生得的であるのに対し、倫理的愛は良心(理性)の命ずる愛であり、良心(理性)がそれを人格に課するのだが、その命令を聞き入れ、それを課題として人格的に受け入れるか否かに関しては人間は自由である。命令、課題として指示されたものを自分の責務として受けとめ行為することを意志する根拠は、何らかの意味での宗教性であるといえよう。

したがって単に倫理的愛というよりは倫理的・宗教的愛といった方が妥当であろう。

(3) 宗教的愛

上述のような倫理的愛を責務として引き受ける決断をなすものが人間の理性にもとづく宗教性ならばそれは宗教性Aであり、逆にそれを責務として与えるものが人間の理性でなくて神であるが故に神信仰にもとづいて絶対的、無条件的、没理性的にこの倫理的愛を義務として引き受けるべきだという形で人間に決断せしめる宗教性が宗教性Bであると、キルケゴールは宗教性を二つに分類している。

キルケゴールが後者の宗教性Bを求めたのは何故なのか。ここにキルケゴールの人間観がかかわってくるように思われる。

人間の理性は、倫理的愛という高い理想性を自分自身に要求することができる。しかし、人間はその要求を事実に満足させることができるだろうか。現実においてそれを実践しおこなうことができるほど人間は偉大で、そして強いだろうか。何人もこれを肯定する勇氣は、厚顔さを持っているだろうか。人間は弱いのである。高い理想の前で人間は絶望せざるをえない。にもかかわらず人間である自分が自分を主人とすること（宗教性A）が、罪なのであり、その反対に神を自分の主人とするの（宗教性B）が信仰であると。

倫理的愛を完全に実践しえない人間の弱さの中で、しかもなおそれが神に負う義務であることの重さと厳肅さを見失うことなしに、おぼつかない足どりながらその義務の道に自分の足をおき続けるならば、それが信仰者の現実であり、そのような信仰者には神の和解がすでに与えられているのである。

すなわちキリストに追随することでキリストの贖罪にあずかることによつて。

以上の(3)の宗教的愛の説明は、いつも苦勞する所で、倫社での教材化の限界を越えているように思われる。したがって私は、美的愛に潜在している利己的偏愛性という矛盾を克服して、私達はお互いに人格的に対等に愛し合うことを目ざす倫理的愛という理想的な愛を生徒に印象深く理解させ、また私達の実践すべき課題であり、ヒューマニズムへの道なのであることを常に訴えることにしている。

④ 評価の方法

以上のキルケゴールの愛の弁証法を6ページのプリントにして生徒に読ませながら、説明し、質問し、感想を聞いたりして授業を展開している。大体1カ月半ぐらいかかるが、この期間が2学期の倫社のクライマックスになるので、期末考査も、キルケゴールの理想がどれだけ理解されたかを評価することに最大の力点をおいている。

理解の深さ、正確さ、論理的思考力などを計るためには、生徒に文章で答えさせるのが最良の方法であるようである。ただし、文章を評価する際には採点の基準、その種類と数、段階や客観性などを設けることのむずかしさを痛感する。又、410人の答案の文章を3日か4日間で採点することの忙しさ・読む苦痛や客観性と一貫性を守り抜くことの疲労感は毎年の悩みである。これは倫社の教師の共通の悩みなのであろうか。次に48年度の問題を3つほど示すことにする。

(a) キルケゴールの愛の弁証法における「美的愛」の根本的な特徴とその問題点(矛盾)を述べなさい。

(b) 「倫理的愛」とはどういう愛か。美的愛と対比させながら述べなさい。

(c) 次の文を読んで問いに答えなさい。

人格に反省をなさしめ倫理的愛を課題としてあたえる契機は何であろうか。倫理的には、それは良心(あるいは理性)と呼ばれる。そして倫理のカテゴリーにとどまるかぎり良心(あるいは理性——実践理性)より以上の規定は生じえない。その良心(あるいは理性)に人間を依拠させ、人格を良心的(あるいは理性的)に行動させるエネルギー源を問うことは、おのずから、宗教的段階に足を踏み入れることになる。

(問) ここでいわれている宗教性とはどういう意味なのか。またキルケゴールが分類した宗教性Aまたは宗教性Bのどちらに上文の宗教性はあたるのか。

以上の3つの間に対する生徒の解答文を採点して感じたことを述べてみる。

(a)の「美的愛」は、具体例として恋愛があげられる。恋愛は、青年期中期にあたる高校生にとっては、非常に関心があるせいも、ほとんどの生徒は解答をしていた。美的愛の根本的な特徴はほぼ理解していたが、その矛盾点については、約半数の生徒ははっきりと理解していないようであった。授業では、私は具体例の1つとして母性愛における矛盾(エゴイズム)をあげながらかなり強調したつもりであるが、特に男生徒にはあまりピンとこないようであった。かなりの生徒が、その矛盾を漠然とは理解できるようだが、あまり興

感出来ない原因あるいは理由は、恋愛の自然性をそのまま「よし」と肯定してしまい傾向がかなり強いということにあるように私には推測される。また生徒の解答文は、私が黒板に書いて説明した字句の単なる羅列にしかすぎないのが多いのは毎年の傾向であって、年々それが強くなってきているようである。例えば、「美的愛とは偏愛であり自己愛であり……」という具合なのである。こういう書き方は、説明文ではないのである。つまり偏愛とはどういう愛なのか、その説明をしていない生徒が非常に多かったのである。生徒に文章で解答させて見ると、生徒の理解度、思考力、文章表現力の浅さ深さや長所短所などが極めてはっきりとわかり、今後の授業の展開に数々のヒント、方向づけが生じてくるのである。

(6)について解答する際のポイントは、美的愛の矛盾の中から倫理的愛が弁証法的に発展するように文章を書くことである。多くの生徒は、いきなり「倫理的愛とは」と書き出して、問題に書いてある「美的愛と対比させながら」のように展開して書いていないのである。ただ問題文に「弁証法的に」を入れてなかったので生徒はそこまでは気が付かなかったのか、ただ羅列的にしか理解していなかったのか、どちらかであろう。

(9)の問題は、私の主観性がかなり強いと思うが、思考力を評価する意味で重要であろう。ただし、この問題文は、授業で読んだプリントの文なので、授業中に私は「ここでの宗教性とはどういう意味なのか」という質問を5、6人の生徒にして解答ずみなのである。その解答とは、ここでの宗教性とはイコール良心であるから、良心とは極めて内面的で精神的であり、倫理的愛を自己に命ずるという「良心の叫び」となるもはや宗教的段階なのであって、ここでの宗教性とは内面的で精神的という意味であるということである。このように授業中に答えた生徒は、8クラス中2クラスの女生徒各々1名ずつであった。答えのないクラスが多かったとはいえ、上のような解答を私が述べた際かなりの生徒はうなづいていたように見えた。

ところが、生徒の解答文には、上のような解答をしたのは410人中2、

3人しかいなかったのである。私の1人相撲の感が深いのである。むしろ私の意に反して別の解答が多かった。すなわち、宗教性即キリスト教ととっているのである。この解答でも全く間違いとは言えないだろうが、しかしあまりにも短絡すぎる気がする。生徒は、じっくりと深く考える習慣と力を本当にもっていないように思える。勿論私の説明のまずさ、不十分さ、その他にも大きな原因があることを割引いてのことではある。

倫社を担当して6、7年になる私は、講義式の授業をここ4年ほど毎年やってみて感ずることは、倫社の目標が、深くじっくりと「人間とは何か」を考えぬことにある以上、講義式の方が生徒のグループ研究発表よりもその目標達成には最適のようである。講義式の最大の長所は、1人の思想家にかなりの時間を使って深く生々(なまなま)しくその思想内容や人間(物)像に迫れることである。

わずか1時間の授業で1人の思想家の思想を吸収しようということはその思想からその生命を奪ってしまう危険性が多分にある。

現代に生きる私たちは、いかなる古い思想家といえども、その思想内容を生々ととらえることによってはじめて主体性を発揮できるのである。

倫理・社会における評価の問題

都立千歳高等学校 中村新吉

倫理・社会の評価がなぜ問題となるか

教科や学校の成績会議上でよく話題になったり、倫社を担当する教師として、この生徒にこんな評定をしてよいかどうか困惑することがある。たとえば、遅刻や欠席がめだち、喫煙事件をおこしたような生徒が大変よい成績をもらったり、反対に、無遅刻無欠席でまじめそのものの模範生がわるい成績だったら、ということがある。あの生徒がペーパーテストで80点とったけれども4の評価をやってよいのかなあと考えこんだり、あのまじめな生徒が30点しかとれなかったけれども、2の評定じゃ気の毒だなあと思ったりする。クラス担任から「この生徒はちょっと問題のある子ですが、倫社4で間違いないですね」と念を押されたり、成績会議上で進級させるかどうか問題になると、時に、「倫社はわりについていいですから、案外、いいところがあるんですね」と、倫社の評定が注目されたりする。

また、評定を出すための試験やレポートの問題内容や問題形式をどうしたらよいかで困惑させられる。レポートを提出させる方法で評価するとよい成績をとるが、ペーパーテストによる客観的な方法だとふるわなかったり、論述式テストでも、たとえば「～の説いた自由を説明せよ」というとよい成績をとるが、「あなたの自由についての考え方を述べよ」となるとめっちゃくちゃだったりで、問題内容や問題形式で随分と、それぞれの生徒の成績がかわってくるのである。しかも年5回位の定期考査となれば、おのずから評価にも限界が生じてきたり、レポートを課して400人からのものを読んで評価すると、客観性に悩まされたりで、なかなか意欲的に行っても今一歩すっきりとしたものに達しがたいのである。倫社の評価でいつもこうした気持ちになるも、やはり科目の目標や性格による面からきているからであろうか。

科目の目標というのは、その科目を学習させることによって達成すべき諸

点を示すものであるから、目標がまた評価の諸観点を示していることにもなる。そこで、科目の目標に従って評価の観点をみると、次のようになる。

- (1)・人間尊重の精神が養われたか
 - ・倫理的価値に関する理解力や判断力が養われたか
 - ・自主的な人格の形成に努める態度が養われたか。
- (2)・現代社会について客観的な認識ができたか
 - ・青年期における自己形成の課題が自覚されたか
- (3)・人間や社会に対する先哲の基本的な考え方が理解されたか
 - ・行為の倫理的価値や基準について判断できる能力がつけられたか
- (4)・常に自己の考え方や行為を反省し批判している自主的態度やそれに必要な能力が養われたか
 - ・倫理的実践を高めようとする自覚的な態度とそれに必要な能力が養われたか

このうち、(2)と(3)の目標からの評価の観点が、学習内容の「現代と人間」「人生観・世界観」に直接かかわるものであり、(1)と(4)の観点は総合的な評価の観点とみてよからう。倫社の評価を出す時に、われわれが最も苦悩し思案投首するが、(2)と(3)よりも、(1)の、たとえば「自主的な人格形成の態度がどれだけできたか」とか、(4)の「自己反省・自己批判の自主的態度や能力がどれだけできたか」「倫理的実践を高めようとする自覚的な態度や能力がどれだけ養われたか」を評価できるのか、また評価しなければならないのか、評価できるとすればどのような方法があるのかということである。なぜわれわれ倫社担当教師がこのことに苦悩し思案投首するのかというと、この(1)(4)の目標がある以上、倫社の教師は単に知的理解や思考力をはかるだけではなく、自主的態度や倫理的実践あるいは自覚的な態度を養うような学習内容を与えなければならないし、倫社を実践的な領域まで担う科目としてとらえる必要があることになるからである。いうまでもなく、倫理が実践にかかわるものであることは否定できない。しかし倫理的実践のあり方を知的に理解させ、その観点から評価するということと、倫理的実践への自覚的な態度を養い、どれ

だけ養われたかの観点から評価するというとは区別されて考えられなくてはならない。ところが実際には、截然としがたいところもあるところに、倫社の評価のしかたのむずかしさがある。こじつけみたいになるが、「倫社の実践への自覚的態度」は、実際には、倫社の授業だけでなく、クラブ活動や生徒会活動あるいはその他の学校教育活動のすべての領域で形成されており、倫社の学習指導でどれだけ形成されたかは評価しがたいのである。また、「～の説いた自由について述べよ」という問題は評価の基準があるが、「あなたの自由についての考え方を述べよ」となると客観的な評価の基準が見出しがたいのである。このように倫社の評価の諸問題は、科目の目標や性格をどう考えるかによって生じており、実践的な側面の評価をどうするか、主観的な側面の評価をどうするかといったところから、評価のむずかしさが生まれているといつてよからう。

倫理・社会のかかえている評価の諸問題にどう取り組むべきか

先に述べたように、倫社の評価はさまざまな問題をかかえており、しかも倫社を単に知的理解をはかる科目や暗記力をみる科目にしたくないという倫社教師の真摯な態度と意欲から、評価のむずかしさが問題とされるのである。およそ倫社を単に暗記科目として教える教師は、考査問題も客観テストに徹して養わない。したがってまた、年5回程の定期的試験でもって、ソロバンで得点合計をはじき出し、度数分布によってきわめて機械的に評定がつけられていくことになる。しかしそれは、倫社に期待されているプラスアルファというかエトバスが切り捨てられてしまう。それが切り捨てられてはならないし、それが評価のなかでなんらかのウエイトをもって位置づけられてはじめて倫社を学習させる意義がある、と考えるのが至当であろう。

そこで、倫社の評価のあり方の二、三の点にふれてみると、まず、生徒ひとりひとりの理解力・思考力・意欲・自覚など多様な側面を、さまざまな方法と形成をくふうしてひき出すとともに伸ばしていくようにしたい。いわば多面的な機動的な評価方法をとることであり、学習指導の一環として常に実

施することである。それによって指導方法の改善がはかられるとともに、生徒ひとりひとりの興味・関心の方向が理解され、能力や適性に応じた指導を生み出すことができるからである。具体的には、(1) 読書課題を与えてレポートを提出させる (2) ある思想・章・節を学習させた後で「倫社学習カード」(ワラ半紙半分位)を書かせ、興味や関心をもった点・自覚した点・授業への姿勢・学習内容の把握度などをみる (3) ある一冊の本・新聞記事・自分の体験などについて発表させる (4) 自由題で、自由に30分位授業時に書かせる、などがあげられる。こうした評価方法は先にあげた特長をもっているが、それを評定値にするには、生徒の感情や主体性あるいは主観を教師が判定することになるから、慎重な態度が要求される。がともかく、倫社をとおして先生と生徒ひとりひとりが結びつき、総合的認識にもとづく多面的評価が見い出されることは確かである。

第2に、指導内容に応じた評価のしかたのくふうがあげられる。現代と人間も、人生観・世界観も同じような形式や深度で評価問題を作成するというしかたは避けたい。このことは内容の精選や「ものの考え方の基本的問題」と深いかわりを示している。具体的には (1) たとえば、キリスト教的愛・仏教の慈悲・実存主義の基本的考え方・自由と責任といった内容は、どれだけ深い哲学的認識に立って、論理的に筋道たてて理解しているかをみるようにする (2) しかし、周辺思想として軽く扱ったところは基本的事項の把握をみる、というように評価問題に深度の差をつける必要がある。特に定期考査の場合、基本的事項の把握・基本的内容の理解度、「ものの考え方の基本的問題」についての思考による表現力や価値判断力の度合いなどを評価できるように、さまざまな組合わせが必要となる。われわれはとかく客観的な評定値を出しにくいことを先に考えて、客観テストに終始しがちになるが、評価をもう一度指導過程や授業展開と結びつけて考えたいものである。

第4分科会<日本の思想> 研究経過報告

勝田・池上 記

我々の分科会は、本年度、会員が少ないことや、会員諸氏が多忙なこともあって、余り活発な活動を行なうことができなかった。

〔第1回目の会合〕 10月2日(月)本所高校で行なわれ、研究部長の永上先生にもおいでいただいたが、参加者は二名にとどまった。この日は、研究テーマに関する不明点についての話し合いがおこなわれた。

〔第2回目の会合〕 11月1日(木)本所高校で行なわれた。この日は、メンバーの集りも良く、5名が出席し、意見交換した。「評価」をめぐっての疑問点に関して、話し合いをしたが、完全な共通理解に、達することができなかった。しかし、ともかく、研究範囲を下記のように決め、重複にこだわることなく、各自、分担・執筆することにした。

1. 古代日本人の心
2. 仏教思想と日本
3. 中国思想と日本
4. 国学の思想
5. キリスト教思想と日本
6. 西洋思想と日本
7. 日本人の思考様式

〔第3回目の会合〕 11月27日(火)本所高校において、各自の研究割当項目・枚数の再確認、ならびに、次の研究例会についての打合せを行なう予定であったが、結局、集まりが悪く流会になってしまった。しかし、以上の二点について、その後、電話等で連絡をとり、研究例会については、公開授業を国分寺高校の菊地堯先生、研究発表を本所高校の勝田泰次先生、また講演を今井淳先生にお願いすることになった。

最後に、世話人の力不足の為、活発な分科会活動ができなかったことをおわびするとともに、現在の分科会活動がいきずまっていると思われるので、分科会のあり方、持ち方等を再検討されんことを望みたいと思う。

日本人の思考様式について

都立江戸川高校学校 佐藤哲男

① <とりあげた理由>

昭和30年半ばの高度成長から昨年秋よりの石油ショック以来、われわれ日本人は国際社会により深くかかわるようになり、今後それは益々度を深めて行くものと思われる。そこで問題となるのは、世界における日本人、その国際的教養、貧弱なマナーである。とくに欧米に対する卑屈さとアジアにおけるごう慢さは頂けない。ある刺激に対する反応のし方には各民族それぞれ異なったニュアンスを示す、が日本人はとくに集団的で共通した独特の反応を示す。その根底に独自の思考様式があるようだ。そこには長短いずれあるにせよ、今後、国際的広場に立つ日本人に大きな課題が要請されよう。

さて、学習指導要領に示される「日本の思想」の取扱いは次の二通りである。一つは思想的に、長い伝統を背負った日本の思想の理解である。今一つは主題的に扱いたいもので、現在の思想的状況の把握のなかから今後われわれ日本人の思想的課題を考えさせることである。……「日本人の思考様式」というテーマは当然二番目にあたる。

生徒は、われわれ教師以上に今後ますます広く国際社会に入って行く、この学習を契機に、日本人のあり方を広く人類社会的視野から見て自己批判の資とし、さらに思想的課題に取り組ませたい。

② <指導の観点と方法>

Ⅰ 授業計画の中での位置づけ……一般的に授業の流れに合うのは、日本の思想のところで「日本の思想的課題」という節を設ける。しかし場合によっては現代と思想のところにその節を設けてもよい。そこで課題として浮かんで来るものに次のものが考えられる、すなわち、戦後民主主義の問題、公害や人間疎外、差別、および今後迫られる国際協調と日本人の閉鎖性などで

あろう。その課題を考えるに前提として、今まで学んだ日本の思想のまとめが思想的状況の把握の中に入って来る。さらに関連するものとして「現代と人間」の分野における文化の類型、民族性が考えられよう。それらをこの「日本人の思考様式」というテーマに活用したい。

ロ 学習の準備と資料……このテーマの学習は大体3学期になるであろう、そこで短かいが2週間の冬休みを有効に使いたい。あらかじめ編成された4～5人のグループの生徒にこのテーマの研究発表の準備をやらせる。このテーマに対する解答、日本人の思考様式とはかくかくのものである、というものは教科書などで定義づけられているものではない。が例えば普通に使われる「汚い野郎だ」という言葉、その意識の原型は、古代日本人の「ツミ、ケガレ」のところに求められる。また最近多く書かれている、日本人論や日本思想もの、それらを広く資料として活用したい。その生徒に読ませる参考書として一般的に次のものがあげられる、丸山真男「日本の思想」Rベネディクト「菊と刀」和辻哲郎「風土」中根千枝「タテ社会の人間関係」、ベンダサン「日本人とユダヤ人」、会田雄次「日本人の意識構造」、その他、宮城音弥のもの、上山春平のものがある。これら全部読みこなすことが大変だったらある範囲を教師が指示するものよい。また、高校生好みの作品の中でこのテーマに即して生徒が感銘受けたものも資料として活用したい。

ハ 導入と展開……抽象的な思考にいきなり引っ張りこむより、具体的に興味ある身近かなものから導入して行きたい。その際、外人との交際で何かくい違いを経験したという生徒がいれば非常に便利であろう。導入の例として日常生活における日本人と欧米人との違い、フスマとドア、のこぎりの使用が逆であることなどもあげられる。また、ウエットな日本人の国民性をあらわす次の例がある。ここに2人の管理職がいる、1人は人情派で部下の面倒を私的にも見てくれるが多分に暴君的で筋を曲げることがある。1人は公私をきちんとし理路整然と筋の通ったことをやる、が私的な面では部下に冷淡である。……社員たちはどちらの管理職を選ぶか。日本人の場合、約80

多の部下が前者を選び、欧米人はほぼこれと逆である。その根底に永年培か
われた意識、感情がありそれが思考様式のワク組みをなす。

さて、以上の資料を使用して生徒の研究発表という形で授業が展開されると
すれば、「日本人の思考様式」として次のようなものを取り上げられて展開
されることが予想される。一つは少し古いがベネディクトの「恥の文化と罪
の文化」である、その際この説をう呑みにするのではなく三島由紀夫や会田雄
次の反論も加えたい。二つには和辻の「風土」より「うちとそと」の関係が
あげられよう、生徒の生活経験からも、距てなき間柄、という概念が障子や
ふすまの生活から共感が得られよう。三つにはそれと関連して「タテマエと
ホンネ」があげられる、これは義理と人情ともからませて行きたい。四つ目
には中根千枝のいう「タテ社会」である、これは生徒の父兄の人間関係から
も理解されよう。五つには最近とくに強調される「閉鎖性」、島国根性があ
る、ここに使われる資料は体験など生々しいものがほしい。

以上の五つの項目のほかに色々な視点からさまざまな点が指摘されよう、例
えば直観的で結論は早くて確実にとらえるが論理性に乏しい、また集団的に行
動し容易にヒステリー状態に陥りやすい、などと。……がいずれにせよこ
の「思考様式」のワクで満足することなく、それを日本人の自己反省の資と
し、次のテーマの「思想的課題」に取り組ませて行きたい。

㉑ <評価の方法>

評価には、指導要録を媒介として対外的に客観的資料である、という相対評
価の面と、学習の目標に対する到達度を見る診断、分析的な絶対評価の二つ
の面がある。倫社の場合、その科目の独自性から考えて後者の面に重点をお
きたい。また、評価の方法には評価者と被評価者との関係で次の三つの評価
が考えられる。すなわち、① 自己評価 ② 相互評価 ③ 他者（教師）
評価である、一般に行なわれているのは③ 他者評価である。このテーマ、
「日本人の思考様式」はグループの研究発表と質疑応答という学習形式をと
るので② 相互評価を中心にし、それに① 自己評価を加え、まとめを教師

による⑨ 他者評価としたい。

その具体的方法についてふれると、あらかじめ配布した評価用紙に、発表したグループの生徒の自己評価、および発表を聞き質疑応答に参加した他の生徒の相互評価を記入させる。その評価用紙はワラ半紙の半分の大きさ位とし、そこに盛りこまれた評価項目は次のようなものである。その例をあげると、

① 発表資料のプリントについて、何をいおうとしているか明確であったか、発表文の構造は論理的であったか、談字、脱字はどうだったか、などである。

② 発表について、よく聞き取れたか、発表の態度はまじめであったか、興味をもってテーマに引きつけられたか、のびのびやっていたか。③ 他の生徒の質問について、質問にまじめに取り組んだか、応答にあたって論旨が明快であったか、(質問者についても同様である)。などが評価項目として考えられる。その項目ごとくA、B、Cの3段階を設けそのうちの一つに○をつけさせる、また短い文で評価を記入させる場合も考えられよう。

そして最後に教師が評価用紙をまとめて評価のまとめを行なう。

次に、この自己、および相互評価について留意すべきことをあげると。自己評価の場合、生徒の大体の傾向として自己を過小評価する傾向がある、これを調整しなければならない。次に相互評価の場合、評価の責任者という意味で記名させるのが適当と思われる。

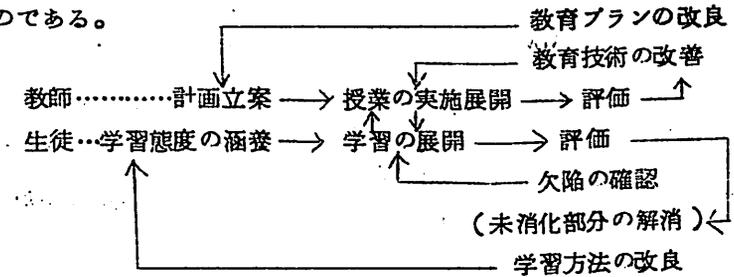
最後に、なぜ評価するのか、という評価の意義、目的を生徒に理解させ、さらに相互に評価することによって、お互いの学習、思考が弁証法的に深められることを認識させたい。そして、お互いのけなし合い、ゴマすりによっては何も生まれないことを自覚させたい。

倫理・社会における評価とその問題

都立本所高等学校 勝田 泰次

I [評価をどのようにとらえるか] 評価が次の図式の中で、授業の展開のフィードバックとして占める位置の重要さは、おそらく異論はあるまい。授業を送信とすれば生徒の反応は返信で、これなくして通信は成立しない。

教師と生徒の活動の場における作用・反作用の状況を把握する、唯一の手段が反作用たる生徒の反応——これに対する評価である。毎日の授業も、生徒のようすを判定しながら進めているのが現状で、授業と評価とは表裏一体をなすものである。



II [評価手順構想] A, 知識・記憶・推理などを中心(含、技能)1.10分前後の小テスト(更紙 $\frac{1}{4}$ 大)基礎的専門用語を主とする。1題1点, 2レポート(年1回), 読書感想文(夏休み課題)評価の観点ア, はりさげの深さ, イ 論理の一貫性, ウ 見方が総體的か一面的か, エ 資料を有効に駆使しているか, 豊富さ, 正確さ, オ 自己の生き方への関連性の有無, 例50, 40, 30, 未提出0点 3. 問答 単純な内容で, 単に記憶の反覆でしかないもの, 例1点, ヤ>高度の比較, 理由づけ, 推論などの解答, 5点 4. 30分のテスト・復習テスト 授業中におけるすべての指導内容を含む, パラエティに富んだもの, 客観テストと論文体テスト 配点度1:1の割合

B いわゆる態度等 1. 質問・発言の回数と質, a質も高く, 回数も多い, b質は並だが, 回数が多い, c質は低い, 回数が多い。例 abcの順に5.3.2点 2. 学習態度 熱心で積極的——向上が著しい。成績は低い

が努力している。例10点 3. 参加度 欠課・遅刻については、目立つ者（明らかに怠けが区別できる）減点？ 以上A・Bの領域における、評価のすべてぶちこんだものを平常点Uとし、定期考査Eと合算する。生徒ごとにU+Eの値を求め、学年評価の時は年間通算する。

Ⅲ〔倫・社目標からの評価〕ねらい，“人間尊重の精神を社会生活に実現しようとする態度を養う”倫・社も社会科の一科目であるから、当然評価しなくてはならない。他面において、道德教育との結びつきは深く、独自のアプローチが指摘できる。この辺が倫・社の特異性であり、指導における評価はどうあるべきかという問題とも関連してくる。

新指導要領における目標の面では、倫理的価値や倫理的実践ということが入ってきて、かなり、前より明確化された。これまでも、知的領域の知識・理解の測定には各種の方法が評価に利用されている。しかし、倫理的価値、何が尊いのか、人格とは何かということに気付かせ、それに対する生徒の主體的なかわり合いなど、道德性の評価には困難な要素が多だけに敬遠されてきた。以下の例は“指導のねらい”に即応させた道德的な問題を設定し、生徒をこれに反応させるものである。

Ⅳ〔倫理的価値と人格の形成〕にかかわるブレ・テスト例

次の文は、今からほぼ半世紀前の大正9年（1920年）に発行された、或る文書から抜きだした「忠実」と題する一節である。おつなの行為（動）に関して論評せよ。

おつなの行動——「おつなは若狭のりょうしのむすめで、十五才の時、子もりぼうこうに出ました。或日主人の子どもをおぶって遊んでいると、一匹の犬が来ておつなにとびかかりました。おつなはおどろいて、にげようとしたが、にげるひまがない。きゅうにおぶっていた子どもをじめんにおろし、自分その上につぶせになって、子どもをかばいました。犬ははげしくおつなにかみついて、多くのきずをおわせましたが、おつなは少しも動きませんでした。そのうちに人々がかけつけて、犬をうちころし、おつなをかいは

りして主人の家にかえらせました。子どもにはけががなかったが、おつな
きずは大いそう重くて、そのために、とうとう死にました。……」

A 自分自身このようなことに出会ったら、自分は男であるから犬に立ちむ
かうと思う。しかし、おつなのしたことは、はっきり言ってあまり感心しな
い。おつな自身どういう気持からその子を守ったかにもよるが、もし、おつ
なの家が貧しくて、おつなを子守り奉公に出したのなら、このおつなのえら
んだ行為こそは人間社会の犠牲にほかならない。というのは、もし、この子
が死んでおつなが無事だったら、おつなは死ぬ以上に苦しまなければならな
かったであろう。主人や世間の人にうらまれるよりは…… という気持ちで
こころするよりしかたなかったのではないかと思う。

B おつなの行動は、“自分に与えられた仕事の責任を完全に果たした”とい
う面では、確かに問題なく、立派であったといえる。しかし、なにかを犠牲
にしなければならぬと知ったとき、はたして自分さえ犠牲になればという
考えは必ずしもよくないと思う。道徳的にはよいこととしてあてはまると思
うが、人間性の問題とすると、誰れの生命だって同じなのであるから。もし
私だったら、自分が死んでまでかばおうという気は出てこないかも知れない。
きっと子供を背負ったまま、大声で助けを求め、犬とたたかっていたことだ
ろう。だから、おつなの行動は客観的にみた場合は問題なく立派だったとい
えるが、私自身はなかなかそのようには行為できない。

C 自分だったら犬をけとばしてしまいうだろう。しかし、おつなは女だ。で
もこれはある程度当り前のような気がする。忠実と題する一節だそうだが、
ぼくは忠実ということばはあてはまらないように思う。なぜなら、これは主
人の子供だから助けたのではないだろうし、人間が人間を助けたといった方
がいいように思う。ぼくは、これが人間同志のふれあいのよさではないかと
思う。ここで子供を置いて逃げていくような世の中になったら、この世も生
きた心地がしなくなるだろうし、そのようにしてはならないと、ぼくは思う。

D この話は、尋常小学校の修身に出てくる話だと思えます。おつなは、犬

がやってきたとき、逃げずに子供を助けたことは、とっさのことでありまして、良心がそうさせたと思うのです。私だったらどうかというと、犬が飛びかかってきたら、叫んで助けを求めると思うのです。つまり、おつなの行動はとらないと思います。時代の相違かも知れませんが、おつなのように、とっさの判断ができないと思うのです。おつなは、日頃からよりよく生きようとしていた人間だと思うので、おつなは悔いることなく、とっさにそういう行動をとることができたのだと思います。私自身はこういう態度をとれないとしても、いつも自己をみつめている態度が素晴らしいと思います。

彼女の行動は、それまでの日本では、奉公人としてあたり前のことであったろう。しかし、その当然の行為というのは本当に勇気のいるものだ。彼女自身、好んでその行為をとったかは疑問に思う。正義感でとっさに子どもをかばったのかも知れない。私はそうであって欲しいと思う。もし、彼女が奉公人の使命として子どもを守ろうとしたのだとしたら、彼女の死は、あまりに一方的で自分の気持なんてこれっぽっちもない。おつなは死んで“ああ忠実な子だった”と言われるだろう。しかし、それが何になる、自分の意志に反した行動をしてほめられたって、何になる。私はおつなが自分の意志で行なったと思いたい。主人へよりも自己に忠実であって欲しい。

上記以外の大多数の生徒の反応は「おつな」が自分の命を捨ててまで子供を守ったことは、極めて美しい、人道的行為であった、と感動をよせている。しかし、少くともここで問題にされたことは、犠牲的精神を含むヒューマニズムであり、個人主義を中心とした合理精神であった。こうした明らかに矛盾したものを自分自分の中に同居させている。

他者へおのれをつくすことが自分を生かすこと、自分をより本来の自己ならしめるきびしさ。そして、何よりも一人ひとりが大切にされ幸福でなければならぬこと。この問題を、徳目主義に陥ることなくもっと、お互い学ぶ必要がある。さらに、生徒にとっては、現在の自分の力を一歩越える形での精神的緊張と試行錯誤をともなった討論の中で、各目の考えが深められて行くならば、そこに学ぶべきものがあるのではなからうか。

古代日本人のころ

都立葛飾商業高等学校 浅香育弘

㉒ とりあげた理由

日本の神和・万葉の歌・十七条憲法等を通して古代日本人の心を学習することは、日本の思想の源流をさぐることであり、世界における思想の源流を学ぶのに似て、人間の原点・日本人の原点に立帰ろうとすることである。記紀にみられる神話の非科学性や幼稚さを笑い、或いは記紀製作の政治性を疑い理性主義に感わされず、虚心に神々を崇めて生きた古代人の心を理解させたい。万葉の歌を通し清明さを求めた古代人の心にふれさせたい。

孔子も「詩三百一言以て之を蔽えば云く思い邪なし」と古代人の心情をたゝえた。元祿俳人宝井其角に古代人情性（素朴な心・文芸と娯楽の未分化）が色濃くあらわれていると指摘する人もいる。（今泉準一著、桜風社刊）

古代人の心を再検討し、再評価する時期に来ていると思うが、現代の高校生は古代日本人の心をどう理解し、どう評価するか発問し、導入としたい。その前に吾々自身がどう評価すべきかが問われていると思うが……

㉓ 指導の方法と観点

(1) 指導の方法 学習内容の検討に当っては、商業高校生の実態に即し、現代に処してどう生きていくべきかの視点から内容を精選し、人生観では8人の思想家を選んで研究課題とし、それを中心に学習していくことにした。（その他はこちらで補なった。）今年西洋でソクラテス・キリスト・ルソー・マルクスの4人、東洋・日本で孔子・シャカ・道元・漱石の4人と東西半々を選び、偏らないようにした。思想の源流を重視した点と、現代の思想的混迷の打開策として東洋・日本の思想を重視した点が精選の視点である。

平生の授業形態として、1学期「現代と人間」では、時間毎に研究テーマを提出し、教科書を読ませ、考えさせてから、生徒数人に答えさせ、その後もう一度こちらで基本的事項を整理し、板書するか口述筆記させた。その方

が関心をもつようである。2学期以降「人生観」の学習では、夏休み中の課題研究－思想家毎に読むべき図書（原典の現代語訳文庫本）を選定し、研究テーマを示し調べさせてレポート提出－を中心に発表させ、それをもう一度こちらで整理し、まとめている。

そして1・2学期を通じ生徒のノート（大版）をページごとに学習記録欄と、感想意見記入欄に分けて記入させ、学期ごと2～3回提出させている。このようにして、聞く・読む・話す・書くの各分野を通じ、自ら学び・習い・考える態度を身につけさせることをねらいとしている。

(2) 授業展開の例「古代日本人のころ」

①前時「西洋と東洋」（東書版）の復習と、本時の導入課題設定質問

②本時の授業内容のまとめ

1. 敬神崇祖の風・自然崇拜・祖先崇拜の合したもの－天照大神崇拜

・祭政一致→祭を通し政(マリアト)を行い、生産と生活向上祈願

2. 清き明き心・自然美・人間関係に清明さを求め生きることを願った。

・ツミ・ケガレの除法 → ミソギ・ハラヒ
罪 穢 禊 祓 による(三貴神生成)

3. “和”を重んずる心

・心清く誠あれば、互いに情愛かよい和がえられるとした。

(姉弟神の誓約神話 万葉相聞歌・防人の歌等)

・和を以て貴しとなす 共是風夫の自覚のもとに実現を期した

③これに関する質疑・感想発表と次時予告

(3) 評価の観点

①古代日本人はどのような生き方を理想とし、願ったかが理解されたか

②古代日本人の心は日本人の心の故郷・日本思想の源流であるとの認識に基づき、古典を通じ学びとってこころとすると意欲ができてきたか

③現代の思想的課題である人間性の喪失状況に対し、古代日本人の生き方感し方が示唆を与えてくれるとの自覚をもつようになったか

② 評価の方法

倫社の評価は特にむずかしい、科目設立以来の問題であろう。私も暗中模索の連続で今日に至っている。しかし教科である以上評価が要求されるので迷いながら評価をふしてきた。学期毎1回～2回の定期考査のペーパーテストではこゝ数年記述式の問題を2問～4問出し書かせている。テストは生徒各自の学習成果のあらわれであるから、どのように理解し受取るようになったか、理解度・思考力・文章表現力・問題への取組み方などを総合的に検討し、生徒に評価し、また自ら反省していく上で重視せねばならぬと思う。しかし果して学期1・2回のテストだけで生徒1人ひとりの学習成果を正当に評価できるかどうか不安である。そこで勢い平生の授業態度（質問への答え・発表・ノートのとおり方等）、レポート提出（夏休み課題、その他適宜）、ノート提出等を重視することになる。ノートについては前にもふれたが、学習記録欄の右側に感想意見記入欄を設け、その時間毎あるいはテーマ学習毎に学習内容についての各自の感想意見を記入させることにしている。そして学期ごとに2～3回提出させ、点検し、こちらも簡単な感想・意見を記入し、A・B・Cの評価をふして返すようにしている。（課題提出も同じ）生徒により精粗の差はあるが、概していえば皆よく書入れているといえよう。そしてテストと平常の評価を総合することにより、より公平な評価をと願っている。以下に本単元（2時間）の評価問題例と生徒の反応を示す。

評価問題例と生徒の反応（3学年女子クラス対象の奥徳分析）

- (1) 古代日本人の心の特色について説明し、また各自の感想意見をのべよ
- (2) 聖徳太子の「和を以て貴しとなす」の教えはなにを強調したものか。

またどう思うか各自の感想意見をのべよ

授業中の反応やノート点検、テスト結果等を通してみた生徒をまとめてみると、神々のとらえ方では、人間や鳥獣や山川草木や太陽・月など威力あるものすべてを神と崇めたことについて、一方ではばかげて幼稚だという気もするが、この時代の人々が自分達のもっていない不思議な威力あるものに敬

虔の念をもった感受性のゆたかさ、心情の純粹さにむしろうたれたという意見が多かった。そして日本には究極の神が存在せず、或る神に祈りを捧げることで同時に八百万の神々に祈り守られていると信じたことに、古代日本人の包容性・かたよりのなさを感じたようである。また神々を敬い祖先を崇めることは感謝の念を捧げ加護を祈願し、あわせて心情の純粹さ、清き明き心を求めることだったということについても、抵抗なくうけとめる者が多かった。それがどの程度強くアピールし、持続していくかはわからないが……

次に古代日本人が律法や道のような客観的価値を求めず、清らかな自然を愛で、偽りのない人間関係を大事にして清き明き心を求め生きることを理想とし願ったことについても、素朴で自然で清く明るく心というのはどんな時にでもあてはまる人の心だと思うとうけとめ、そこに人間本来のあり方を感じて、今の日本人はこのような心情の純粹さを求めることを忘れ見失ってしまったが、同じ日本人だから根底には必ずある筈だとし、大事に受継いでいきたいと意見をのべる者が多かった。そして神話・万葉集等を大事にし、親しんでいきたいと感想をのべる者も出た。一方で現代のように世の中が複雑になり、人間が純粹さを失い墮落してしまえば、到底よみがえらせることは不可能だという悲観的意見もあったが……

聖徳太子の和を以て貴しとなすの教えについて、たゞ人間関係の協力の大事さを説いた教えとのみ思っていたが、人間関係における協力・親密・平和の根底に、円満で調和のとれた人格形成の必要を合わせ説いたものと教えられ、たしかにそうだと思った。共是凡夫の自覚反省をもつことを始め、憲法17条はすべて「和」を達成するための方法をのべたものであることをしった。太子の和の思想は仏教や儒教をたくみに生かしながら、その根底に日本人の心が発揮されていると気づいた者も結構でた。もっともクラスにより授業に多少なりと精粗があると、生徒の理解度に違いができることは反省される。誤りを伝えはしないかとの恐れの方が強いが……。評価は永い時を待たねばならぬような気もするから、所詮便宜的なもの、仮りのものだと思う。

都立池袋商業高校 池上 裕

はじめに この「論文」は、「紀要」にのせるようなチャンとしたものではなく、紙のムダ遣いになってしまうであろうことをお断りしなければならぬ。卒直に言って、実は、私には、本年度のテーマが、どうもよくわからない。あるいは、納得することができないのである。いま、ここに至っても、よくわからない、執筆要項基準をみても納得できないのである。そのため、この「論文」は、執筆要項基準にある、*a* とりあげた理由、*b* 指導の方法と観点、*c* 評価の方法という三つの柱通りの文にはならないことを断っておきたい。

また、少々、舌言を言わせてもらえば、いままでやってきたことが、まとまって、それが「紀要」になるならば、わからないなんてことはないのだろうけれど、現在の分科会活動が、「はじめに紀要ありき」というあり方——いかえれば、「紀要」のための分科会活動——になっているのではないかと私には思われる、抜本的に考え直してみればどうだろうか。

私に割当てられた項目は、「親鸞」であるが 何故、「親鸞」をとりあげることかという点からのべてみたい。

私達が、日常生活を、普通、送っている時は、何も考えなくとも(いや、何も考えないからこそと言うべきだろう)生きてゆける。しかし、そのような日常性が、突然、プチこわれた時(カミの言葉を借りれば、不条理に目覚めた時、とでも言おうか) それは失恋でも、親しい者の突然の死でもあるいは何でもいいが 私達は、まさに、自分が、孤独(ひとりぼっち)であること——独りで生まれて来たのであり、独りで死んで逝くのだ——を思いしらされるのである。そしてその時、私達は、宗教のもつ深い意味にふれることができるのである。(そういう意味からすると、授業で宗教<例えば親鸞>をやるのが、こちらの期待する効果とは逆のものを導き出す可能

性もあるので、その点、十分注意しなければならないと思われる)

そこで、授業計画の中のどこで、「親鸞」をとりあげたか、ということであるが、次のように考えてみた。

◎人間について ○「人間」とは何か ○古代ギリシアにおける人間観(プロタゴラス、ソクラテス、プラトンなど) ○キリスト教における人間観(イエス、パウロ、バスケルなど) ○仏教における人間観(仏陀、親鸞など) ○近代ヒューマニズムにおける人間観(シュヴァイツァーなど)
○「人間」と「非人(間)」とが峻別される意味について

そこで、「親鸞」についていうと、「人間存在の罪(業)の深さ」ということについて、パウロの「ローマ人への手紙」の一節(7。14~24 中心点は「わたしの欲してる善はこれをしないで、欲してない悪は、これを行なっている」と、「歎異抄」の一節(第二段と第三段)とをプリントして、それを材料として行なってみた。

授業の進め方は次の通りである。まず、原始仏教時代の出家中心の考え方が、何故、大乘仏教になると在家中心となってきたかについて、教いを中心として——いかに言えば、「ボサツと衆生」との関係について——説明を行ない、次に「仏性」についての解釈の変わり方についてのべた。ついで、鎌倉仏教が起ってきた社会的背景、および、それ以前の日本仏教の各派との違いなどにふれた後、「親鸞」の教えについて説明をした。

…念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、ころくにゝおぼしめしておはしましてはんべらんは、おぼきなるあやまりなり…親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと…信ずるほかに、別の子細なきなり。念仏はまことに浄土にむまるゝたねにてやはんべらん。また地獄におつべき業にてやはんべらん。惣じてても存知せざるなり。たとひ法然聖人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう…いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし…。

善人なをもて往生をとく、いはんや悪人をや……煩惱具足のわれらば、
いつれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるを、あはれみたま
ひて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたて
まつる悪人、もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ、まし
て悪人はと、おほせさふらひき。

アミダ仏の本願（第18願）を信じて、南無阿弥陀仏と唱えることは、易
しいことなのだろうか。寺や仏像をつくることよりも易しいことなのであろ
うか。親鸞は、南無阿弥陀仏（アミダ仏に帰依する）といえは救われる、他
には何もする必要がない、と言っている。だからこそ、それは、易行と呼ば
れ民衆の間に浸透していった。今までは、仏の教いなんかは関係ない — 寺
院を造ったり、仏像を造ったり、寺に寄進したりすることのできな — そ
ういう所で生きてきた人々に、南無阿弥陀仏と唱えればだれでも救われる、
それは、正に、革命的なことであったと言える。しかし、ただ念仏すればい
いということ — そして、それを信じること、そのことは、きわめて難かし
いことだ（ここが分るかどうかが一つのポイント） 引用した文章は、その
ことを表わしている。子供の管鸞が反逆し、関東の信者たちが動揺した。親
鸞の教えには何も秘密はない。ただ念仏するだけ。しかし、それでは易し
すぎるのだ、そんなんで本当に救われるのだろうか — そう思うのが人情であ
る。だから、最も易しいことは、最も難かしいことなのである。本当に、念
仏すれば救われると信じられるかどうか、そのことをよく考えてみよう。そ
してその難かしさが、実感としてわかるかどうか……残念ながらと言おう
か、当り前と言おうか、生徒には、ほとんど、わからなかったようである。
やさしいことはいいことだ — 多分、生徒はそう考えているのではないか。
そして、宗教とは、ある程度、体験の裏付けがない限り、理解できないので
はないかと思うので、こちらの力不足も、もちろんあるわけだが、そこが、
やはり、一番難かしいのではないだろうか。

もう一つのポイントは、やはり、善人と悪人についてであろう。普通、私

達が生活している時用いている(?)価値観は、倫理的に善か悪か。一人と人との間で - ということである。しかし、宗教的にいう善と悪とは、明らかに、それとは違う。ある一つの事とってみても、倫理的立場からみるのと宗教的立場からみるのとでは、善悪が逆転していることがある。何故なら、宗教は道徳と共通の範囲をもってはいるが、道徳をのり超えた所がある。そここの所が宗教のもつ一つの特長なのだと言える。ただ、「歎異鈔」のこの解釈には、色々な説もあるし、また、色々考えることもできるのだから、自分なりに考えてみよう、そして、ある事をみても、一方的に、善いとか悪いとか言わずに考えてみたらどうだろうか……しかし、どうしても、生徒達は、従来 of 価値観から抜けだせないようだ。考え方は、ある程度は、頭で納得できる所もあるらしいが、反発を感じている者もいたようである。

今年、授業でやってみて一番失敗したと思うのは、原文のまま、古文でプリントをしたことであった。私の学校では、古典は二年生からやるので、文を読めない生徒も多く、こちらでした訳を追っかけるのが精一杯で、文の意味をじっくり考えさせることができなかった。一般的に言っても、倫社の時間に、古文や漢文をそのまま使っても - 文体やリズムが失なわれるのは惜しいが - あまり意味がないのではないか、むしろ、現代語訳をもとにしてやった方がいいのではないかと思われる(ヨーロッパの原典は、ギリシア語やドイツ語ではなく、現代日本語訳で読んでいるのだから)

宗教を授業でとりあげるのは難しいことだと思う。宗教は、知性に関わるものではなく(頭である程度は分かるにしても)、人間の「実存」(第三者ではいられないという意味での)に深く関わっているものだからである。

最後に、執筆基準によれば、ペーパーテストを必ず、ということだったがテストをしてないのであげられないことと、また、評価とは、つまる所、自己評価だと思うので、このような形式になったことをお断りしておく。

石 田 梅 岩

都立志村高等学校 木村正雄

〔とりあげた理由〕 最近の生徒は、さまざまな能力をもった集団として指導しなければならなくなっている。それにはさまざまな原因が考えられるが、まず、そのような実態をふまえて指導ももう一度出発点にもどって考えねばならないと思う。哲学者などというとすぐに敬遠してしまふ傾向さもあり、また、原理をつかもうとせずに現象面だけにとらわれやすい。そこで、生徒の身近かに考えられる人物を精選したのがこの梅岩である。生徒の保護者の職業構成が料理店・飲食店・販売業などであり、その意味でも身近かな教材と考えた。日本の思想を取扱う場合にも庶民の思想家として梅岩が適切であろうと考える。しかも、梅岩は日常生活においても仏・儒・神の三教を融合している点で今までの源流思想として学習してきたものをふり返り、応用することにもなり得る。

〔指導の方法と観点〕 (1) 梅岩の生涯と江戸時代の社会的状況 ①生い立ちと思想形成とのかかわりあい、②師、小栗了雲との出会い、③徳川吉宗時代の施策とのかかわりあい

(2) 思想内容の特色 ①心学 — 儒教を本に神・仏三教の融合

② 思想の中心 { 「性」「心」「無私」 — 「儉約・知分」「忠孝」
社会の職業・身分 — 「天地の理」 — 「正直」「勤勉」

③ 營利追求の肯定 士農工商の立場の平等
商人の道 { 正直と思ひやり、儉約・勤勉、施行
商人の学問の必要性、五倫五常の道、商家生活の改革

④教化の方法 講釈、問答、瞑想工夫、実践

⑤心学の発展と影響 中沢道二、手島堵庵 家訓や教訓の流行

⑥心学への批判、 聡明な現実主義、 体制を容認

⑦心学の現代的意義、「性」および「商人の道」等のあり方

現代の動向，明倫舎，参前舎，明誠舎の活躍

(3) 資料 ①心学 「性を知る時は，五倫五常の道は其中に備れり。中庸に所謂、『天命之を性と謂ひ，性に率ふ之を道と謂う』性を知らずして性に率ふことは得らるべきにあらず。性を知るは学問の綱領なり。…心を知るを学問の初めという。②儉約・正直 「士農工商おのおの職分異なれど，一理を会得するゆへ，士の道をいへば農工商に通ひ，農工商の道をいへば士に通ふ。なんぞ四民の儉約を別々に説くべきや。儉約をいうは他の儀にあらず，生れながらの正直にかへし度き為なり。天より生民を降すなれば万民はことごとく天の子なり。故に人は一個の小天地なり。小天地ゆへ本私欲なきもの也。このゆへに我が物は我が物，人の物は人の物。貸したる物はうけとり，借りたる物は返し，毛すじほども私なくありべかりにするは正直なる所也。此の正直行はるれば，世間一同心和合し，四海の中皆兄弟のごとし。我が願ふところは人々ここに至らしめんため也。（齊家論）③商人の道，士農工商は天下の治まる相となる。四民かけては助け無かるべし。四民を治め玉ふは君の職なり。君を相くるは四民の職分なり。士は元來位ある臣なり。農人は草莽の臣なり。商工は市井の臣なり。商人の売買するは天下の相なり。細工人に作料を給るは工の祿なり。農人に作間を下さるゝことは是も士の祿に同じ。天下万民産業なくして何を以て立つべきや。商人の買利も天下御免しの祿なり。」「商人の其始を云はば，古は其余りあるものを以てその不足ものに易て互に通用するを以て本とすとかや。商人は勘定委しくして今日の渡世を致す者なれば，一錢輕しと云べきに非ず。是を重て富をなすは商人の道なり。」（都鄙問答卷之二）

(4) 授業の展開 ①生徒が調べてきた梅岩の生涯や思想について，感想や意見を含めて発表する。②生徒発表に対して質疑応答。この場合，調査や研究の方法，経過など，さらに理解できたこととできなかったことなども含む。③教師の補足説明と辯義。生涯と思想形成とのかかわりあいや師との出会い。資料①をもとにして「心学」を，②③をもとにして「儉約」「正直」「商人

の道」など思想の核心にせまる。資料は生徒自身に読ませ、意味を読みとらせる。教化の方法にもふれ、ソクラテスの対話や孔子の論語などとも比較させる。また、儒教、仏教、神道の学習もふりかえさせる。そして、心学への批判と現代的意義商行為の道義化についてふれる。④梅岩の考えを学んで、学ぶべき点は何かについてグループごとに話し合わせる。⑤生徒の研究発表についての評価と感想を全員が書く。⑥教師の簡評。

〔評価の方法〕 ①倫社の評価を次のように考える。すなわち、指導目標と関連してくるわけであるが、結局、知的理解と思考の深まり、広まり、内面化がなされたかどうかということである。評価の方法としてはペーパーテスト、レポート、小論文、研究発表、問答、話し合い等が考えられ、それらを総合した評価が適切と考える。②梅岩の評価の観点として、梅岩の生きた時代の社会的背景と思想形成の経過が理解できたか。心学とは儒教を本にした仏・神の説を加え平易な言葉と通俗の比喩を用いて説いた実践道徳の教えであることの理解。当時の社会体制の中でつくりあげた人生哲学であるとともに苦悩と調和への努力がみられることへの理解。「性」と「心」の関係、さらに「儉約」「忠孝」「正直」さらに「天地の理」など心学の核心が理解できたか。營利追求の肯定や商人の道などが理解できたか。儒教、仏教、神道の考え方がよびおこせたかどうか。林羅山、中江藤樹、伊藤仁斉、山鹿素行、二宮尊徳らの考えと異なる点が理解できたか。資料が読めるようになり、その意味が理解できたかどうか。梅岩の生き方と考え方を自分の考え方や生き方にどう生かそうとしているか。梅岩の考え方に適切な批判ができるかどうか。グループごとの話し合いには、梅岩の考えの核心にふれているか、またその考えを積極的に理解しようとしたり、適切に批判しているかどうか。研究発表者に対しては、梅岩の考えを自分なりに理解しているか、発表の方法として板書や資料など適切に準備されているか、発表態度として声量、姿勢など聞く方にとっても望ましい態度であるか。一方、発表をきく生徒に対しては、あらかじめ予習してあるかどうか、積極的にきいて学んでいく態度が

みられるかどうか、質問や意見などの回数や質はどうかなど。

(評価問題例)

1. 次の文の()の中に、下記の語群から最も適切なものを選べ。

18世紀のはじめころ、京都の町人である石田梅岩は、(ア)学を説き、多くの(イ)たちに支持された。この学問の目的は人間の(ウ)を知ることを考える。この立場から(エ)をもとに仏教、神道の考えを融合させ、(オ)における道徳的実践を説き、町人ばかりでなく多くの庶民にもその教化に大きな役割を果たした。その教えの主なことは、「(カ)」と「(キ)」であり、前者は正当なしかたで利益をあげるとか、所有や契約関係をきちんと守ることであり、後者は物の効用を最大限に発揮するとともに人を生かすことでもある。

正直、儉約、心、日常生活、町人、性、農民、儒教

2. 次の各々の設問に答えよ。

(ア) 儉約をいうは他の儀にあらず、生まれながらの正直にかへし度き為なり。天より生民を降すなければ、万民はことごとく天の子なり。故に人は一個の小天地なり、小天地ゆへ本私欲なきもの也。

問 一 線の意味を向う。また、この文の意味を書け。

(イ) 学問ノ道他ナシ。其ノ放心ヲ求ムルノミ。学問ハ行ヲ本トス

心ハ言句ヲ以テ伝ラルノ所ニアラス。 形ニ由ル心。

問 以上の各文の意味を問う。

3. 次の各問に適確に答えよ。

医者之道とはどういうことか。商人はなぜ学問しなければならぬか。士農工商の道はなぜ平等と考えられるか。なぜ「儉約・知分」が必要か。

4. 梅岩の考えを あなたの現実の生活の諸問題と関連させながらのべよ。

5. 「石田梅岩と都鄙問答」(岩波)をよんでレポートする。(1200字以上)

(問題点) 生徒は知識・理解と梅岩を身近かに感じ関心を示すが、内容の深まりまでには繰返しのべたり番かせたりしなければならぬと思う。

福 沢 諭 吉

都立国分寺高等学校 菊 地 堯

㉔ とりあげた理由

- (1) 日本の近代思想の一典型としての実学の主張に象徴される福沢の学問観を素材として、学問の意義について考えさせる。
- (2) 福沢の独立自尊の主張を素材として、個人の自覚の意義及び個人と国家の関係について考えさせる。
- (3) 現代の南北問題にかかわる問題として、福沢の生きた、幕末期から明治前期の日本の歩みについて知ることを導入として、上記のねらいに結びつけていく。
- (4) 日本の思想の学習は、主として国民としての自覚の問題を考えさせることが主なねらいとなろうが、ここでは外来文化や思想と自国の文化的思想的伝統とに対する態度について考えさせる。

㉕ 指導の方法と観点

(1) 導 入

1840年のアヘン戦争のもたらした、アジアの植民地化の完成期と日本のおかれた、世界史的な状況について、要約してつかませる。

1853年の黒船の日本への衝撃の内容と、それに対する国内の動きを、政治の表舞台ばかりでなく、坂本竜馬、勝海舟など、当時の青年が模索した日本の進路の問題をつかませる。

福沢諭吉の人となりや、年表や自伝の一節などから概略をつかませる。

(2) 展 開

1) 実学のすすめ - 自由と独立の前提

学問ノススメ冒頭の教節の読解。先天的には平等に生れた人間が、実生活で、天地雲泥の差を生じるのは、実学の有無によること、実学とは実生活に役だつ学問・知識・技能・技術をさすこと、実学を身につけることが、一身・

一国の独立の前提条件であることを読み取らせる。

2) 一国の独立と一身の独立 - 独立の気力の必要

学問ノススメ、文明論之概略の読解。欧米先進国からの外圧の中で、これらと比肩し得る日本となることへの気魄、そのためには国民各個人が、独立の人でなければならないこと、論理的に対等である国家関係も人民に独立の気力がなければ、東洋、アフリカ諸地域のよりに實際上独立を失うおそれがあること、独立心は愛国心につながること、愛国心は人民の個人としての独立が前提であり、また制度的に保障されるべきことを読み取らせる。

3) 外来文化への態度 - 文明の国をめざして

文明論之概略の読解。欧米先進国の文明の結果としての産物の輸入に汲々とするのでなく、それを生み出した、能力や精神に学ぶ必要があること、特に政治制度や思想、学問、道徳心の面が大切であることを読み取らせる。一言にしていえば、有形において数理学無形において独立心を西洋に学べということ。

4) 福沢諭吉の思想と現代のわたくしたち - ディスカッション

ディスカッションのテーマ

a 自由・平等・独立の問題について福沢諭吉に学ぶべきもの、批判すべきものは何か。

b 学問の意義について、福沢諭吉の主張をどう考えるか。

ディスカッションのねらい

a 個人の独立・平等・自由の問題と国家の独立・繁栄の問題とのかかわりはどうか。文明開化・富国強兵のスローガンとその後現在までの日本の歩みを考えあわせて方向を探らせること。

b 学問は直接・間接に実生活に役立つことを目的として行うべきものかどうか。直理のために直理を求めるということは無意味なのであろうか。現在の学習と自分自身とのかかわり方の実態をふくめて考えさせること。

㉒ 評価の方法

(1) 評価の考え方

まず、一般的にいて、倫社の評価は、生徒の倫理的実践の総体にまでは及び難いことを指摘しなければならない。従って、評価は理解、論理的考察力を主体とすることになる。また、最低限度必要な学習事項の記憶も除外すべきではないと考える。しばしば、暗記が悪徳視される傾向があるが、これは正しくない。事態は逆であって、生徒は理解できないものを暗記する方向に逃避しているのであり、その逃避した地点から暗記が無意味という発想をする傾向がある。これは、学習意欲欠如の一現象形態である。教師としては生徒の理解を深める点に第一の努力を向け、その基礎の上に主体的・論理的考察力をひき出す授業の設定に努めるべきであろうと思う。

そこで、具体的な評価問題の設定においても、以上の視点をふまえれば、虫食い型（語句補充）、関連発見型（A群・B群のつなぎ）、短文解答、長文解答など、どの形をとっても差支えないものと考えている。

(2) 問題例とそのねらい

いま、われわれが、明治維新直前の福沢諭吉になったと仮定して、次のような主張や、人々の実際の姿にふれた場合について、批判や意見をまとめなさい。（福沢諭吉だったら、彼の考え方からして、このようにいうであろうということを書きなさい。）

1. 日本はすぐれた文化的伝統をもっている国であるから、外国の文化に学ぶべきものはない。外国との交際や貿易はやめるべきである。外国人が無礼を働いたら、追ひ払え。
2. 日本は、文化の遅れた未開の国であるから、外国のすぐれた産物を輸入するばかりでなく、日常生活一切を外国風にしなければならぬ。

3. 学問とは、日本の文学や漢文、儒学を身につけることであり、そろばん、記帳などは学問をする人には無用のものである。
4. 何かの問題について意見をきかれた場合は、専門家にまかせる、と答え、すべて他人に頼って暮していけばいい。

ねらいとしては、福沢の独立心、実学、文明化の主張がつかまれているかの評価である。記述式は、評価がむずかしく、手数がかかるが、生徒の理解（又は誤解）がはっきり出るので、教師の反省には有効と思う。評点は、ねらいが書けているか、一貫した説明になっているか、まとめ方が適切であるかを総合して与える。字数制限は他の出題とのバランスできめる。

なお、評価問題は、福沢論吉を単独で扱うことの他に、他の思想、たとえば、功利主義・プラグマティズム、ルソー・ロック、などとの共通点や、合理論・唯物弁証法、ヘーゲルなどとの相違点、他の日本の近代思想家との異同について、その異同の内容を答えさせる形も考えられる。この場合は、記述式よりも、関連発見型・選択肢型の方が適しているであろう。

(3) 生徒の理解度など

福沢の思想は、理解しやすい。困難な術語・概念も少く、時代の課題に密着している点が、その理由と思われる。しかし、他面、原文が文語体（自伝を除く）であるため、読解には古典の学習のような困難があるが、口語体に直した資料などを与えることにより、解決できよう。

- 指導資料 原典：「福翁自伝」（岩波文庫他） 人物への親近感から思想へ
「学問ノススメ」（同上） 短かいので通読容易
「文明論之概略」（同上） 比較的理論的に厳密
- 参考書：「福沢論吉」（清水書院） 革新的立場からの福沢観
「福沢論吉」（岩波新書） 保守的立場からの福沢観
「福沢論吉」（ ） 他の原典の一部も所載

キリスト教思想と日本 — 「内村鑑三」

洗足学園第一高校 高野啓一郎

<とりあげた理由> 私の年間授業計画は生徒の身近かな問題から入って、思想（哲学、宗教）の入口にまでゆけばよいということを前提としている。また、そのとき「倫社は、人間はいかに生きるべきかを問う」実践的教科だとするまえに、「人間とは何か？」を知る教科であるとする。「人間」を知ることとおして「自己」を開示することの不思議さに見たされる教科でありたいと思う。従ってそれは何よりも「人間との関わりに関する知的教科」であると考えerわけである。すなわち、「個人→社会→世界」へとひろがる「人間とその環境との間のあるべき関係」について、全的・総合的にとり扱い考察する教科である。

そこで「日本の思想」をこのような「世界観的視野」からとり扱いばあい考えられるいくつかの欠点があげられるが、その第一は、その思想家が時代の現実を直視しそのなかで苦闘した生々しい体験が、ある意味で概念化されるときには倭小化される傾向はないのか。それは生徒にその偉人との出会いを靈感させることを希薄化させることにならないか。とくに鑑三のような札幌農学校における情熱と聖霊にみたされた友情と伝道の生々しい体験が希薄に対象化されてしまうことにはならないか。

これに対する私の答えは次のようなものである。一なるほどそのとおりではあるが、しかし、札幌の広漠たる原野のなかで鑑三が外人宣教師よって授けられたキリスト教のイメージがアメリカの現実社会にふれたとき無残に破られてゆくのは逆に、生徒の感覚はすでに既成の価値観をすべて打ちこわしている。そのうちこわされた方は未だ多くの誤認や錯覚をふくんではいても、直感的な鋭さをもっている。それだけになおさらすべてに対し拒斥的であるといえよう。それにもかかわらず私たちが彼らに対して世界観的な態度を養なおうとするとき、まず「知的態度」を回復させたいと思う。ひとりひ

どりの思想家の実践的態度を情熱的に問うとともに、その「世界観的比較」によって生徒の人生観が理性的に選択・決断されることとなろう。このような比較と選択との精神作業は出会いの靈的直感を減少させることなしとしなないが、このような精神作業をこえた実践と行動力が若い人々に要請される日本の位置と時代とが来ているのであると思う。

〈指導の方法と観点〉「内村鑑三」については、私のかなり勝手なやり方ではあるが、「キリスト教」の全体を十二月から一月にもってきて、ここで「日本におけるキリスト教」も同時に扱う。しかし、ここでは近世の天主教の概要にとどめる。一学期の「個人に関する部門」がかなり時間をとり、二学期に入って「社会に関する部門」のなかで「民主主義と人権思想」に関するところで「功利主義」と「マルクス主義」を扱っておく。したがってXマスの前後にかけて「キリスト教」となり、これに「仏教とその日本の受容」がつけき、さいごに「明治以後の日本の思想」として「諭吉と鑑三」を比較してとり扱うことになる。日本における正しい意味の哲学の定着には、このような比較思想史的な過程を経なければならぬまいというのが私の意見である。

さて、私の勤務校の生徒の素質や女子校ということの制約から、私は以上にあげた「世界観」の部分は発表学習でなく講義学習を中心としている。講義によってはっきりと焦点を示すように考えないと、生徒相互の発表ではどうしても散漫で内容がない。グループ学習による発表形式の授業展開を終局的にはめざしていても、そのためには、あるテーマをしぼって準備期間も十分にとり、さらにそのテーマを細分化して与えたいと無理なのである。具体的には「明治以後の思想」のみをこの学習形式にあてているわけである。

昨年度の例でいうと、すでに「都倫研紀要11集」に発表したのが、「日本における女性思想家」というテーマにしぼって発表学習をおこなったわけであるが、今年度はこれを「福沢諭吉と内容鑑三」にしぼってところみる予定である。できればこれを「西田幾多郎」にまでひろげて、明治における功利主義、キリスト教、禅宗の日本的包摂にまで比較的手法でふれたいわけであ

るが、それは未だ現実の日程にまではのぼるまい。

<評価の方法> 授業展開の方法としては、「福沢諭吉」グループと「内村鑑三」グループにわけてそれぞれ5～6名単位の3グループとする。そして次の課題を受もつ。

(A)諭吉のグループ課題 (i)「福翁自伝」をよみ適塾における青年時代の諭吉を紹介せよ。(ii) 福沢の天賦人權の思想とはどういうものか、その考え方はいままで学んだどんな思想と関連しているか。また当時のわが国の思想界にどんな影響を与えたか。(iii) 諭吉のいう「実学」とは何か。また彼は国家についてどのように考えたか。

(B)鑑三グループ課題 (i)「余はいかにしてキリスト信者となりしか」をよみ、札幌農学校における青年時代の鑑三を紹介せよ。(ii) 鑑三の無教会主義とはどういうものか。その考え方はルターの思想とどのように関連するか。彼は日本キリスト教との関係をどのようにとらえたか。(iii) 正義と平和について鑑三はどのように考えどのように発言したか。その歴史的な意義について考察せよ。

資料としては全員に上記二著作の文庫版をもたせたいところだが、課題の全体にわたるような部分の抜萃をプリントにして与え、かつ学年末試験問題にもその範囲内で答えられるように用意する。そして上記二著作を5～6冊ずつ私の手もとに用意して必要に応じて貸出すことにしている。(もっともいくつかの学校でみたように社会科学準備室に生徒に自由に貸出せる大きな図書室がほしいところだが)。

このように課題を細分化してグループ学習にわらすことは、生徒の学習すべきポイントを明確化しともかく学びやすくする効果はあるのだが、反面の欠点として研究意欲の高い生徒の自主研究の芽をつみがちであるもので、二学期後半から三学期にかけて私の示す「思想家一覧表」のなかから一人の思想家の著作をえらばせて「読書レポート」を提出させている。年間を通じて評価の対象となるレポートはこれと、次のグループ研究の「報告レポート」のみである。

よく行なわれているように、年度はじめに全生徒をまずグループ分けして発表させてゆくやり方は、少くとも私の経験では成功していない。これには先輩生徒のレポートや論文が学校に集積整理されていていつでも参照できるようにされていることが必要だと思ふ。私のところはその点も不備であり個人の「倫社日誌」、学級の「倫理記録」なども実施できないでいる。

三学期末におこなり試験について「鑑三」に関してのみいえば、北北

- (i) グループ研究において扱ったテーマの各自の「報告レポート」にもとづき、それを発展させる形で意見(批判)を述べよ。(予告問題)
- (ii) 前期3題をさらに細分化したものから1題選択。(説明的なもの)
- (iii) キリスト教、仏教などからの客観テスト形式のもの2題。(簡単なもの)

「明治以後の日本の思想」については今年度は未だ日程に入っていないので一昨年の例からみると、(i)の意見や批判に関するもので、鑑三の札幌農学校での生活についてあまり感動的なものがみられないのに反省させられた。あの若々しい求道の息吹きが伝わっていないのは残念である。無教会主義については、「キリスト教のなかでいくつもの派が分れており、あの派はわるいからこの派に入れなどとよく聞く。そんなことをして神様はどう思うのだろう。神の存在を否定するわけではないが、みんなそれぞれ神を信じてその人の中に神が生きていればそれでいいと思う。その点鑑三が私と同じ疑問をもち札幌に統一した教会を作り資金も自分たちでかせいで返し、さらに無教会主義にまでいったというのには驚いたという素朴な意見は、鑑三の主張を適確にいいあてている。鑑三の平和主義については「鑑三の純真な信仰が、アメリカの人種差別や偏見や物質主義をみて失望し、アメリカに対する批判がアメリカ人の反感を買ったというのはまるで現代のことを言っているみたい。日露戦争にも非戦論を唱えたいというし昔にも偉い人がいたものだった」という感想が印象的だ。

いずれもこれらを内容的に「評価する」ことはできない。私はただ、論旨の一貫性、まじめさ、レポート以後の発展という観点からその表現性にわずかな差をつけて評価するにすぎない。

東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約

1. (名称) この会は、東京都高等学校「倫理・社会」研究会といたします。
2. (目的) この会は会員相互によって、高等学校社会科「倫理・社会」教育を振興することを目的とします。
3. (事業) この会は、次の事業を行ないます。
 - (1) 「倫理・社会」教育の内容および方法などの研究
 - (2) 研究報告、会報、名簿などの発行
 - (3) その他、この会の目的を達成するために必要な事業
4. (事務局) この会の事務局は原則として会長在任校におきます。
5. (会員) この会の会員は次の通りです。
 - (1) 正会員 学校またはその他の研究団体に所属して、この会の目的に賛成する者
 - (2) 賛助会員 この会の目的に賛成し、会の活動を援助する団体または個人
6. (顧問) この会に顧問をおくことができます。
7. (役員) この会の役員は次の通りです。任期は1年ですが留任を認めます。
 - (1) 会長 (1名)
 - (2) 副会長 (若干名)
 - (3) 常任幹事 (若干名)
 - (4) 幹事 (若干名)
 - (5) 会計幹事 (若干名)
8. (総会)

総会は毎年6月に会長が召集し、次のことを行ないます。

 - (1) 役員を選任

(2) 決算の承認、予算の議決

(3) その他重要事項の審議

9. (年度) この会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に
終わります。
10. (経費) この会の活動に必要な経費は、会費その他の収入でまかな
います。
会費は次の通りです。
- (1) 正会員 学校または研究団体を単位として年額1,500
円
- (2) 賛助会費 年額 1口 2,000円
11. (細則) この会の規約を施行するについて、幹事会は必要な細則を
作ることができます。
12. (規約の変更) この会の規約の変更は、総会の議決によります。

附 記

1. この規約は昭和37年11月20日から施行します。
2. 昭和42年度総会で、会計年度と会費の変更がみとめら
れた。

事務局組織内規

S 45.1. 27 全倫研 都倫研 共通

1. 事務局は原則として会長校におく(都・全倫研とも規約改正の要あり)
2. 事務局組織は下記の通りである。

事務局 長 原即として会長校に所属する

事務局顧問 歴代の事務局長があたる

事務局 員

- ア 事務局次長(1名)
- イ 研究部長・副部長(各1名)
- ウ 研究調査部(全倫研のみ6名)
- エ 広報係(全・都各1名)
- オ 会計(1名)
- カ 分科会世話人(都倫研のみ、分科会互選・分科会で2名)
- キ 大会役員(大会ごとに委嘱する)

3. 事務局分掌

事務局 長 企画・運営・渉外などの会の実質的な事務にあたり会長を補佐する

事務局顧問 同上の目的で事務局長を補佐し助言する

事務局 員 事務局員は各分掌にあって、会の運営を円滑にするため局長を補佐する

イ 事務局次長 事務局長を補佐する。

イ 研 究 部 会の年間の研究方針をたて、研究活動全体を運営し紀要の刊行にあたる。分科会世話人は研究部に属し部長を補佐する。

ウ 調査研究部 調査活動の企画・実施・集計・分析等

にあたる。

エ 広 報 係 会の記録、広報活動、会報、名簿の作成にあたる。

オ 会 計 会の会計にあたる。ただし局長が代行することもできる。

カ 大会役員 事務局長 企画・運営の最高責任をもつ

庶務・連絡 局長を補佐する

受付・会計 文書配布物、名簿
会計にあたる

司 会 総合司会、研究発表
研究討議、懇談会

議 長 総会議長

記 録 会の広報部を中心にして組織、文書記録、テープ、写真

接 待 来賓その他の接待

4. 事務局任期

ア 事務局長は原則として2年とする。

イ その他の局員は1年であるが、再任、兼任をさまたげない。

5. 人 選

事務局長の人選は幹事会でみとめられた人事委員会があたる。

人事委員会の人選は、会長と事務局長が、原案をつくり幹事会にはかる。

また会長・局長・顧問は原則として委員会のメンバーに入ることにする。

ただし、事務局員の人選は会員の互選による。

(この内規は昭和45年度以降実施する)

事務局より

東京都立千歳高等学校 中村新吉

ともかく、この「都倫研紀要第12集」を昭和48年度の研究成果として皆さんにお届けでき、感無量です。昭和48年度は諸物価とくに紙不足による紙と印刷費の高騰に脅かされ、一時は紀要の発行は断念するほかないのかなあと気を弱くさせられた。ところが研究部長の永上肆朗先生が中心になって、各世話人にハッパをかけられて原稿をどんどん集められ、山と積まれた研究成果が会員ひとりひとりの心魂のこめられたものであることを思う時これはどうしても皆さんの願いと研究実践に答えなければならぬ、というわけでいくなれば永上さんをはじめ会員一同から尻を叩かれながら、この一書を誕生させることができた、と思っている。とくに印刷屋さん3・4軒に頭を下げ哀願しても例年の規格で35万・40万という見積りで、貧乏なわが研究会はどこからも相手にされなかった。例会や事務局打合せの時、私から出す話は「どこか安い印刷屋さんを知りませんか」であった。各研究会の事務局長さんに伺ってみても例年の3分の1位、20~30頁でお茶をにごすほかないというきびしさだった。この困窮を救って下さった方がおられる前事務局長で、現在、千代田区教育委員会指導主事の金井肇先生である。金井先生のお気持が稲や印刷さんの心をうち開いて、そのおかげでこれだけの立派な研究成果をみなさんにお届けできるようになったわけである。

客観情勢がインフレと不景気かせの吹き荒れた年ではあったが、研究活動はそれと反対になかなか充実した年であった。とにかく都倫研発足以来、話題には出されたが、統一研究テーマとしてはむずかしすぎる。という敬遠されてきたテーマに取り組めたからである。「評価を中心とした授業研究」と題された研究主題がそれである。倫理・社会における評価は各先生方ともども暗中模索か試行錯誤的にか、秘技に近い形で実施されてきた。それだけに今年度の研究成果の発表は新しい研究領域の開拓の礎石となるだろうと信じ

る。永上先生をはじめ杉原先生、細谷先生のご尽力によるものと思っています。また研究例会は多摩地区で多く開かれたが西から東から新顔の先生方が沢山参加され、時には他県の先生方も研修出張の一つに加えられて参加されたことも本会の今後に心楽しいものを残してくれた。さらにまた、今年度から「教科書研究分科会」がスタートし、多数の共同作業により量的分析を終え、質的分析が進行している。その成果がよりよい教科書の出現に役立つものと期待したい。

「都倫研」という着実に真摯な研究会の事務局の重責を背負わされて以来、とりとり最後までモタモタしっ放しであったが、千歳の桜も2度目のつぼみをふくらましつつあるし、新進気鋭の先生方も気力充実させ胸をふくらませつつあるから、身軽くなって心静かに桜をめでたいものである。事務局次長の菊地さんも同じ心境かも知れない。次々と山積する事務局の仕事を坂本さんと一緒に、卓越した才智とリーダーシップを仕事によって示し、研究活動の推進力となってくれた。ともあれ、私の如き者が創立十周年の事務局をまかせられ、二つの記念出版物を公にできたことを生涯の光栄と信じております。天の時、地の利、人の和であった。広告をとりたいというと二つ返事で先輩の先生方が取って下さり、発送作業というと疲労をもつともせず沢山かけつけて下さったし、大会とあればみんなそれぞれのポジションを気持よく遂行して下さった。ただただ冥利につきる。最後に、この2年間、特に、事務局として原動力となられた菊地さん、永上さん、小川一郎さん、坂本さん、中村佑二さん、杉原さん、木村さん、細谷さん、小川輝之さんらの諸先生方に心からお礼申し上げます。すばらしいチームワークだったと思います。そしてそれを支えてきたのはいわば部倫研魂かもしれません。そして本当に最後に、文句を一言おっしゃらずに大局から暖く見守られ、若い人たちのために尽力された徳久会長さん、ありがとうございました。

あ と が き

永上 肆朗 記

今年は何倫研1年目にあたる。「十年一昔」とすれば、今年は新たな第一年目といえるだろう。倫社のルネッサンスとでもいおうか。折しも新教育課程実施も目前である。採択教科書もきまり、もう新しいヴィジョンの下に準備しておられることであろう。本年度の特別分科会の「教科書研究」設定もこのような意図からであった。またこのような状況に対応して、今までの実績をふまえながら、今年はこれを裏側からとらえようとした。これからの倫社教育の課題は何か。倫社が知的理解にとどまることであってはならず、加えて主体的な判断力や思考力を高めていくための指導はどうあるべきであろうか。このような科目的特色や使命を自覚するとき、省みられるべきはけんきよな日日の授業実践をおいてほかにないであろう。今年は何と展望の年である。このような立場に立ってわれわれが十年の実績を今、静かにふりかえるときに、自ら「評価」をさけて通ることは不可能であるといわざるをえない。こういふ次第で構想された「評価」とはまさに倫社研究の船出にふさわしいものであった。活動は分科会毎に活潑に展開された。そこではかならずしも「共通理解」をもつことはできなかったと思うが、その意図するところ、志向するところには「共通姿勢」がえられたのではなからうか。このことは、第2回における海野氏、第5回に勝田氏によって出された試案が、いずれも「評価の問題」であったことを想起するだけで充分である。これらの過程をみて、活動が全般的に「評価」への創造的努力によってささえられたことを汲みとっていただければ幸いである。

本年も公開授業を軸として展開された。会場は期せずして、新宿・府中・国分寺・福生へと都下西郊に拡がっていった。そのため、これまでにない多くの参会者にめぐまれたことは望外の喜びである。不便な土地にもかかわらず遠路御参加下さった先生方、そして何よりも発表者、授業者の方々、さらに編集にお骨折り下さった世話人の先生に心から感謝の気持を捧げたい。

